島崎藤村・有島生馬・監修

金の船

第四巻　第五号

五月號

大正十一年四月五日印刷納本　大正十一年五月一日發行

Z32-B88
K2A-21
国立国会図書館 8.5.2?

中形と絞りは
……本年も松坂屋へ！
夏の婦人美に一番調和の好い松坂屋特製の中形と絞りは毎年流行の基準として皆様から多大の御期待を蒙つて居ります
弊店も亦皆様の御期待に背かぬやう本年は一層の努力と工夫とを凝らして五月一日より陳列會を催します。
青葉の風も爽かに訪れます、お遊びかたがた御來觀の程御待ち申上ます
東京 上野
松坂屋
いとう呉服店

平和博の日蓄特設館
ニッポノホン
是非お立寄り下さい
御馴染の「鷲印レコード」をお聞かせの上面白いお土産を差上げます
第一會場美術館前

目次

私達の鵞鳥（表紙・原色版）……岡本歸一
たたかひの跡（口繪・三色版）
てんてん蟲（曲譜）（童謠）……一……本居長世 野口雨情
犬塚（童話）……四……沖野岩三郎
泣きく天使（童話）……一三……秋庭俊彦
猿供養（童話）……一八……志村照子
見えなくなった鷄（童話）……一九……伊藤溫子
義經の奥州下り（史譚）……二三……窪田空穗
おるする（童謠）……三三……人見東明
居眠り王様（童話）……三四……水谷まさる
雨（募集童謠）……四〇……野口雨情選
てんとう蟲の宴會（推薦童話）……四〇……白江好郎

山姥の歌（傳説）……四八……藤澤衛彦
一騎打ち（童話）……五〇……三島章道
綱引き（幼年詩）……五七……佐野ひな子
慾ふか大盡（童話）……五八……川崎春二
かまど姫（童話劇）……六三……中島孤島
家なき子（名作童話）……七三……三宅房子
螻のねぼけ（童謠）……七八……若山牧水
栗原生先（自由畫）……八一……山本鼎選
ユキノウタ（幼年詩）……八〇……若山牧水選
出來ごと（綴方）……八〇……編輯部選
通信……八八

（附錄）

長篇物語 父戀し（第四回）……沖野岩三郎
――無人島――

たたかひの跡

岡本帰一畫

丘の頂上に近いところに、二つの人影の蹲まつてゐるのが天使の目に入りました。それはまだ年若い女と小さい娘でありました。その二人はひざまづいて、頭を垂れ下げながら泣いてをりました　それを見たとき、天使は可哀いさうに思つて、二人のそばへ近づきました。

（「泣き泣き天使」の十五頁を御覧なさい）

抒情詩

名作叢書

●賣ゆき空前の記録を示す本詩集を未だ知らざる者ありや？

第一編　西條八十先生　**靜かなる眉**　特に若い人々のために歌はれたる優しき詩集

第二編　水谷まさる先生　**寶石の夢**　乙女の夢の清く床しかれとの美しき涙のあと

第三編　野口雨情先生　**別後**　一讀涙なしに讀む能はざる殉情なる詩集です

第四編　竹久夢二先生　**青い小徑**　優しき詩と美しき畫二十枚とよりなる詩畫集

第五編　人見東明先生　**愛のゆくへ**　清き心は又清き詩を生む美しき詩は愛の雫より

●月下に金鈴の鳴りひゞくが如きこの好詩集を繙かれよ！

岡本歸一先生入念の繪畫

ゑはがき

◆この繪はがきを見て皆さん

◆が大嬉びだと云ふことです

おとぎゑはがき

第一輯（青い鳥）

チルチル、ミチルの兄妹が青い鳥（幸福）を捕へに出かける原色四度刷の美しい眞にこれこそ空前とも云ふべき繪はがきです。……

一組二十五錢　送料金二錢

藝術ゑはがき

第一輯（王様の馬）

誰知らぬ者もない西條八十先生作歌に音譜を附し特に意を用ゐて岡本先生が畫を御かき下さつた美しい繪はがきです。……

一組二十五錢　送料金二錢

東京神田區南神保町十六　振替東京四〇二七九　交蘭社

郵便切手で註文は二錢切手一割増のこと

白眉社編輯部編纂

音樂講話叢書

◇西洋音樂の發展につれて音樂上の諸科目の知識を得やうとする江湖の要求を醫さんが爲めに生れたる叢書であります。煩に亙らず、簡單に要領を得るよう書いてあるのが本叢書の特色で、內容種類は音樂に關するあらゆるものを網羅してありますから、本叢書を座右に備へて置けば音樂の事一として分らぬものはないのです。

內容見本進呈

〔新刊〕

(1) 樂譜の知識（本譜早わかり） 五十錢 送料四錢
(2) オペラの話 八十錢 送料四錢
(3) 聲樂研究法 八十錢 送料四錢
(4) ピアノの習ひ方 八十錢 送料四錢
(5) オーケストラの話 八十錢 送料四錢
(6) 音樂解說辭典 一圓卅錢 送料六錢

〔續刊〕

◎音樂人名辭典 ◎小謠作曲法
◎ヴァイオリンの習ひ方 ◎音階の話
◎マンドリンギターの習ひ方 ◎日本音樂の話
◎ハーモニカの習ひ方 ◎和聲學初步
◎音樂の聽き方 ◎簡易音響學
◎舞踊の話

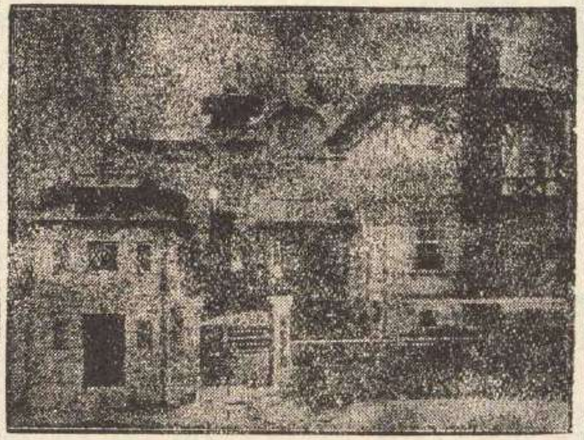
中山氏作曲 野口氏作歌 ポチの學校（新童謠樂譜(1)） 三十錢 送二錢
本居氏作曲 中山氏作曲 野口氏作歌 故鄉の唄 附 旅人の唄 二十錢 送二錢
土屋氏作曲 童謠樂譜やまばと 三十錢 送二錢
本居氏作曲 新民謠（第八編迄） 三十錢宛 送二錢
佐々氏作曲 童話唱歌（第六編迄） 二十錢宛 送二錢
山本氏作曲 創作曲譜（第四編迄） 二十錢宛 送二錢
春柳氏編 ハーモニカ速成 三十五錢 送二錢
白眉社編 マンドリン曲粹（二編迄） 五十錢宛 送四錢
白眉社編 ヴァイオリン曲粹（二編迄） 五十錢宛 送四錢

東京市外下目黑四六八
振替東京五四五九八
白眉出版社

天下の青年は何故に爭ふて**大日本國民中學會に入會する乎**

■講義が新いから
■會費が廉いから
■指導が良いから
■學制が正いから
■基礎が固いから
■講師が善いから
■卒業が早いから
■成功が慥だから

會長 尾崎行雄
學監 文學博士 [illegible] 理學博士 山內繁雄
顧問 新渡戶博士 三宅博士 井上博士 浮田博士 岡田前文部大臣



一人前の男となるにはどうしても中等教育を受けなければいけない。中等教育の學力のない者はどうしても生存競爭の勝利者たることは六ケしい。併し家庭の事情で中學に入れぬ者も決して失望するには及ばない、中學校に行かずに中學卒業程度の學問をする方法がチャンと出來てゐる。それは創立以來二十年の古い經驗のある講義錄で有名な大日本國民中學會の通信教授法である。

東京駿河臺（お茶の水電車通り）
大日本國民中學會
振替東京四二一〇〇 電話 神田三〇〇二 神田三〇〇三 神田三〇〇四

◎創立以來二十年記念大特典提供 目下新學期開講 入會の絕好機 ■

講義錄見本つき 規則書無料進呈

でんでん蟲

本居長世作曲

絵入童謠樂譜の創作研究雜誌

童謠

澄宮殿下學習院御入學を祝し記念號發行のため左記規定により童謠を募集いたします

野口雨情先生
葛原𦱳先生
藤森秀夫先生
西條八十先生
北原白秋先生
三木露風先生
（いろは順）
共選

童謠募集規定

1 題は随意。
2 用紙は原稿用紙または半紙に限ります。
3 一人三篇以下のこと　但し會員（『童謠』三ヶ月分一圓二十錢拂込濟のもの）は無制限。
4 一篇二十行以内。
5 住所姓名は一枚毎に明瞭にお書き下さい。
6 締切は四月三十日。
7 發表は『童謠』第五號誌上（六月上旬）。

賞金三百圓

一等　天賞堂特製 十八金婦人持懐中時計　一個　一名
二等　正金五拾圓　一名
三等　三越呉服店特選象眼入花瓶　一個　一名
四等　正金貳拾圓　一名
五等　中山太陽堂特製プラトン萬年筆　一個　一名
尚ほ詳細は『童謠』第二、三號をご覧下さい（定價一部金四十二錢）

□入選者發表方法□

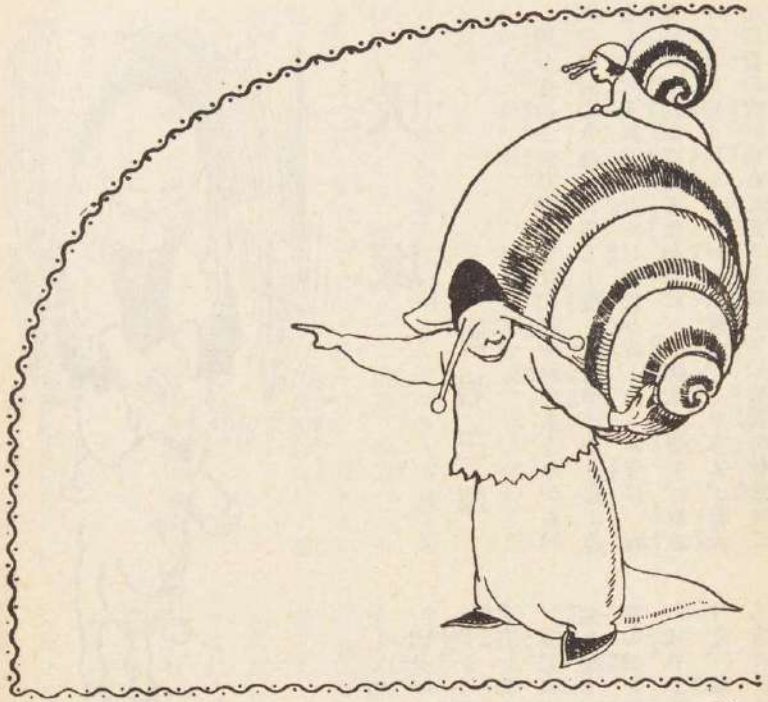
イ、一等より五十等までを入選者といたします。
ロ、入選童謠は全部第五號に發表いたします。
ハ、一等より五等までは上記の賞を贈り且つ作曲を附して演奏會を開きその名譽を表彰いたします。
ニ、六等以下五十等までは等級に應じ夫々賞を贈ります。
ホ、本會賞金の外特志家其他よりの寄贈品を抽籤により夫々入選者に分與いたします。

東京市小石川區宮下町三六番地
日本童謠協會
振替口座東京四三三五七番

でん〱虫

野口雨情

今日は　引つ越しだ
でん〱虫の
引つ越しだ
ボロ〱雨の　降つてるに
家を負つて



引つ越しだ
どこへ　引つ越した
茶の樹の葉つぱへ
引つ越した
のーろり　のろり　のろり
家を負つて
引つ越した

犬塚

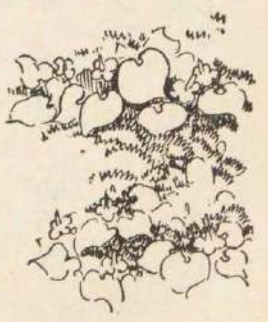
沖野岩三郎

國分寺村と法華寺村とは、隣り村でありながら、双方の村の人達は、寄ると觸ると喧嘩ばかりしてゐました。それは國分寺村の國分寺といふお寺は、禪宗寺で、法華寺村の法華寺は、日蓮宗の寺で、双方の宗旨が違ふ所から、村の人達は、どッちも、自分の宗旨の方が優れてゐると思つて、自慢の仕合ッこをしてゐたからでありました。

國分寺には眞源和尚といふ偉い和尚と、眞好といふ賢い小僧さんが居、法華寺には、妙海上人といふ名高い和尚と、妙珍といふ賢い小僧さんが居ました。

眞好は毎朝七ッ半《今の五時》に起きて國分寺の鐘を撞き、妙珍は九ッの刻限《今の十二時》に法華寺の鐘を撞く事になつてゐました。

或日の事、國分寺の眞好が、鐘撞堂から出て來ますと、裏の竹藪で、バサ〳〵と音がするので、何だらう？と思つてよく見ますと、一疋の眞白い、それは〳〵可愛い仔狗が、ノコ〳〵と出て來ました。



『先ア、美しい、可愛い狗だなア！』と思ひながら、ヒユー〳〵と口笛を吹きますと、白狗は尾を掉りながら、眞好の傍へ走つて來ました。

『まア、可愛い仔狗！　お前は一體何所から來た？』と云ひましたが、悲しい事に、仔狗は物が言へませんから、たゞ默つて、眞好の顔を見てゐるばかりでした。

眞好は可愛くて堪らないやうに、ヒユーヒユーと口笛を吹きながら、庫裡《お寺の臺所》の方へ行きました。仔狗も嬉しさうに其の後へついて行きました。その時井戸端で顔を洗つてゐた眞源和尚は、顔を拭きながら、

『それは何所の狗ぢや？』と訊きました。

『裏の竹藪から出て來ましたから、多分藪の狗でございませう？』

眞好は笑ひながら答へました。

『さうか、藪の狗なら筍の兄弟かも知れないなア。』

和尚も笑ひながら、さう言ひました。

それから眞好は、御飯を炊いてお茶を沸かしました。そして眞源和尚と對ひ合つて、御飯を食べましたが、食事のすんだ時、和尚は眞好に對つて、

『お經の中に、《狗子にも佛性あり》といふ事がある。それは狗のやうな畜生にでも、人間と同じ尊い心があるといふ事だ。だからあの白狗にもこの御飯を食べさせておやり！』と言つて、書齋の方へ入つて行きました。

眞好は正直な温順しい子でしたから、直ぐに大きな丼鉢へ御飯を一杯盛つて、それへ味噌汁を少しかけて、

『此所はお寺だから、そのお汁に鰹節は入つてゐないよ。』と言ひながら、食べさせてやりました。すると、仔狗はクン〳〵と鼻を鳴らしながら、旨しさうにそれを食べて了つて、ワン！　と一聲鳴いたと思ふと、表門の所から、ずッと田圃路の方へ走つて行つたまゝお晝になつても、夕方になつても、姿を見

せませんでした。

　ところが、その翌る朝の七ッ半に、眞好が鐘撞堂へ行つて、ゴーン、ゴーン……と、いつものやうに七ッの鐘を撞いてゐますと、また昨日の仔狗が裏の藪からノコ〳〵と出て來て、頻りに尻尾を掉つてゐました。

『おい、筍の兄弟、また來たか。』

　眞好がさう言ひますと、仔狗はクン〳〵言ひながら眞好の胸の所へ二本の前足を上げて、懷かしさうに、ぢッと眞好の顏を覗き込んでゐました。

　眞好は可愛くて堪らなかつたので、和尙に賴んでこの仔狗を國分寺の狗として飼ふやうにしましたが不思議な事には、その仔狗はどんなに可愛がつても毎朝、丼鉢に一杯、御飯を食べると直ぐ、ワン！と一聲お禮を言ひ置いて、門前の田圃路を何所ともなく眞直ぐに走つて行つて、一日中歸つて來ませんでした。

　眞好は和尙から、難かしい書物を敎へて貰つてゐるうちにも、佛前でお經を誦んでゐる間にも、時々可愛い仔狗の事を想ひ出して、うッかりしました。で、途方もないお經の讀み間違ひをしたり、とんちんかんな返事をしたりして、和尙から、ひどく叱られました。時としては如意といふ一尺ばかりの棒で頭をこつん！　と毆られる事もありました。けれども、どうしたものか、和尙に叱られゝば叱られる程眞好は仔狗に逢ひたくなりました。しかし、仔狗は朝の七つ半の鐘が鳴らなければ、決して顏を見せませんでした。

　或日の事、今日こそあの仔狗を一日このお寺に留め置いてやらうと思つて、仔狗に御飯を食べさせてゐる間に、繩でその頸のところを縛つて、柱に繩の端を繋いで置きました。けれども仔狗は縛られたまま、平氣で御飯を食べてゐましたが、御飯を食べてしまふと、すぐ、ワン！　と一聲吠えて、縛つてある繩を、ふッつりと咬み切つて、逃げてしまひました。

　其時、眞源和尙は御堂の中で、ナーム、タアカンノウ……センダンバアサラダア……と大きな聲でお經を誦んでゐましたが、お經がすむと庫裡のところへ來て、

『おい眞好、ちよいと此所までお出で！』と呼びました。

　何の事か知ら？　と思つて和尙の前へ行きますと和尙は、

『おい、眞好お前は今朝、あの仔狗を縛つたナ。何故あアいふ事をした？』と言ひました。

『はい、あんまりあの狗が可愛いから、一日此のお寺に居てほしいと思ひまして。』

『さうか、それではかうしよう。私はお前を可愛くて堪らないんだ。いつまでも此の寺にゐてほしいのだ。だから、お前が何所へも行かないやうに、繩で縛つて柱へ繫いで置かう。』

　言ひながら、和尙は押入の中から一條の細引を取り出して來ました。それを見た眞好は眞蒼くなつて

『御免下さい、御免下さい。』と泣きながら謝罪りました。

『さうか、では、これからあの狗を尋ねて行つて、（どうも私が惡うございました。御免下さいまし）といつて謝罪つておいで！』

　和尙はさう云つて、机の上の書物を手に取つて讀み初めました。で、眞好は國分寺を出て、ヒューヒューと口笛を吹きながら、村中を尋ねあるきましたが、何所にもその仔狗の姿は見えませんでした。尋ね〳〵て四ッ半（今の十一時）頃に、丁度國分寺村と法華寺村との間にある、田圃の中の小さい杜の所へ出て來ました。

　眞好は何氣なく、其所でヒュー〳〵と口笛を吹きますと、右手の杜の中で、ワン！　と仔狗の泣く聲が聞えました。

『あ、仔狗がゐる！』と思つて、急いで杜の方へ走つて行きますと、其所には法華寺の小僧さんの妙珍が立つてゐました。しかも妙珍は仔狗の頸を繩で縛

つて、その端を自分の左の腕に捲きつけてゐました。

それを見た眞好は、

『妙珍さん、それは可哀さうです。狗子にも佛性ありと言つて、狗も我々と同じ生物です。そんな事をしないで解いておやり、ね、妙珍さん！』と云ひました。すると妙珍は變な顔をして、眞好を見詰めてゐましたが、

『眞好さん、私はネ、今朝この狗をかうして繩で縛つてゐたのです。すると上人樣が、ひどく私を叱つて、〝その狗を伴れて來て、私の眼の前で謝罪れ！〟ッて仰しやつたのです。だから私は、これから此の狗を法華寺へつれて行く所です。私は今朝から今まで村中を探し歩いて、やッと今この杜の中で見付けた所ですよ。』と言ひました。

國分寺の眞好も、今朝この仔狗を縛つた事を話して、二人は、

『不思議だなア、不思議だなア。』と云つてゐる所へ法華寺村の磯右衛門といふ犬殺しが杜の傍を通りかかりました。磯右衛門はその仔狗を見るとすぐ、

『妙珍さん、それは法華寺の狗かい？　妙海上人樣は狗が嫌ひだといふ話だから、私が貰つて行きませ

うか。』と云ひました。磯右衛門に伴れて行かれると仔狗は叩き殺されるに決つてゐましたから、眞好は氣を利かして、

『いゝえ、あれは私の所の國分寺の狗ですから、私が伴れて歸ります。』と云ひました。

『あア、さうか。國分寺の狗か、私は此間、國分寺の和尚さんから、お葬式に使ふ太鼓の張り替へを頼まれてゐるんだが、その革がなくつて困つてゐた所ぢや。では其狗を殺して、其革で太鼓を張り替へてあげよう。國分寺の太鼓は破れてゐるんだから。』

磯右衛門は、さう云ひながら、ずん〳〵と杜の中へ入つて來ました。これは大變だと思つたので、法華寺の妙珍は、

『否エ、この狗は法華寺の狗です。私が伴れて歸ります。』と言つて、仔狗を引ッぱッて行かうとしました。

『はゝア、これは何方の狗でもないなア。』と悟つた磯右衛門はかう言ひました。

『眞好さんはこれを國分寺の狗だといふし、妙珍さんは法華寺の狗だといふし、どちらが本當だか解らない。だからかうしませう。今から國分寺村の人達と、法華寺村の人達とに、此所へ集つて貰つて、眞好さんは國分寺の鐘を一つ打く、それから妙珍さんは、法華寺の鐘を一つ打く、御互ひに一つづつ自分のお寺の鐘を打いてごらん。此の狗がその鐘の音を聞いて、どッちへでも走つて行つた方のお寺に、此狗を飼ふやうにしなさい。もし、鐘が鳴つた時、どッちへも走つて行かなかッたなら、此狗は私が貰つて皮を剝いで太鼓を張替へますから……』

話してゐる所へ、通りかゝつた五人の若者が、

『それは面白い、どッちが勝つか、やッて御覧。』と言つて、早速法華寺村と、國分寺村とへこの事を言ひ觸しました。

平生から仲の善くない、双方の村の人達は、磯右衛門の事などは、そッち除けにして、

『眞好さんに勝たせて上げねばならない。』

『妙珍さんに勝たせて上げねばならない。』
と言ひながら、吾一に何百人とも知れない男女が、わア〳〵と集つて來ました。

其所で眞好と妙珍は、相談の上、群集の中の、一番正直で公平な濱之助といふ爺さんに、仔狗の番を賴んで置いて西と東とへ別れました。

妙珍が法華寺へ歸つた時は、丁度九ッ（今の十二時）の刻限で、いつも正午の鐘を九ッ撞く時でした。

今までこの仔狗は、毎日國分寺の七ッの鐘が鳴ると、國分寺へ行つて、朝御飯を食べて、法華寺の九ッの鐘が鳴ると、法華寺へ行つて、其所でお晝御飯を食べてゐたのでした。だから妙珍が、法華寺の鐘をゴーン……と撞き出しますと、仔狗は抑へてゐた濱之助の手を離れて、一目散に法華寺の方へ駈け出しました。それを見た法華寺村の人達は、一齊に、
『妙珍さんが勝つた、妙珍さんが勝つた。』と言つて囃し立てました。

ところが、間もなく、國分寺の鐘が、ゴーン……と一つ鳴りますと、やッと法華寺の門の所まで駈けつけた仔狗は、急

に國分寺の鐘が懷かしくなつたと見え、すぐ法華寺の方から引返して、はア〳〵と國分寺の方へ駈けて行きました。すると、それを見た國分寺村の人達は、皆な手を拍きながら、
『眞好さんが勝つた、眞好さんが勝つた。』と囃し立てました。

鐘撞堂の上から、この有樣を見てゐた妙珍は、
『なアに、あの狗は俺のものだ！』と言つて、鐘をゴーン、ゴーン、と二つ鳴らしますと、それを聞いた仔狗はまた、スタ〳〵と法華寺の方へ走つて行きました。

それと見た眞好は『なアに、あの狗は私のものだ！』と言つて、國分寺の鐘を力一杯にゴーン、ゴーン、ゴーンと三つ鳴らしますと、仔狗はまた一生懸命に國分寺の方へ走つて行きました。

兩方の村の人達は、皆な聲を嗄らして、
『眞好さん、しッかり……』
『妙珍さん、しッかり……』
と叫びました。最うかうなると、眞好も妙珍も負けては居られません。兩方のお寺の鐘は、ゴーン、ゴーン、ゴーン、ゴーン、と入り交つて鳴り續けました。

可哀さうな仔狗は、兩方の鐘が一時に鳴るので、どッちへ行つて宜いか解らないと見え、田圃の中をくる／＼くる／＼と、一時（今の二時間）ばかりも走り廻つてゐましたが、お終ひに、

『きやーん！』と一聲鳴いたと思ふと、田圃の中で血を吐いて死んでしまひました。

今まで、どつちが勝つか、どつちも勝てなかつたら、あの狗は俺のものだと思つて、一生懸命に眼の色を變へて、仔狗を見てゐた磯右衞門は、不意に仔狗が狂つて死んだので、

『あ、可哀さうな事をした！』と言つて、其場へ卒倒してしまひました。

兩方の村中の人達は大騷ぎをして、早速お醫者さまを呼んで來ました。そして仔狗と磯右衞門とにお藥をのませましたが、磯右衞門は息を吹き返しましたけれども可哀さうな仔狗は、どんなに介抱しても生返りませんでした。

『可哀さうな事をした。』と國分寺村の人達は泣きながら言ひました。

『本當に可哀さうな事をした。』と法華寺村の人達も泣きながら言ひました。

その話を聞きつけて、眞源和尚は、眞好を前に立てゝ息急き走つて來ました。妙海上人も妙珍を伴れて駈けつけて來ました。そして、死んだ仔狗を杜の中へ丁寧に埋めて、四人の和尚と小僧とは、聲を揃へてお經を誦みました。

今まで何事にでも反對ばかりし合つてゐた双方の村の人達も、此時ばかりは、皆な心を合せて仔狗を葬ひました。

此事があつてから、二つの村の人達は、大層仲善くするやうになつたといふ事です。

仔狗の墓は『犬塚』と言つて、鳥取の町から一里ばかり離れた所の田圃の中に、今に雨風に曝されながら、淋しく立つてゐます。（をはり）

（此のお話の材料は、鳥取の蓋芳藏さんから戴いたので、それに私の想像を加へたものです。）

泣き泣き天使

秋庭俊彦

一

天國の或る花園に住んでゐらつしやる平和の神樣に、大勢の天使が使へてをりました。この天使達は時々白い鳩の姿になつて、星の世界や下の地球へお使ひに行く役目をする外は、いつも花園に集まつて、小さい子供と同じやうに樂しく暮らしてをりました。

この花園はいつも春のやうに暖であります。美しい綠の林にはいろ／＼な小鳥が囀り、草群にはそれから其れと美しい花が咲き、清い泉は天の河原の方へさら／＼と流れてをりました。天使達は小鳥の啼き聲や泉の音に合せて歌をうたつたり、平和の神樣のお部屋をかざる花束をこしらへたりして、來る日も來る日も夢のやうに過してゐるのでありました。それは暑さ寒さも知らず、辛い悲しいことも何一つ知らない、ほんとうの平和の世界でありました。こんな處に住んでゐる天使達は何と云ふ仕合せでせう。でもこの大勢の天使のなかに、たつた一人、いつからとなく外の天使から仲間はづれになつて、怨しさうに思ひ沈んでゐる一人の天使がありました。外の者が歌つたり花を摘んだ

一三

りして遊んでゐる時にも、その天使だけは花園の端れにほんやりと坐つて、遠い遠い下の方を見おろしてをりました。

或る時、外の天使達はその容子を不思議がつて、

『あなたは何故そんなに寂びしさうにしてゐるの、何故一緒に遊ばないの。』ときゝますと、

『私はもう此處で遊んでゐるのに飽きたの。退屈で、つまらなくてしやうがないの。』とその天使は答へました。

『まあ、この花園に飽きたの？』と、外の天使達は驚きました。『そして何をそんなに見てゐるの。』

『私あすこへ行つて見たいの、下界の町へ。』とその天使は雲の間にほつと煙つて見える下の方を指しました。

『何をしに？』

『澤山の人達が集まつてゐる町だの、家だの、それから人間のしてゐる色々な事を見に行きたいの。』とその天使は寂びしさうに云ひました。

この天使はこれ迄に二三度鴿の姿になつて、下界へ神樣のお使ひに行つたことがありました。その時見て來た地球の町の賑やかな有樣や、澤山な人々の姿や、多くの珍らしい物やを思ひ出して、そこへ行つて見たくて堪らないのでした。そして神樣のお許しがなければ、無暗に下界へ飛んで行つてはならないので、それを怨んでゐたのでした。

外の天使達は、何だか汚らしい塵埃だらけな下界の町などへは行きたいとも思ひませんでしたので、その天使の云ふことを唯不思議に思ひました。そして誰れからとなく、その事を平和の神樣にお話しゝました。

すると、平和の神樣は、

『あゝ、さうか、それならあの天使を下界へ行かせてやらう。私もさう思つてゐたところじや。』と仰しやつて、直ぐにその天使をお呼び出しになりました。

そして神樣は心の中に、この天使こそ天國の使命を果す天使の一人だとお思ひになつて、何となくお喜びになりました。花園の端れにぼんやり坐つてゐた天使は、神樣のお叱りをうけるのではないかと、おづ〳〵しながら神樣の前へ出ました。

『お前は下界へ行きたいと云ふことだが、お前が今度下界へおりたら、もう天國へは歸れぬことになるぞ。お前はそれでも宜いか。』と平和の神樣はやさしくお訊きになりました。

『私はそれでも下界へ行つて見たうございます。』

『下界には辛いこと、悲しいことが澤山あるが、お前はそれでも宜いか。』

『私はそれでも構ひません、どうぞやらして下さいまし。』と天使は云ひました。

『では行くがいゝ。そして下界に住んで、下界の人達を見守つてやるがいゝ、お前の行く先々で美しい平和の兆が現はれるやうに勤めるがいゝ。』と神樣は仰しやいました。

たうとうその天使は下界へ行くことになりました。神樣は外の大勢の天使をみんなお呼びになつて、下界へ行く天使のためにお別れの集りをお開きになりました。外の天使達はめい〳〵に花束を一つづゝこしらへて、その天使に贈りました。そしてお別れの音樂をやりました。下界へ行く平和の天使は神樣にお別れを告げ、いそ〳〵と喜びながら、背中の翼に力をこめて、天國の花園の端れから、雲の流れてゐる下界に向つて旅立ちました。

二

際しもない瑠璃色の大空、一めんに灰色をした廣い〳〵雲の海、その中を平和の天使は下へ下へと急いで飛んで行きました　身には神樣から頂いた白い薄衣を着て、手には他の天使達からもらつた澤山の花束を抱へてをりました。

下界の見えるあたり迄おりて來た時は、もう夕方でありました。目の下には人影一つ見えない、見渡すかぎり茫々とした廣い野原と、處々に樹立のある寂びしい丘とが見えました。天使は賑やかな都へ下りるつもりだつたのですが、いつの間にか方角を間ちがへたのかも知れません。少し疲れてもゐましたので、とも角暫く休んで行かうと天使は一つの丘の上におりました。そこの林の傍には、澤山の新しいお墓が並んでをりました。西の山へ沈みかゝつた夕日がその墓原へあかあかとさしてゐて、荒れはてたあたりの草群に肌寒い風が吹きわたつてをりました。どつちを見ても寂びしい、物悲しい景色でありました。

その時、丘の頂上に近いところに、二つの人影の蹲まつてゐるのが天使の目に入りました。それはまだ年若い女と小さい娘でありました。その二人はひざまづいて、頭を垂れ下

けながら泣いてをりました。それを見ると、天使は急に年寄りの女に姿を變へて、二人の傍へ近づきました。

『お二人さん、私は方々の國を旅して歩く巡禮でございますが、都のあるところへは何方へ行けばいゝのでございますか。』と天使は聲をかけました。

年若い女と娘とはびつくりして顏をあげました。そして巡禮の姿を不思議さうにぢろ〳〵眺めながら、

『お婆さんは路に迷つて此處へ來たんですか。此處は停車場へ行くのに八里も行かなければならない田舍ですよ。私達は遠いところから夫のお墓詣りに來たものですが、どれがそのお墓だか分らないので、この丘の上の記念碑にお詣りして、これから停車場へ歸らうと思つてゐたんです。』と若い女は目に涙を溜めながら云ひました。

『此處はお寺の墓地なんですか？』と天使はきゝました。

『いゝえ、此處はつい二三年前に大きな戰爭のあつた處なんです。此處にある澤山のお墓は、みんなその戰爭で死んだ軍人の屍骸を埋めたんです。一日に十萬人も人が死んだと

云ふことで、それがこの丘や野原に一ぱい葬つてあるんですよ。私の良人も、その時戰死したんです。』と若い女の人は話しました。

成る程さう云へば、野原は五里も六里も向うまで荒れさびれてゐて、所々に煉瓦や、石や、古材木やが亂雜にちらばつてをりました。

天使はその話に何となく物悲しくなりました。こんな野原で一日に十萬人から人間が戰爭で死に、血が一めんに流れて、草の葉つぱまで眞赤に染つてゐた時の有樣が天使の目に浮んで來ました。そして下界には何て悲しいことがあるんだらうと思ひました。

天使は路を急ぐやうな風をして若い女と娘とに別れて、元の天使の姿になりました。そして空の上に舞ひあがつて、手に抱へた花束の花を、澤山のお墓と荒野の上へ撒きちらしました。その花びらは人の目には見えませんけれども、八方へひら〳〵と雪のやうに舞ひおちました。

すると不思議にも、今まで赤枯れたやうに茫々としてゐた墓原や荒野の草が、急に生き〳〵とした綠の色に變はり、一めんに青々と茂つて、その中に白百合や、撫子や、野薔薇やいろ〳〵な美しい花が一時にぱつと咲きました。そして見渡すかぎり景色のいゝ花野になりました。

天使は少しの間そこの空を飛びまはりながら、こんな歌をうたひました。

戰ひに死んだ、
兵士のために、
若い女が泣いてゐる。
可愛いゝ娘が泣いてゐる。

泣いて、泣いて、泣き暮らせ。
お前の泣き聲が神樣にきこへて、
戰爭をする王樣を、
いまにお審きになるだらう。

そして天使は戰爭に死んだ人達のために神樣にお祈りをあげてから、都の方をさして飛んで行きました。（つゞく）

猿供養

志村照子

毎日の日でりつゞきで、村中の田はかわききつてしまひました。村の人達は毎日鎭守様に集まつて雨乞をやりましたが、何んの功もありませんでした。この分では今年は一粒のお米もとることが出來ないのですもの、人々の心配は一通りではありません。

長者は今日もまた夕方になると、お天氣の様子を見にお家を出ました。空はよく晴れて夕やけがまつかに西の空を色どつてゐましたとても雨など降りさうな様子は見えません。どこの田も皆かさ／＼に乾いて、今にもかれてしまひさうな稲が、力なく、うなだれてゐます。

『あゝ獣でも鳥でも誰でもよい！　此の村の田に水を引いて呉れたものには、私の娘をお嫁にやるがなあ。』

長者は思はずかう云つて、ため息をつきました。

長者はこの村一番のお金持ちで、三人の美しい娘を持つてゐました。大變情深い人でしたので、何とかして村の人々を助けたいと思つてゐたのでした。

あくる朝早く起きた長者は、一人外に出て見ました。相變らず空はよく晴れて、美しい朝日が、きら／＼とかゞやいてゐました。

田へ來て見た時、長者は思はず、

『アツ』と驚きの聲をあげました。田と云ふ田は水がいつぱいになつて、昨日まであんなに弱わつてゐた稲が、皆勢よく綠色の波をうつてゐるのです。

『まあ何と云ふ不思議なことだらう。』と思ひながらも、長者は嬉しさに夢中になつてお家に歸へりました。

あくる日、長者のお家に一匹の猿が參りまして、

『私は村中の田に水を引いた猿です。どうかお約束の通り、娘さんを下さい。』と申しこみました。長者は今更びつくりして、とんでもない約束をしてしまつたと、後悔しましたがおひつきません。仕方なしに、

『色々仕度もありますから、三日の間まつて下さい。』と云つてお猿をかへしました。

さて長者は、一人お室にひきこもつて、どうしたものかと、いろ／＼思案しましたが、よい考へもうかばないので、とう／＼三人の娘のうち、誰か一人やる決心をしまして、まづ一番上の娘を呼びました。長者はよく譯を話して、『どうかこのお父様をたすけると思つて、お猿のところにいつてくれまいか。』とたのみましたが、娘は、

『お父様！　いくら何でも私はお猿のところになど行くのはいやです。』と云つてそのまゝ室を出ていつてしまひました。二番目の娘も姉と同じ様にお猿などのところに行くのはいやだと申しました。長者は仕方なく三番目の娘をよびました。この娘は大變親孝行でしたから、

『お父様！　決して御心配なさいますな。村の人やお父様の爲ですもの私が參りませう。』

とよろこんで承知しましたので、長者は涙を流してよろこんで、いろ／＼仕度をさせて、おむかへにくるのを待つて居りました。

三日の後、お猿は約束の通り娘をむかへに參りました。三番目の娘はお家の人達や村の人々に見送られ、お猿に連れられて、お家を出ました。村の人達も長者の家の人々も泣かない者はありませんでした。

娘とお猿はその日の夕方、大きな池のほとりに出ました。見るとお池のふちに大きなはちすの木があつて、美しい花が一パイに咲き亂れてゐるのです。娘は自分のお家にも丁度此の様なはちすの花が咲いてゐたのを思ひ出して、お父様やお母様や姉さまたちは、今頃どうしていらつしやるだらうと、お家がなつかしくて仕方がありませんでした。お猿は娘が何時までも、はちすを眺めて居るものですから、

『こんな花がそんなに氣に入つたのか？　わけのない事だ！　私がどれでもお前の一番氣にいつたのを一枝折つてやらう。』と申しまして、する／＼と木に登つて行きました。

『どれだ、これか？』

『いゝえもう少しさきの。』

『この枝か？』

『その一つさきの。』

お猿はずつと池の方にのび出た枝に手をかけました。そのとたんに、どうしたはづみかその枝が、ポキリともとから折れて、あつと思ふ間もなくお猿は花と一緒にどぶんとお池に落ちてしまひました。

娘は無事に長者のお家に歸へる事が出來ました。さうしてこのお池のほとりには、間もなく立派なお堂が、猿の供養のためにたてられました。

見えなくなつた鷄

伊藤温子

もしも鷄に向つて何が一番恐ろしいかときいたら、毎朝卵をとりに來る女中さんと、それから一と月に一ぺんは仲間の首をしめて殺してしまふ下男と答へるでせう。

そのほか、イソツプにあるやうな狡い狐も怖い狼も居りません。たゞ時々、意地の惡さうな三毛猫が遠くで目を光らして、まるで忍術でもつかつてゐるやうに見えて、一寸驚きますけれども、一ぺんだつて仲間を殺すやうな事はしませんから、目を光らしたり細めたりして遠くの塀の上や草蔭で武者ぶるひをしてゐるのは却つて面白い光景です。

ですから鷄達のうらみの的は女中さんと年とつた下男でした。

『それ／＼、注意しろ。』と鷄達は下男の姿を見ると叫び合ふのでしたが、いつも無駄で、すぐ首をしめられて下男の手にいくぢなくぶらさがつてしまふのでした。

『誰が食べてしまふんだらう。』

太つた旦那さんと、瘦せた奥さんと、小いお孃さんと坊ちやんと、頭の大い書生と、――さう考へると、旦那のお腹が一ばん怪しいやうです。朝なんかにこ／＼して庭に出て來ますと、みんなして足もとに寄つて殺された仲

間の聲を太つたお腹の中から聞かうとします
けれども、ゲーとも鳴りませんでした。
　ほか〳〵温い日がつゞくやうになりました
鷄の仲間は小さいのが澤山殖えました。そ
れが籠から出されて垣根の下のはこべなんか
をうれしさうに食べました。すると、いつも
近處の小さな子供がのぞきに來ました。みん
な美しい子でした。鷄にとつては安心な見物
人なのでした。けれども、こゝに大變なこと
が出來ました。夕方、瘦せた奥さんや下男や
女中が首をあつめて何か話しては鷄の小さい
仲間を數へました。どうしても三羽足りない
のです。
　小さい鷄のお父さん、お母さん、伯父さん
なんかも心配してどうした事かと相談しまし
た。かくれたんでせうか。それとも垣根の間
から外の道へ迷ひ出たのでせうか。あんな可
愛いゝ、そして小さなものを、まさかしめや
しないでせう。
　暫くすると、同じ小さい仲間が、皆なに向
つて、
『汚い子が二人して盗んで行つたのをたしか
に見た。』と報告しました。實は自分達もあや
ふく連れて行かれさうになつたのださうです
鷄のお母さんは夢中で奥さんにいひました。
『奥さん、あの子達は人さらへにさらはれた
のです。』
　鷄のお母さんが人さらへといつたので、二
三羽のものはクス〳〵笑ひ出しました。鷄の
お母さんの方ではそんな事はどうでもよいと
いふやうに、
『坂の上ですよ。そこへ走つて行つたんです
よ。』と叫びました。
　本當につれて行かれたのを見たといふ小さ
な仲間も黄色い聲を張りあげて何かいひまし
たが、奥さんには何を鷄がいつてゐるのかち
つともわからないと見えて、女中に向つてこ
んなことをいつてゐます。
『まア、鷄たちは何も知らずに騷いでゐるよ。
私なんか坊やがゐなくなつたら氣が狂つてし
まふのにねえ。』
『本當でございますとも、やはり鷄なんかは
猫や犬のやうなものでございますことね。』と
女中がいひました。
『犬だつて心配はするさ。鷄なんかのやうな
生活をしてゐるものは何の苦もないのさ。極
く單純なものだ。』
　書生は大きい頭をふり〳〵いひました。
　しかし、下男だけは『惜しいものぢや。』と
幾度もいつてゐました。そして、みんな家の
中へ入つてしまひました。
　その後で鷄のお母さんは病氣のやうにな
つてしまひました。誰が何と慰めても泣きや
めませんでした。
『私さへもつと早く知らしたら。』と、お母さ
んの泣いてゐるのを見兼ねてさつき知らせた
仲間がいひました。
　どうして知らせるのが遲くなつたかといふ
と、その時すぐ後で三毛猫がにらんでゐたの
です。幸と三毛猫は盗まれて行つた仲間にば
かり氣を取られてゐたので、外の者をすぐに
は追はうとしませんでしたが、それでも羽や
足がたゝなくなる程恐ろしくて、しばらくは
口もきけなかつたさうです。
『私はあきらめます。けれども、またとこん
な事のないよう、その汚い子が來たら注意し
なくてはなりませんよ。』
　お母さんはみんなにいひ渡しました。翌日
からまた卵はとられ、仲間はしめられるやう

になりました。
　いつぞや盗まれた子供の仲間が大人になつ
た頃のことでした。また以前のやうな出來事
が起りました。しかし今度は小さい仲間では
なくつて、前に盗まれたと知らせたことのあ
るあの時分の子供で、今は立派な大人となつ
た仲間でした。
　今はもう年をとつてゐる鷄のお母さんは、
多くの孫や子供達とまた心配しだしました。
　奥さん達は、またいつぞやのやうにあつち
こつち探したり、立話をしたりしました。け
れども、鷄の仲間はたうとう見えませんでし
た。お母さんは、またいつぞやのやうに泣き
ながら孫達に昔話をして聞かせました。孫達
は見たことのない伯母さん達の悲しい話を聞
いて大變悲しみました。けれども、その夕方
見えなくなつた仲間がどこからともなくひよ
つこり歸つて來ました。そして、よろこぶ仲
間のものに更によろこぶ事を話しました。
『私は今日垣根を越えて白くかわいた心地よ
い廣い路に出ました。郊外の路には人ひとり
居りませんでした。青々とした野が右側にあ
りました。坂の上には林がこんもりかすんで
見えました。つい浮々とよつたやうに坂を上
つて行きました。そのうちにいつぞやゐなく
なつた仲間のことを思ひ出しました。そして
坂をだん〳〵登つて何の氣なしに左側の草深
い野に歩み入りました。赤い崖があつて小さ
い小屋がありました。私は自分の小屋を思出
して歩みつゞけました。しかし、それは私達
のより遙かに大いのです。突然私はその小屋
の背後でたしかに仲間の聲を聞いたのです。
すると、小屋から汚い子が二人何やら話して
出て來ました。私はあわてゝ戻りました。』
　鷄達はその話を聞いて、大變よろこんだり
驚いたりしました。そして、一刻も早く見え
なくなつた仲間を呼んで來ようといふことに
なつて、見て來た鷄が外の一羽と一しよに呼
びに出かけました。そして首尾よく小屋の後
に遊んでゐた三羽の仲間を見出しました。
　三羽とも昔の仲間を忘れませんでした。す
つかり幸福になつて、五羽はそろつて戻りま
した。そして、みんなから歡迎されました。
　その夕方です。奥さんと下男は戻つて來た
三羽を見てゐましたが、これはきつとお隣の
鷄が迷ひこんで來たのだらうと言つて、お
隣へ聞き合したりしましたが、結局それは何
處からか迷ひ込んで來たのだらうといふこと
になつて、間もなく鳥屋の手に賣られてしま
ひました。みんなは大變に悲しみました。
『鷄なんて何もわからんのかな。三日ばかり
だが一しよに遊んだ仲間が賣られても何も知
らずに遊んでゐるんだもの。』と大い頭の書生
が女中さんにいつてゐました。
　年とつたお母さんはまた病氣のやうになつ
てしまひました。(をはり)

義經の奥州下り

窪田空穂

一

其頃京都の四條の寺に正門坊といふ坊さんがゐました。これは、今は坊さんとなつてゐますが、一體は鎌田正近といふ侍で、義朝とは乳兄弟であつた鎌田正淸の子です。義朝が尾張の國で殺された時に、正淸は討死にしました。その時に正近は十一歲で、これも殺されるところでしたが、人が隱してくれたので助かりました。二十一の時に坊さんになつて方々を修行してあるいてゐましたが、京都へ來て、この四條の寺にゐるやうになつたのです。

正門坊の正近は、京都にゐて平家の威勢のいゝのを見ると、口惜しくて堪らなくなりました。『昔は源氏と平家と、何方も負けず劣らずに並んでゐたものだ。それを、平家のこの成り上り方にくらべて、源氏のおちぶれ方といつては何うだ。心は剛い源氏のはずだ。運が惡るかつたにもせよもうよくなつていゝ時分だ。誰でもいゝ、誰か一人源氏の者が旗上げをしたら、すぐに驅けつけて働かうものを。』さう思つて、旗上げをしさうな者は誰だらうと、方々に散り散りになつて、小さくなつてゐる源氏を一人一人思つて見ました。しかしそれらの人は、京都からはみんな遠いところにゐて、ちよつと樣子を見て來るといふことはできないのです。

『鞍馬に牛若殿が入らつしやる。何んな方だか行つて樣子を見よう。若し旗上げのできさうな方だつたら、手紙をいただいて、伊豆の賴朝殿のところへ行つて御一しよにさせて、昔の源氏の家來を集めて一と旗上げよう。』

正門坊の正近はさう思ひました。

『それには、今はちやうど夏で、都合のいゝ時だ。』と喜びました。それは夏のあひだは、坊さんたちはみんな寺に籠つてゐて修行をすることにきまつてゐて、そして何所の坊さんが來てもかまはないことになつてゐるからです。

正門坊は鞍馬寺へ行つて、この寺に籠りたいと賴みますと、寺ではすぐ承知をして、東光坊の阿闍梨のゐるところに籠るやうにしてくれました。

正門坊の正近は、人に悟られないやうに牛若と話をしようと思つて、いゝ折をねらつてゐると、ちやうどいゝ晚がありました。正近は牛若のゐる部屋へ行き、側へ寄つて、耳のところへ口をあてて、

『御身分を御存じがなくて、何うにもなされずに入らつしやるのですか。あなたは、淸和天皇には十代の御末、義朝殿の御子です。手前は、義朝殿には乳兄弟の、鎌田正淸の子の正近と申すものです。御一家の源氏の方々が、方々に押籠められて入らつしやるのを、殘念だとはお思ひになりせんか。』

牛若は知らぬ顏をしてゐました。心の中では、「今は平家の世の中だ。平家の廻し者が、自分の心を試しに來たのかも知れない。」と思つたからです。

正門坊の正近は、源氏代々のことを、それからそれと話して聞せました。牛若はやうやう信じだしまして、「見るのは初めてだが、さういふ家來のあることは聞いたことがある。その家來なのか。」と思ひました。

『何にしても、一しよに居るのはよくない。悟られるかも知れない。お前は四條へ歸つてゐろ。』

といつて、正門坊の正近を鞍馬から四條へ戻らせました。

二

今までは坊さんにならうといふとばかり思つてゐた十五歲

の牛若の心は、正門坊の正近に仇討をすゝめられた夜から、俄にすつかりと變つてしまつて、今はその事ばかりで一ぱいになつて來ました。

『仇討をするには、劍術を習はなくては駄目だ。』牛若はかう思ひました。『それには、此所は多勢の寄り集り場所だから、人の目に着いて出來ない。さうだ僧正が谷へ行つてしよう。』僧正が谷といふのは鞍馬山の奥で、すぐに貴船の明神の社につゞいてゐるところです。前にはお參りする人の多い社であつたが、この頃はさうした人が少くなつて、それに夜になると天狗が出るといふ噂の立つてからは、まるつきりお參りする人がなくなつて、至つてさびしい所です。

牛若は、晝のあひだは學問をしてゐるやうな風をしてゐて夜になると、別當から身の護りにといつてくれられてゐる腹卷を附け、金の飾りの附いてゐる刀を差して、仲をよくしてゐる坊さんにも隱して、ただ一人でその僧正が谷へ出て行きました。そして第一には、明神の前へ立つて、

『南無、大慈の明神、八幡大菩薩、源氏を守らせたまへ。』

と祈りをして、それからそこら一面にある草や木を『これは平家の一門だ。』といひ、そして二本ある大木を、一本は、『これは淸盛だ』といひ『これは重盛だ。』といつて、刀を拔いて切りつけ切りつけして、滿足するまで切りました。それをやめると、今度は懷から二つのおもちやの玉を出して、それを木の枝へ吊して、『これは淸盛の首、これは重盛の首だ』といつて、氣持よささうに眺めました。

夜明け近い頃までかういふことをして、そして自分の部屋へ歸つて、蒲團をかぶつて寢て知らん顏をしてゐました。

三

牛若の世話をするやうに別當からいひつけられてゐた和泉といふ坊さんがありました。

『何うも此頃は、牛若殿の御樣子が變だ。』と和泉は氣をつけてゐました。牛若はそんなことは知らずに、夜になると何時ものやうに僧正が谷に出て行きました。和泉はそつと跡を附いて行つて、草の中に隱れて牛若のすることを見てしまひました。驚いて、急いで寺へ歸つて來て、このことを東光坊の阿闍梨に知らせました。

東光坊の阿闍梨も驚いて、下役の覺智坊の阿闍梨を呼びま

して、わけを話した上で、

『寺中に知らせて、すぐに牛若殿の髮を剃つて僧侶にしてしまひなさい。』といひつけました。量智坊は、

『まだ、さうするにはお早いではありませんか。御器量でも惡いとさうでもありませんが、餘りお綺麗なので、おかわいさうな氣がします。せめて來年の春までお延しになつては何うでせう。』

『いや、誰もさう思ふが、さういふお心持になつた以上は、このままにして置くと、此寺の爲にも御自分の爲にも宜しくない。何うでも剃てお上げなさい。』

量智坊は仕方なしに、云はれるやうにしようとしました。すると牛若は、それを振り切つてしまつて、無理にしようとしたら斬つてしまはうといふやうに、刀の柄へ手を懸けて睨んでゐました。多勢の坊さんも手が出せずにゐます。

それを見て、覺日坊の律師が、東光坊の阿闍梨に云ひますには、

『ここは方々の者の寄り集の所で騒がしいので、學問に身が入らないのだと思ひます。私の居ます方は、側寄りの靜かな所ですから、そちらなら落ちついて學問も出來ませう。』と取りなしました。東光坊もかはいさうに思つたと見えて、

『それでは、覺日坊へ行つて入らつしやいまし。』といつて、髮を剃ることは許して延してくれました。

その時、『名を變へたがよからう』といはれて、牛若は遮那王といふ名にされました。遮那王は、僧正が谷へ行くことはやめましたが、しかし仇討のことは諦めようともしず、毎日毎日、鞍馬の本尊の多聞天に、その事を祈つてゐました。

四

年が改まつて、遮那王は十六になりました。或日のこと、いつものやうに多聞天の御前に坐つてお勸めをしてゐると、そこへ一人お參りに來た男があります。その男は多聞天にお祈りをしてしまふと、そこにゐた遮那王に目をつけて、びつくりした顔をしました。

この男は京都の三條に住んでゐる吉次信高といふ大金持です。商賣は金や銀を賣り買ひすることで、それをする爲に毎年奥州へ下るのでした。今年も、明後日の朝は出懸けようと思つてゐました。そして、この鞍馬の多聞天を信心してゐるところから、道中の無事をお祈りしようと思つて、今日お參りをしたのでした。

吉次が遮那王を見てびつくりしたのは、その美しさの爲でした。『何といふ綺麗な稚兒だらう。多分立派な方の若君だらう。それだと、お附きの者が居さうなものだが、ただ一人でゐられるのは變だ。この山には、義朝殿の若君がいらつしやるとかいふことだ。その若君ではないか知ら。』

さう思ふと吉次は、それにつづいて一つの事を思ひ出しました。それは陸奥出羽の二つの國を自分のものにして、平家のいふことも聞かずにゐる清原秀衡から云はれてゐることでした。秀衡はかういふのでした。

『鞍馬の山には、義朝殿の若君が入らつしやるといふことだ。清盛が、日本六十六ヶ國を自分のものにするといつてゐるのが癪にさはるから、自分もその若君に此方へお下りを願つて、この磐井の郡へお館を建てて、自分はその守役になつて、清盛に負けないやうに威張つてやりたいものだ。』

と云つて聞せたことがある、その事でした。

『この稚兒が義朝殿の若君だつたら、だまして秀衡のところへ連れていくと、きつと澤山の褒美がもらへる。』

吉次はさう思つたので、遮那王の前へ畏まつて、

『あなたは京都の、何ういふ方の若君でいらつしやいます。手前は京都の者ですが、毎年金を商ふために奥州の方へ下つてゐる者ですが、あちらに御存じの方はありませんか。』

遮那王は吉次の云ふことを聞いて、

『この近邊の者だ。』

と云つたきりで、相手になりませんでした。だが、『これが噂に聞いてゐる金商人の吉次といふ男だな。この男は奥州の様子をよく知つてゐよう。聞いて見ようか。』といふ氣になりました。それは奥州の秀衡は、源氏からいふと家來で、ことによつたら力を借りまいものでもないと思つたからです。

『奥州といふのは何れほど廣い國だ。』

『非常に廣い國でございます。陸奥、出羽二つの國で、五十四郡と申してをります。』

『そこに、源平の亂が起つたら、役に立ちさうな侍が何れくらゐ居る。』

『秀衡の家來が十八萬騎と申してをります。この十八萬騎は

源平の亂が起るとみんな源氏のお身方をする筈のものです。」

遮那王はそれを聞いて、「それだと噂に聞いてゐた通りで、たいしたものだ。」と思ひました。そして思ひつづけました。

『思ひ切つて奥州へ下らうか。たつて頼んだら、その十八萬騎のうち、十萬騎を國へ殘して、八萬騎は貸してくれよう。それだけ率ゐて關東へ出れば、下野は父上の昔の領地だ。それに關東八ヶ國は、殘らず源氏に心を寄せてゐる國だ。十二萬騎ぐらゐは集まらうから、二十萬騎にはなる。それだと、十萬騎だけを伊豆にゐられる頼朝殿に上げ、十萬騎は木曾の義仲殿に上げよう。自分は越後の國へ出て、あすこの軍勢を集め、北陸道を攻め上つたら、やはり十萬騎にはならう。そして近江でみんなと待ち會せて、三十萬騎で都へ攻め入らう それでもまだ平家にかなはないやうだつたら、勇ましい名を殘して京で死んでも、少しも不足はない。さうだ、此奴に身分を打明けよう。』

さう思つて遮那王は、吉次を自分の側へ呼びました。

『お前だから打明けるが、人に云つてはならんぞ。私は義朝の子だ。秀衡へ手紙を一本ことづけたいが、いつになつたら返事を持つて來てくれる。』

さう云ふと吉次は座敷から地べたへ下りて、烏帽子のさきが土へつく程丁寧にお辭儀をしました。そして云ふには、

『秀衡もあなた樣のことは前から申してをります。お手紙なぞと仰しやらずに、御自身お下り遊ばしまし。道中のことは手前が宜しいやうに計らひますから。』

さう云はれると遮那王は、『手紙の返事を待つてゐるのもぢれつたい、いつそこの男を供にして下らうか。』と思ひました。

『いつ頃下るのだ。』

『明後日は日が吉いので立たうと思つてをります。』

『では、粟田口の十禪寺の前で待ち會はさう。』

『承知いたしました。』

吉次は遮那王と約束をして、鞍馬山を下りました。

五

遮那王が鞍馬山から許しなく出たのは、承安二年の二月二日の明け方でした。いよいよ出ようとすると、遮那王は六つの年から十六の今まで十年のあひだ、別當の東光坊の阿闍梨から受けた恩がしみじみと思ひかへされて、こちらへてもこら

へきれない涙がこぼれました。『氣が弱くてはできない事だ。』と思つて、旅の支度をしました。唐から來た織物の垂直に、白い袴をはき、下には敷妙といふ名のついてゐる腹巻(鎧)を著ました。そして金の飾りのついてゐる太刀と、紺の錦で包んだ守刀を腰にさしました。顔には薄化粧をして、眉は墨で細く書いて、髮は高く結ひました。いよいよ寺を出ようとすると、また名殘が惜しくなつたので、せめて形見に笛の音を殘しておかうと思つて、横笛を一時間ばかりも吹いて、そして泣きながら鞍馬寺を出たのでした。

その夜は、京の四條の正門坊の寺へ行つて泊りました。正門坊にわけを話すと、供をしたいと云ひましたが、『お前は京にゐて、平家の成り行きを見てゐろ。』と云つて斷りました。そしてその翌朝、吉次と約束してある粟田口の十禪寺の前へ行つて待つてゐると、間もなく吉次が來ました。

吉次は、いろいろの寶をつけた馬を二十四匹餘りも先へ立てて、そのあとから、草の模樣のついた直垂を著て、黒栗毛の馬に乘つて來ました。遮那王の乘る馬にしようと、月毛の馬に立派な鞍をつけたのを曳かせて來ました。

吉次は馬から下りて、遮那王を馬に乘せました。馬に乘ると遮那王は吉次に云ひました。

『暫くのあひだ、馬を驅けさせて下らう。私が鞍馬に見えないと分ると、坊さんたちが京都を捜すだらう。京都にも見えないとなつたら、東海道を下つたらうと思つて追つ驅けるだらう。摺針山のこちらで追ひつかれると、歸れといふにきまつてゐるが、歸らないと云つては道にはづれる。とにかく京都は敵の地だ。足柄山を越すまでは油斷がならない。しかし

關東へ出れば（足柄山の東は關東です）、あちらは源氏に心を寄せてゐる國だ。宿の馬を取つて乘つて行ける。白川の關を越せば、秀衡の領地だ。もう安心なものだ。』

それを聞くと吉次は『おそろしい度胸だ。馬一匹供一人もない身で、現在敵が領地にしてゐる土地の馬を取つて下らうといふのは何といふ度胸の人だらう。』と思ひました。

吉次は云はれる通りに、馬の歩みを早くしました。松坂、四の宮河原、相逢の關、大津の濱と段々に通つて、夕方は、近江の鏡の宿に着きました。

六

鏡の宿で吉次の泊つたのは、長者と呼ばれてゐる金持の家でした。二人は前から親しいあひだがらなので、長者は喜んでもてなして、大勢の女に酒をすすめさせました。吉次は、ここはまだ京都に近いところだから、人の目に着いては悪いと思つて、遮那王をずつと下の方の座に着かせました。

酒が一まはり濟むと、長者は吉次の袖を遣いて云ふには、

『あなたは毎年ここを通らない年はないが、あれ程美しい子を連れてあるかれるのは初めてのことです。あれはあなたの親類の方ですか。それとも他人ですか。』

『親類でも、他人でもありません。』

さう云はれると、長者は急に涙をほろ〳〵と落しました。

『あの方を見ると、昔の悲しかつたことが、いま目の前のことのやうな氣がしてたまりません。お顔から御様子まで、義朝殿の御二男の朝長殿と少しもおちがひにならないからです。それはさうと、保元平治この方、源氏の御子孫が方々に押籠められて入らつしやる、御成人の上何事か御思ひ立ちになつたやうな場合には、それと悟られないやうに、よくよく注意してお世話をなさいまし。壁に耳といふこともあれば、紅花は何所に植ゑても隱れないといふこともありますから。』

『いや、さう云方ではない、私の親類の者です。』

『あなたが何と仰しやらうとも。』

と云つて長者は立つて行つて、下の座にゐた遮那王を上の座に直しました。そして酒をすすめて、夜ふけると、自分の寢間の方へ案内をして、他の者とは別に寢かしました。

吉次も、酒に醉つて寢てしまひました。

ちやうどその時です。長者の家の隣りには、強盗が七十人泊つて、長者の家へ押込まうと相談してゐました。

その強盗には出羽の國の由利の太郎、越後の國の藤澤の入道、信濃の國の佐久の權正の子の太郎、遠江の國の蒲の與一、駿河の國の興津の十郎、上野の國の源八などといふ名高い者ばかりで大將株の者が二十五人、手下を加へると七十人といふ大勢です。

この大勢は東海道を強盗をしながら京まで上つて、秋になつたら北陸道の方を同じやうに強盗をして下らうとしてゐるのでした。そして今までも、金持と見ると押入り押入りしてここまで來たのです。由利の太郎は藤澤の入道に、

『京で名高い金商人が、奥州へ下るといふので、澤山の寶物を持つて隣りの長者の家へ泊つてゐる。何うしよう。』

『何うもかうもあるものか、出船に風が吹いて來たといふものだ。そいつの商物を取つて若い者にうまい酒を飲ませてやらう。』

由利の太郎と藤澤の入道が大將で、手下を六人連れて出懸けました。由利は萌黄威の腹卷（鎧）に、萌黄の直垂を着て、烏帽子をかぶり、三尺五すある長い太刀をさしてゐました。藤澤の入道は黒革威の鎧に、冑をかぶり、黒い直垂を着て大薙刀を杖にしてゐました。手下の者も皆な腹卷（鎧）を着て、そして手には松明を持つてゐました。松明はそれを向けた方だけ明るく、手もとの方は眞暗なやうに仕掛をしました。（つゞく）

おるすゐ

人見東明

坊はねてゐる
頭がいたくて。

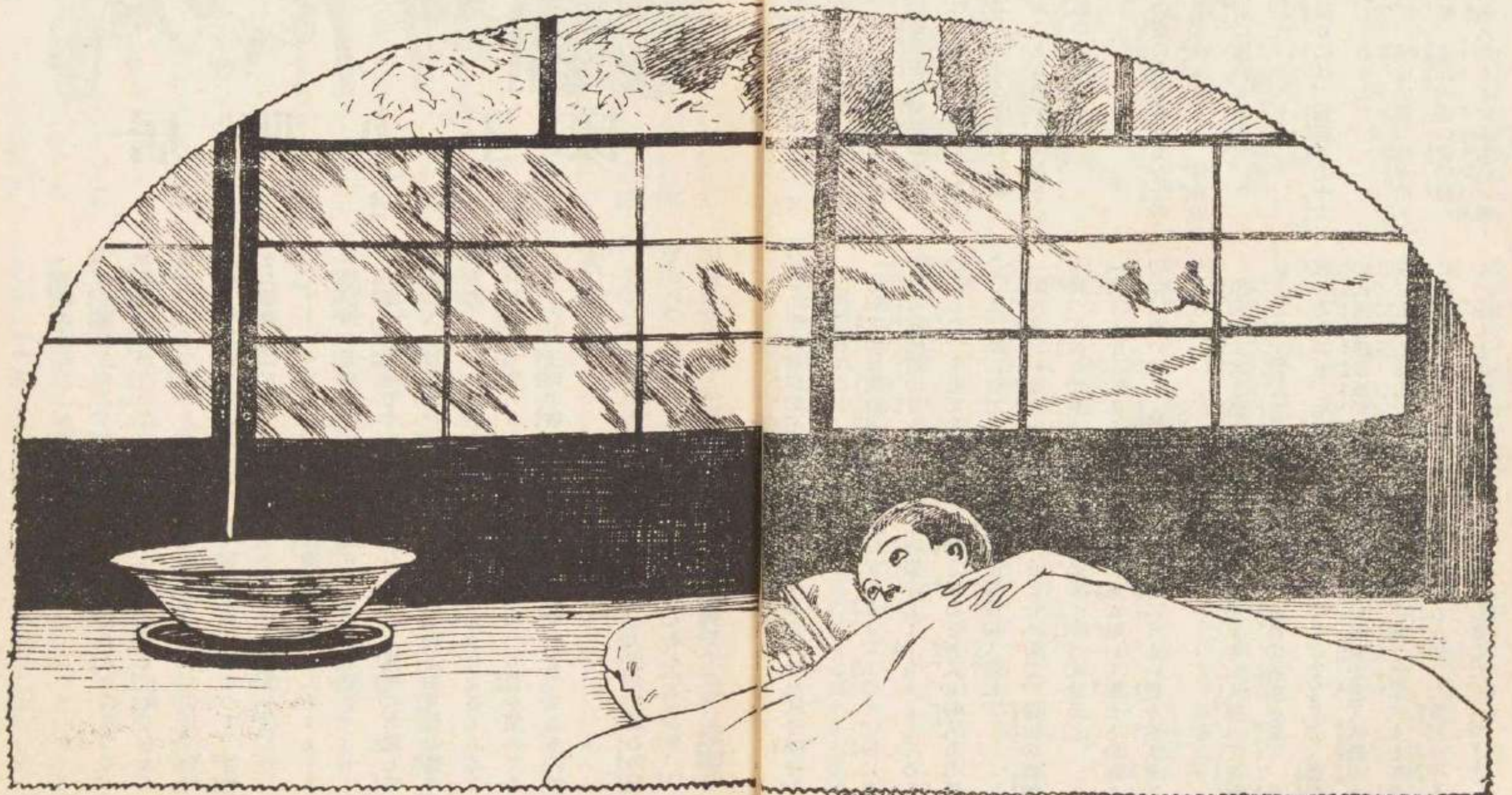
マヽさん、どこへ
行つたでせう。

雀がチユ〳〵
軒になき。
障子にお庭の
木がうつる。

マヽさん、どこへ
行つたでせう。

枕の氷が
湯になつて。
ぴち〳〵鳴るのが
さみしいに。

マヽさん、どこへ
行つたでせう。



居眠り王樣

水谷まさる

（一）

王樣はほんとにお寢坊さんでした。

お星樣がきら〳〵光り出す頃から寢床にお入りになつて、お星樣の光が白くなつて、薄くなつて、やがて消えてしまふ頃まで、ぐつすりとお寢みになるのです。それだのに、いつたいどうしたつていふんでせう。寢床をお出になつて、着物をお着換へになつて、顏をお洗ひになつて、御飯を召しあがつて――いゝですか、ここまでは滯りなく濟むんですよ――お腹が張つて來ると、すぐに居眠りをなさるのです。

王樣の居眠りですもの、大臣たちは、さう無暗にお起し申すといふわけにはいきません。また少しぐらゐお身體を搖ぶつたり、つゝいたりしたつて、すぐにお起きになるくらゐな淺い居眠りぢやありません。蛤の貝がぴつたり蓋を閉めてゐるやうに、王樣の瞼はきつしりくつついてしまつてゐるんです。

ほんとに仕樣がありやしない――とは、大臣たちが心の底で、いつも呟やいてゐる言葉でした。でもそんなことを、口に出していつて、運わるくどうかした拍子で、ふつと王樣のお眼がさめて、お耳に入らうものなら、とんだことになつてしまいます。仕方がありませんから、大臣たちは王樣のお傍で、たゞもう靜かに聲も出さぬやうにして、ひとりでにお眼がさめるのをお待ちするのです。お眼がさめたら、御覽に入れなければならぬ大切な書類や調書なぞを、てんでに小脇に抱へてゐるのは勿論です。

けれど、困つたことには、王樣はなか〳〵お眼をおさましになりません。ゆつたりと椅子にお身體を埋めて、こくりこくり頭を振つていらつしやいます。大臣たちは、まるで大時計の振子と、睨めつくらをしてゐるやうなものです。面白くもなんともありません。眠つてゐる王樣は、いゝ氣持かも知れませんが、大臣たちはいゝ加減くたびれてしまひます。

何か面白い夢でも御覽になるのか、王樣はをり〳〵お唇の邊りに、小波のやうな微笑を浮べたり、鼻にかゝるやうなお聲で寢言をおつしやつたりなさいます。

そんな時は、大臣たちは思はず顏を見合せて、かうしてお傍に控へてゐることの情なさを、つく〴〵感じ合ふのです。まつたく、これほど馬鹿らしいことは、さうたんと世の中にありませんものね。まるで、隣の部屋から匂つて來る御馳走の匂を、お腹をすかして嗅いでゐるやうなものですもの！

ふいと、王樣がお眼をおさましになります。そして、大きな欠伸の一つ二つをなさることでもあれば、それこそ大へんです。大臣たちはほら來たと云はんばかりに、どや〳〵と王樣に近づいて、

『王樣！　この書類を御覽下さいませ。』

『王樣！　隣國のお使が來ましたから、お遭ひ下さいませ。』

『王樣！　調書にお眼をお通し下さいませ。』

『王樣！　陸軍大臣が死にましたが、いかゞ取計らひませうか。』

こんなふうに、てんでに申しあげるのです。けれど、たいていの場合は、

『わしはまだ眠い。よいやうにしておけ。』ぐらゐのお言葉があるばかりで、またもや氣持よささうな居眠りが初まります。家來たちは、がつかりして。萎れ切つてしまいます。

よいやうにしておける事柄ばかりでもないし、よいやうにしておいて、後で叱られることがあつても困ると考へますの

で、大臣たちはまたしても、以前の通りに、王様がこの次にお眼をおさましになるのを、待つといふわけです。
　それが、毎日〳〵のことなのですから、大臣たちもほとほと困つてをりました。政治もさしつかへるし、いろんな不都合も出來ました。殊に夕方までぐつすり寢ておしまひになるやうなことも、珍らしいことではなかつたのですから、大臣たちの困るのも無理はありませんでした。
　それにしても、何てお寢坊な王様なんでせう！

（二）

　この國の政治が、大へんに廢れてゐるといふ噂は、隱さうにも隱しやうがありませんでした。まつたくのところ、王様がお寢坊のために、政治は少しも捗どらず、人民からも苦情が出てゐました。
　この噂を聞いて、喜んだのは隣國の王様でした。この時機をはづさずに、攻め込んで行けば、きつと勝じるに異いないと思いました。
　そこで、すぐさま大軍を起して、堂々と攻め込んで來ました。勇み立つた王様は先登に馬を驅つて、一擧にしてこの國のお城を、乗り取つてしまはふといふ、大へんな意氣込みでした。
　驚いたのは、こちらの大臣たちです。隣國の敵が押し寄せたといふ報知を聞いて、青くなつて震へ上つてしまいました。
　とにかく王様にお知らせしなければと思つても、相變らず王様は居眠りに忙がしい仕末です。大へんな場合だから、お起し申さうといふことになつて、寄つてたかつて搖ぶつてやつとお眼をさまして
『王様！大へんでございます。隣國の敵が押し寄せました。』
と申しあければ、
『わしは眠い、よいやうにしておけ。』といふお言葉で、またもやぐつたりとお身體を椅子に埋めて、夢のつゞきでも御覧になつてゐるらしい御容子です。
　大臣たちは、ます〳〵慌てゝしまいました。けれど、敵が來たと申しあけても、びくともなさらずに、居眠りをなさる王様の大膽さには、かなり驚かされました。とにかく、何とか相談を定めて、よいやうに取計らはなければ、危險は刻一刻と迫つて來る場合です。そこで、大臣たちは額を集めて、あれこれと相談しましたが、なか〳〵巧い智慧も出ません。主だつた軍人たちも呼ばれて、この相談に預りましたが、不意をうたれて攻め込まれたのですから、やつぱり巧い方法もありません。
　とゞのつまり、あらん限りの力を盡して、このお城を守るといふことになりました。そこで、すぐさま兵隊を集め、ぐるつとお城を、幾重にも取り卷かせました。
　やがて、勝ち誇つた隣國の敵は、一氣にお城を攻め落さうといふ意氣込みで、攻めてまゐりました。忽ち烈しい戰爭が初りました。
『王様！　いよ〳〵敵はお城の間近に攻めてまゐりました。』
　一人の大臣は、王様を搖ぶり起して、かう申しあけました。けれど、やつぱり同じこと、王様は欠伸と一しよに、
『さうか。わしは眠い。よいやうにしておけ。』と、おつしやつただけです。
　大臣はあきれてしまいました。けれど、この騷がしい戰爭の物音の中で、平氣で居眠りをしていらつしやるやうでは、王様はよつほどお偉い方なのかも知れないと、あべこべにほと〳〵感心してしまひました。
　このことは、大臣の口から傳へられて、それからそれへと擴がつて行きました。お城の外が必死に戰爭をしてゐる兵隊たちの耳にも、やがて殘らず入つて行きました。

『この重大な場合なのに、王樣はびくともなさらずに平氣で居眠りをしていらつしやるさうだ。こんな偉い王樣を戴いてゐる我々も、びくともせずに敵を打たなければならぬ。』

だん／＼傳はつて行くうちに、王樣の偉さはとても大したものになつてしまひました。そして、このことを耳にした兵隊たちが、百倍もの勇氣を出して、戰爭をしたことは勿論です。そのために、たうとう美事に敵を食ひとめて、お城を守ることが出來ました。勝ち誇つた敵は、お城のちかくまで、せつかく攻め寄せながら、さん／＼な負けかたをしてしまひました。

先登に馬を進めてゐた敵の王樣は、哀れな最後を遂げてしまひました。

（三）

『王樣！　我軍は勝ちました。』

一人の大臣は、またもや王樣を搖ぶり起して、喜び勇んでさう申しあげました。

『あゝ、さうか。それはよかつた。』

王樣はさうおつしやつたばかりで、やつぱりまた居眠りをなさいます。

大臣はまたも感心せずにはゐられませんでした。

『王樣はほんとにお偉い。普通ならば飛び上つて喜ぶのに、さほど心もお動かしなさらずに、居眠りをなさるなんて、とても我々には出來ないことだ。ほんとに何てお偉い王樣だらう。きつと、神樣のやうなお心を、持つていらつしやるに異ひない。』

大臣は感心したあまりに、たうとう王樣をば、神樣のやうな人にしてしまひました。このことも、またそれからそれへと傳はつて、やがて人民たち一人殘らず、王樣を讃へるやうになりました。

かうなると、戰爭が起る前に、お寢坊な王樣のために、政治が捗どらなくて、いろ／＼不都合なことが起つたことなんか、けろりと忘れてしまつて、こんな偉い王樣の下に暮してゐられるのは、何て幸福だらうと、思ふやうになりました。

大臣たちは、もはや王樣の居眠りを、困つたものだと思ふやうなことはありませんでした。

『よいやうにしておけ。』といふ、王樣のお心持を察して、てんでに偉い王樣のために、一生懸命に政治に力を盡しました。

そんなわけで、この國はます／＼よくなりました。

ところで、皆さん。かんじんの王樣は、そんなことは一切御存知ありません。たゞ、この頃はみんなが、俺の居眠りの邪魔をしないので、大へんさつぱりしたと、思つていらつしやるだけなのです。

だから、いつも朝の御飯をあがつてしまふと、窓から照りこほれる朝日の光を、暖かさうに上半身に受けて、こくりこくりと頭を振つていらつしやいます。

迷ひ込んで來た羽虫や蠅なぞが、ちら／＼羽根を光らせながら、王樣のお顏の近くにでも飛んで來て、あゝくたびれたどれ少しお休みとしようかといはぬばかりに、王樣のお顏にでもとまるのが、王樣の偉さを知らない馬鹿者ででもありませうか。

けれど、たちまちお傍についてゐる從者に追はれて、床の上に叩き落されて、あはれな死骸になるのはわかり切つた話なのです。

それほど、深い注意をもつて、王樣の居眠りを妨げないやうにされてゐるのです。

それにしても、何てお寢坊な王樣なのでせうね。（をはり）

◆童謡　野口雨情選

雨

東京市　永橋卓介

雨 雨　ふりやめ
ふりやまないと
お寺の山の
雉子のこが
なくぞ

梟

秋田縣　佐野正明

山火事　燒けた
星の降る晩に
梟の家も
一緒に燒けた

兵隊ごつこ

東京市　川崎綠生

この子も　おいで
あの子も　おいで
サーベルさげて
どの子も　おいで
お山の上へ
駈け　駈け　登ろ

雀

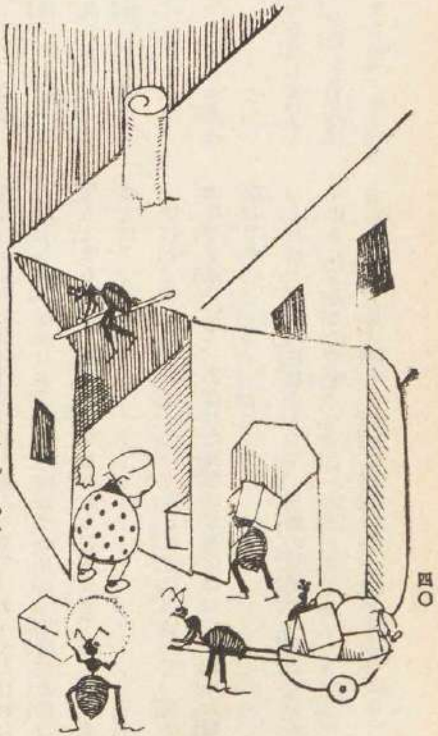
東京市　吉川　こういち

雀がお庭へ
おりて來て
「何んだ　なんにも
ありやしない」
「たしかにお米が
あつたのに」

雨だれ

長野縣　內藤邦雄

ぽたん〳〵と雨だれは
坊やはお寢れとなつてます
遠いねんねのよい國へ
坊やはゆかうとしてゐます



てんとう蟲の宴會（推薦）

白江好郎

千代ちやんが緣側で腹這ひになつて、お伽噺を讀んで居りました。

何處からか、てんとう蟲が飛んで來て、本の上へ止りました。そして『千代ちやん。今日は』と可愛い聲で云ひました。千代ちやんは、見向きもしませんでした。

——かう言ひますと、皆さんの內には『まあ千代ちやんつて、ずゐぶん禮儀知らずのお方ですのね。あたしもうそんな方と遊んで上げないわ。』とおつしやる方もあるかも知れませんが、千代ちやんは決してそんなお行儀の惡い子ぢやありません。お返事をしなかつたのは、餘りお噺が面白い處なので、その方に氣を取られて居つて、てんとう蟲の言つた事が聞へなかつたからでした。

てんとう蟲は、千代ちやんが返事をしてくれないので、もう一度『千代ちやん。今日は』と云ひました。ですから、怒らずに遊んで上げて下さいね。

それでも千代ちやんは、氣が付かないのか矢張り返事をしませんでした。

てんとう蟲は、少々腹を立てて『本當にいやな千代ちやんだわ。あたしがあれだけ呼んで居るのに、お返事もしないなんて、……ひよつとすると、聞へないのかも知れないわ。何んだか一生懸命に讀んでるから、ではもう一度だけ呼んで見よう。物事三度つて云ふから。』と、今度は出るだけの聲を出して『千代ちやん。今日は。』と云ひました。

千代ちやんは、びつくりして本を投げ出して『誰？　本當に吃驚するわ』と云ひ〳〵あたりをキヨロ〳〵見廻しました。その樣子が餘りおかしかつたので、てんとう蟲は、聲を上げて笑ひました。

千代ちやんは、それでもてんとう蟲に氣が付かないで『あたしが吃驚して居るのに、笑ふのは誰？』と一寸腹立たしさうにして云ひました。

紅椿

東京府　在原桂子

ここの　小籔に
咲く椿
眞赤な眞赤な　紅椿
咲いた椿をたづねるは
籔鶯とみそさゞい

寒い日

茨城縣　吉田三郎

寒い北風吹く日暮れ方
うらのたんぼで
ほーほーどりが
とめてくんろと
ないてゐた

星

東京市　人見靜子

ほつかり　お空に
ういた星
姉さんかんざし
星の色
ぴつかり〳〵
ういた星

シグナル

大阪府　藤野滋

青い目のシグナル
汽車の悪口さん〴〵云つてた
汽車がいつてしまふと
赤い舌　ぺろり出した

孔雀

東京市　武田多喜子

くじやく　あつちむけ
くじやく　こつちむけ
きれいなお羽根を
見せとくれ

とりかへこ

水戸市　安田仁

てんとう蟲は、身輕に千代ちやんの掌の上へ飛び上つて、「あたしです」と云ひました。千代ちやんは『あら、可愛いいてんとう蟲。あなたでしたの。あたしを驚かしたのわ。』と不思議さうに尋ねました。

てんとう蟲は『えゝさうなの、あたし幾度千代ちやんつて呼んだか知れないわ。』と一寸不服さうに云ひました。

千代ちやんは『さう、勘忍して頂戴ね。あたし一寸も知らなかつたの。……そして何か御用があるの。』と問ひました。

てんとう蟲は『えゝ、……あたしお家が作つて欲しいの。千代ちやん作つて下さらない。』と一寸あまへる樣に云ひました。

千代ちやんは『作つて上げませう。でもどんなお家がいいの。』と上手な大工さんの樣な口振りで尋ねました。

てんとう蟲ほ『あたし西洋建がいいわ。』と云ひました。

千代ちやんは『すぐ作つて上げますから、暫らく待つてゝ頂戴ね。』と云ひ殘して置いて、お座敷へお家になりさうな空箱を探しに行きました。待つて居る間てんとう蟲は、いろ〳〵な事を考へて居りました。

『どんな形のお家でせうか？蟻さんのお家のやうにお饅頭形のお家かしら。』でも其では何んだか變だわ。それぢや蜂さんのお家の樣に六角のお堂でせう。それも何んだかお寺の樣でおかしいわ。……あたし分らなくなつてしまつた。』と獨言を

言つて居る處へ、千代ちやんが出て來ました。

『ずゐぶん待たしましたでせう。許して頂戴ね。……仲々いい形の箱が見付からなかつたので遲くなつてしまつたの。でもやうやくこのお家が見付かつたのよ。』と云ひ〳〵其處へお家を置きました。

てんとう蟲は『學校の樣なお家ですね。』と少々落膽して云ひました。成程學校の樣に細長いお家でした。

それも其のはづ、「家族合せ」の箱です。

千代ちやんは『でもこれがいいのよ。この頃流行のお家です。嘘と思ふのなら誰にでも聞いて御覽、きつとさう云ひますから。あなたは見馴れないから變に思ふのよ。』と云ひ聞かせましたから、てんとう蟲も安心しました。そして千代ちやんにお禮を云つて、曲つた門からお家の中へ入つて行きました。

大きい窓や、小さい窓、三角の窓――それでも千代ちやんの大工さんは、仲々の骨折りをして作つたのでした――その窓を透して、お日樣がニコ〳〵笑つて、新しいお家の中を覗き込んで居りました。

てんとう蟲は、お部屋を見て廻つて居る間にだん〳〵このお家が好きになつて來ました。再び曲つた門から外へ出て來て、ニコニコしながら千代ちやんに『あたしこれから直ぐお引越しをします。』と云つて、元住んで居つたお家へ道具を取りに行きました。

つくしんぼ

東京市　山本あきら

蟹はおむすびもつてゐた
お猿は柿の實もつてゐた
そこでふたりはとりかへた
ナイテモ　ホエテモ
スツチヤン　ボン

黑い袴のつくしんぼ
田甫で晝寢はおやめなさい
いたづら子供がやつて來て
鋏で袴をチヨンギルよ

針

京都市　藤原多賀子

わたしは銀色のからだ
一本足の一ッ目
おうちは赤いお山
細い長い絲をひいて
歩くのがおやくめ

夕日

北海道　吉田錠一

赤い夕日は落ちました
赤い空見て泣いてゐた
可愛少女の巡禮は
鐘をたたいてゆきました。

小川の話

東京市　北田波津子

小川の水が　　岸の柳に
話をしてた
綺麗なお花の筏が一つ
流れて來たよ
と話をしてた

水車

金澤市　宮本重雄

正直者の水車
キイノ\唄を歌ひつつ
家鴨の晝寢を

やがて蟻の人足が五六人で、南京豆の皮の車に道具を山の樣に積んで、汗びつしよりになつて引張つて來ました。てんとう蟲は、蟻達に手傳つてもらつて、道具を飾りました。千代ちやんは、窓から內を覗きながらいろ〳〵と差圖をしました。床には、銀杏の葉の敷物を敷いて、柿の種子のテーブルを据へました。これだけでも、お金持ちのお座敷として充分ですのに、未だその上、窓に蜘蛛の網のカーテンを掛けました。それでお部屋の內は、御殿の樣に美しくなりました。

それからいろ〳〵の道具を片附けて、てんとう蟲は『千代ちやん、あたし今夜お友達を招いてお引越し祝ひの宴會を開かうと思つて居りますの。あなた手傳つて下さらない。』と云ひました。

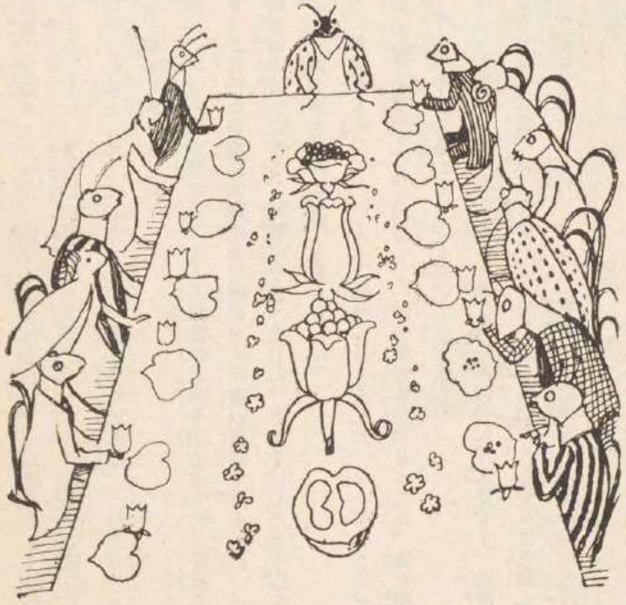
千代ちやんは『それは好い思ひつきですわ。あたし手傳つて上げませう。』と云ひました。

てんとう蟲は先づ招待狀を書きました。そして蟻にお友達の所へ配らせました。千代ちやんは、お家から飯事の道具を持つて來て、早速御馳走の用意に取り掛りました。てんとう蟲は、お部屋を一層美しく飾りました。

お日樣が西の山から『お休み。』といつた頃にすつかり用意が出來ました。一つ星樣が東の空で『皆さんお早やう。』と云つた時には、もうお客樣達がゾロ〳〵出て來ました。

蝶々の奧さんは、金の繡ひ取りの入つた黑い夜會服を着て居りました。上から下迄草色づくめの洋服を着たキリギリスや、帶革に大きなダイヤモンドをつけて、ピカ〳〵光らして自慢して居る螢も來て居りました。

間もなく庭の隅で、夕顏の祝砲が鳴りました。すると、お部屋の入口に釣つて



番してる

雲雀

下總國　關野篠村

早よく〱歸れ
迷ひ子の雲雀
雲雀の迷ひ子を
さがしませう

杉の木

高知縣　高橋樂山

丘の上の杉の木に
凧が尻尾とられて
さかさになつて
さがつてる

なまけ蟻

函館　池田しづか

なまけ蟻がねむつてゐた
木の葉が
池の中に落ちた

あつた葡萄の葉のカーテンが、切つて落されました。一同はてんとう蟲の案内でお部屋へ入りました。天井には狐火のランプが、十も二十も燈つて居つて、あたりを晝のやうに明るく照して居りました。隅の方には鈴蟲、こほろぎ、くつわ蟲の音樂隊が控へて居りました。

主人役のてんとう蟲が席に着くと、音樂隊は音樂を始めました。千代ちやんのコックさんが作つた自慢の御馳走を、蟻のボーィ達が運んで來ました。

一同は舌鼓を打ちながら、御馳走を食べました。そして、てんとう蟲をお祝ひするために、露の酒を幾杯も幾杯も飮みました。

その内に御馳走も終つて、いよく〱餘興に移りました。キリギリスのヴアイオリン獨奏、銀蠅と薄羽かげろうのダンス、蟬の獨唱等がありました。餘り面白さうなので、千代ちやんも窓からそつと覗いて居りました。

蟻のボーイが顏色を變へて、飛んで來ました。『た、た、大變です。臺所へ泥棒が入りましたから、直ぐ來て下さい。』と云ひました。千代ちやんは吃驚して、夢中で臺所へ駈けて行きました。そして、臺所の口迄來て戸の隙から、こはごは覗きました。

内では垢と汗で茶色になつた縞シャツを着た人相の好くない蚤が、しきりに御馳走の殘りを食べて居りました。千代ちやんは急に元氣付いて、泥棒蚤を捕へやうとしましたが、お家が邪魔になるものですから、思はず持ち上げて脇へやつて

鳥さし

廣島市　中村ゆたか

右へいつちや
オヤ水だ
左へいつちや
オヤ水だ
お山の鳥も
里の小鳥も
みんな見たか
鳥さし爺があるいてゐたよ

豆まき

南滿洲　大野春水

鬼は外　鬼は外と
豆まいた
鬼はたまけて
逃げてつた
イツサく〱
イツサツサと
逃げてつた

蚤を捕へました。

ところがお部屋の方では、大騷動が起りました。お家が動いた拍子に、狐火が落ちて來ましたから、その火で大火傷をしたものや、逃げやうとして、一枚しかない着物を机に引掛けて破つたものや、轉んだはづみに足を折つた者などが出來ました。お客樣達はぶつく〱云ひながら歸つて行きました。てんとう蟲は一生懸命になつて皆なの人を引き止めましたが、駄目なのでたうとう泣き出してしまひました。

千代ちやんが、てんとう蟲の泣き聲に驚いてゐる間に、蚤も逃げ出してしまひました。（をはり）

（作者住所、大阪市南區生玉新町持明院内）

傳說

山姥の歌

藤澤衛彦

『途中、しつかり氣をつけてなあ。』と、仲間の人々に送られて、筑前國の或村の農夫が、長者樣のお言ひつけで大根と柿の實の入つた大籠を二匹の馱馬につけて、御城下に向つてあるいてまゐりますと、寂しい森の中の道をやつてまゐりますと、後の方から、『おーうい、おーうい。』と、いやな聲で呼び止めるものがあるので、振返つて見ると、それは恐ろしい山姥で、彼を睨めてにたにた笑ひかけた氣味悪さ。一目見たばかりで農夫はぶるぶると震へ出しました。

『そんなに驚く事はない　わしは饑じいばかりなんだ。』

山姥は、かういひながら近よつて、突然、兩手で二本づつの大根を引張り出すと、すぐしやきしやき食ひはじめましたが、

『大根は矢張うでた方がうまい。今度は柿だ』

し、柿の籠に手をつけ出しましたので、農夫が恨めしさうに見てをりますと、山姥は、

『これはうまい、これはうまい。』と、その柿を幾つか頰張りながら、

『これがすんだら馬だ。馬がすんだら……』

と言ひかけて、じろじろと農夫を眺めますので、農夫はいよいよ震へ上り、このまゝ長居は危いと、山姥の、夢中に食べてゐる隙をうかゞひ、ひそかに柿の籠の底に小穴をあけてから、そつと其處を逃げ出してしまひました。

それから村へ歸つて、これこれだと訴へますと、ことによると籠の穴から柿がこぼれて山姥の棲家がわかるかも知れないぞと、血氣の若者十四五人で急いで出かけて行つて見ますと、案の狀そこから、點々として向ふの谷間に柿の實が筋を引いてをります。

その跡を傳つて行きますと、谷を過ぎ、巖を攀ぢて、奥まつた物凄い處に出ました。見ると、其處に一軒の荒屋がありますので、てつきりそれと近づいて見ると、その家の中からゴーゴーといふ鼾聲が聞えて來ます。若者共がその鼾聲の方に寄つて行きますと、人の氣勢を感づいた馬が、突然ヒーンと嘶き出しました。『しまつた』と思つたがもう遅い、忽ち山姥はその嘶きに眼を覺して、

『しつ、やかましい畜生奴、また晝寢の邪魔をしやがる。どれ、それではその息の音を止めてやらうか。柿の牝馬もたまらなくうまかつたが、お前の味もまんざらではあるまいよ。』と、ごとごと起き出す樣子に、若者共は殘念がりましたが、うつかりすると自分達の命が危いので、ぢつと息を殺してをります

と、また山姥の聲がして、

『久しぶりでたらふく詰込んだせいか、起きるにはまだ大分もの憂い。大根牡馬は明日の事にしよう。』と、再び睡眠に落ちた樣子です頃合を見てうかゞひ寄りますと、山姥は、大釜の中に蓋をして寢込んでゐるのでした。

それといふので、皆して大石を幾つとなく運んで來て、蓋の上のおもしとしました。最後の大石を置く時、ついどしんと音をさせましたので、氣づかつた若者の一人が、息通ひの爲に開けてあるらしい釜の蓋の小穴から中を覗き込みましたら、ぴくつと眼を覺した山姥がそれを見つけて、

『おや、もう夜になつたか、星が一つ見える。』

と申しました。若者が驚いて顏をひつこめますと、

『あつ、星が消えた。雨が降らればよいが。』

と山姥の寢ぼけ聲。それでは雨を降らしてやれと、例の蓋の穴から水を注ぎ込みましたが山姥は、

『あゝ、たうとう雨になつたか。』と言つたゞけで、なほ起きやうとしませんでした。そのうちに、用意の火打石で、かちかちと釜の下の枯木に火をつけますと、幽にその音を耳にしたらしい山姥は、歌を謡ふやうな口調で、

『雨の降る夜の蟲の聲、かちかち鳴くは何蟲か。』と申しました。それに調子を合して若者共が、

『うまうま捕られたかたさ蟲。』と言ひますと、山姥は又、

『鳴けよ鳴けよ夜明まで。』と歌つて鼾をかき出しました。そのうちに、火がぼうぼうと音を立てゝ燃え上りました。山姥は聞耳を立て、

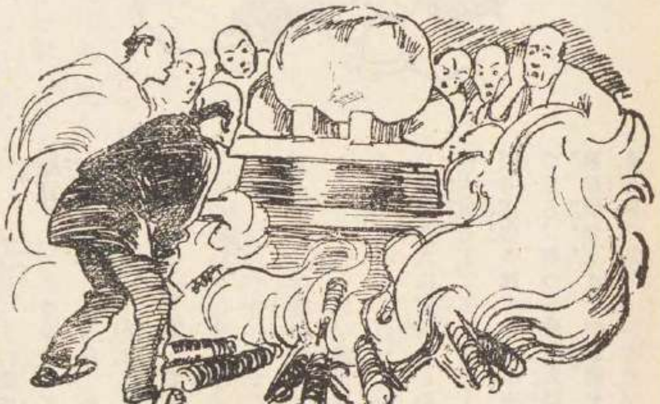
『水の出るのに火が燃える、ぼうぼういふのは山火事か。』と歌ひ出しました。

そこで、

『火事ぢやござらぬ風の音。』と答へると

『吹けよ吹けよ夜明まで。』とまた山姥は謡ひましたが、間もなく熱くなりだしたので、『熱い熱いおほ熱い、何處の何奴の悪戯だ』と、謡ひました。その聲の下から、若者共が、

『馬の敵の釜茹よ、大根茹すに山姥茹だ、熱けりや火になれ骨になれ。いくらあつても足らないは、婆の命と野邊の花。』と歌ひますと、山姥は悲しい聲で、『死ぬよ死ぬよ、死んだら手向けよ野邊の花』と謡つて、燒け死んでしまひました。(筑前の話)



一騎打ち

三嶋章道

『敵方から使者が參りましたが、如何取はからひませう。』

上杉謙信の前に、一人の下臣が出て來て、さういつて平伏しました。

『うん、それではこゝへ通せ。』

謙信はさう云ひますと、その下臣は『はッ』と答へて出て行きました。謙信の側にひかへてゐる多くの武將等は、早速、その邊をとりつくろつて、敵方の使者を案内してくる席なぞをつくりました。ところへ、さつきの下臣は、武田信玄の下臣の安馬彦六を案内して來ました。

安馬彦六は、髯むしやな、體の大きい、如何にも強さうな大男です。どしり／＼と一歩々々を、大地にふみしめながら案内されてやつて來ましたが、やがて案内された席につくと、ぢつと敵の大將の謙信を睨めつけ、それから、丁寧に頭を下げてお辭儀をし、大きな聲で口上をのべはじめました。

『わが君武田信玄公が、私をお使者にお立てになつた用件はかういふ事であります。天文二十三年以來、お互ひにもう十二年間といふ長い年月を、夜となく晝となく、川中島に戰ひ、お互ひに一勝一負でまだどちらが勝つたともいへません。そしてお互ひにいい將卒を澤山失ひました。しかし、一つ所でかう長い間、お互ひに戰つて徒らに多くのいゝ將卒を失ひ、この邊の良民へ迷惑をかける事は、信玄公のお心に忍び得ぬ所であります。それで、今度、お互ひから一名宛の勇士を出して組討をやらせ、その勝負に從つてこの川中島の四郡をあなたの方のものにするか、武田方にとるかをきめたいと思ひますが、どうですか。武田方から選び出されるのは、即ちこの私であります。』

かう云つて、彼はあたりを見廻しました。そして心の中で『どうだ、この己にかなふ奴がゐるか。』と思ひました。

しかし彼の眼からは皆、自分より弱い者のやうに見えました。それで彼はます／＼得意でした。彼は腕が鳴るやうな氣持がしました。『ようし、だれでも出てこい、一つぶしだぞ。』と思ひました。そして、謙信の顏を見上げました。しかし謙信は落ついて居ました。そしてにつこりしました。

『さうですか。それは至極いゝ考へです。私もこんなに長く、一つ所で戰つて徒らに良民を害すのを望みません。早く勝負をつけたいと思つてゐた所です。よろしい。早速やりませう。それでは明日、午の刻

までに川中島へ、お互ひの選手を出しませう。』と云ひました。謙信は謙信で、『なあに、あいつはづう體は立派だが、こつちにだつて強い者は居るぞ。何、負けるものか。』と思ひました。そして誰にしようかこれにしようかと心の中で考へてゐました。

『それでは、明日。』

安馬彦六はさう云つて、いう〳〵と引上げました。

彼は謙信方で見た武將はどれも自分より弱さうに見えましたが、いざかへつて主君の信玄に復命をすると、非常に責任の重大なのを感じました。彼はどうかして明日は勝ちたいものだ。そして名譽を得たいものだと思ひました。そして夜はよく寢ないで色色、敵があゝでたらかう出ようなぞと考へました。そしてさう考へるうちに、いよ〳〵明日は勝つぞと思へて來ました。そして、自分が皆からわい〳〵云つてほめられてゐる名譽のことなぞをもう心に描いて居ました。

夜があけると、それは永祿七年八月十一日です。

美しい太陽は、山の上に赫々と輝やいて、川中島の川の流れはキラ〳〵と反射してゐます。

安馬彦六は、信玄公に挨拶をして、引きさがるという〳〵と、白月毛の馬に乘つて出て行きました。彼の兜や鎧は、日光にキラ〳〵光りました。馬はひゝひんと一聲、大きくいなゝきました。その聲は、山に響きました。彼を見送る信玄方の將卒は、皆、この聲をきいて、胸がすくやうに心持よく勇ましく感じました。そして口々に『しつかりやつてくれ、しつかりやつてくれ。』と彼を勵ましました。

中には、『己の父や兄弟も、今度の戰爭で失つたのだ。どうぞその仇をうつてくれ。しつかりたのむぞ。』なぞと云ふ武士もありました。それらの人々は皆、まるで自分が選手になつたやうに、體中の筋肉をつつばらして、堅くなつて力を入れてゐました。

信玄は多くの將卒を引きつれて、川中島の一方に陣どり、樣子は如何と、ながめてゐます。

ところへ、謙信の方からも、一人の武士が出て來ました。彼は小男でした。しかも馬も小さい馬でした。これを見ると、信玄方の方の人々は、『なんだ、あんなチツボケな奴か。それぢやもうこつちが勝つた。』と思ひました。

謙信方から出た小さい武士は、河原へ出ると、非常に大きな聲を出して、

『これに罷り出たのは、謙信公の下臣、長谷川基連と云ふもの、小さい男だが、音にきこへた彥六殿のお相手をいたします。但し、何れに勝負けありとも、加勢、助太刀は許されませんぞ。』

と、どなりました。その聲をきくと、謙信方の者共は、ほつとしたやうに感じて、『それいけ！』と思ひました。謙信も多くの將卒をつれて、一方に陣どつて見てゐます。小さい長谷川基連も、皆から『しつかりやれ。』とか『己の兄の仇をうつてくれ。』とか云はれ、勵まされて出て來たのです。彼は小さいけれど、彼の腕前には自信がありました。彼は非常に責任を感じてゐました。そして彼は小さいだけに用心深い態度で出て行きました。

二人の鎧武者は次第に近づくと見る間に、チャン〳〵と刀を合はして切むすびました。刀はキラキラと太陽に光りました。

兩方に陣どつてゐる兩方の將卒は、お互ひに『そら初まつたぞ。』と固唾を飲んで、肩をいからして、目ばたきもせずに見てゐます。武田方の武士達は、安馬彥六が體をねじると、自分も一緒に空に體をねぢつて、口をひんまげたりして力を入れてゐる人々もゐます。謙信方の方でも同じ事です。

そのうちに、二人の武士はやがて馬の上で、組打ちをはじめました。もう二人はまつたく夢中でした。大勢の前に選ばれ出た事も、自分が負ければ川中島を敵にわたす事も何もかも忘れました。たゞどうかして勝たうと思ひました。そして、えいや／＼ともみあひました。馬の鞍はとてもたまりません。兩方の馬の腹帶はブツ、と切れて、二人はドツと馬と馬の間に落ちました。

兩方に陣どつた兩方の將卒は、はつとしました。そして、體を半分のり出して見てゐる人もゐます。『そらいけ、そこだ。』と力を入れてゐる人もゐます。武田方のはうは、もうかうなればしめた、何しろ安馬は大きいのだからきつと勝つと思ひました。

案の掟、安馬は長谷川を組み敷きました。『そらしめた。』と、武田方のはうは思ひました。と同時に上杉方のはうは、皆、手に冷汗を握つてはらはらしてゐます。

長谷川をおつ伏せた安馬は、もうしめたと思ひました。もう大丈夫、己の勝だと思ひました。そして今迄は夢中で忘れてゐたのですが、自分が選び出されたと云ふ事や、それから、敵味方の數萬の者共が、これを見てゐるのだと云ふ事を思ひついて、その前で己は勝つのだと、得意になりました。さあ、皆の面前に於て、こいつの首をとつてやれと思ひました。彼の名譽心は燃えました。

彼は、四邊をふりむいてから、いう／＼と小刀をとりなほして相手を只一突とみがまへました。

武田方のはうは、もう皆、胸がわく／＼して、見物してゐます。

その瞬間、下になつてゐた長谷川は、すばしつこく、くるつと抜けだして、いきなり安馬にぐつとつきかゝりました。もう長谷川は死にもの狂ひでした。そして、その中にも彼は自分のすばしつこい體をうまくつかはうとしました。ゆだんしません。そして、つきかゝると同時にいきなり刀で安馬を突きました。それは實に電光のやうにすばしこい早業でした。

そして勝はとう／＼謙信方に上りました。

謙信方の將卒はドツと鬨の聲をあげました。それは山々に響きわたりました。しかし、しよげかへつたのは武田方です。ことに信玄の旗本の二千騎ばかりは、もう我慢がしきれなくなりました。心はわく／＼して心臟はガン／＼なりました。頭が、くやしさのためにぼうとなりました。十二年もこゝで戰つたのをこんなあつけない事で川中島を敵にとられるのかと思ふと、殘念で／＼たまりません。

ところへまた、ドツとあがる謙信方の勝關が響いて來ます。楯だの何だのをたゝく音もきこえます。これをきくともう信玄方の武將はたまりません。

『畜生、もうこの上は、仕方がない。謙信勢の方に切り込んでやれ！』と皆思ひきめました。

そして、人々は、いきなり武器をとつて行かうとしました。

がつかりして沈んでゐた信玄はこれを見ると、

『これ、お前達はどこへ行くのだ。一騎打ちには味方の負だ。しかし、もうこの上は仕方がない。卑怯な事をするな。約束は約束だ。約束を破るのは己は嫌ひだ。それは武士の道でない。さあ潔く、この川中島は敵方に渡してやるのだ。』

と云つてどなりつけました。そして早速、謙信の方に軍使を出して、川中島はあなたの方に渡すといつてやりました。そして其處を引上げる事にしました。

この軍使がくると、謙信は信玄の心のうちを察して氣の毒に思ひました。そして、わい〳〵喜んで騷いでゐる味方の將卒を叱りつけて、靜かにするやうに云ひつけました。そして、心では『信玄はやはり、まことの武士だな。』と思ひました。

信玄の方は殘念でしたけれど、仕方なくぞろ〳〵と引上げ初めました。信玄の心は十二年間、こゝで戰つた事、そして多くのいゝ將卒を失つた事、そして、自分からこんな一騎打をいひ出して、それに負けてこの川中島を渡す事なぞを考へると、もう胸が一ぱいでした。しかし信玄はそれらの心をおさへつけて、約束通りとぼ〳〵と引き上げてゆきました。

信玄は殘念に思ひましたが、又、心の一方でほつとしたやうな氣持もしました。

信玄の引上げてゆくのを見て、謙信は信玄の眞の武士らしい、義理堅い氣持を尊く思ひました。そして一騎打に勝つて此處はとつたが、しかし、心では長く信玄のこのたふとい氣持を手本にしようと思ひました。

そして、暑い太陽に、信玄方の將卒の武器や、甲冑がキラ〳〵しながら、次第に、遠くにはなれて行くのを見て、なんだか、名殘惜しいやうな氣がしました。

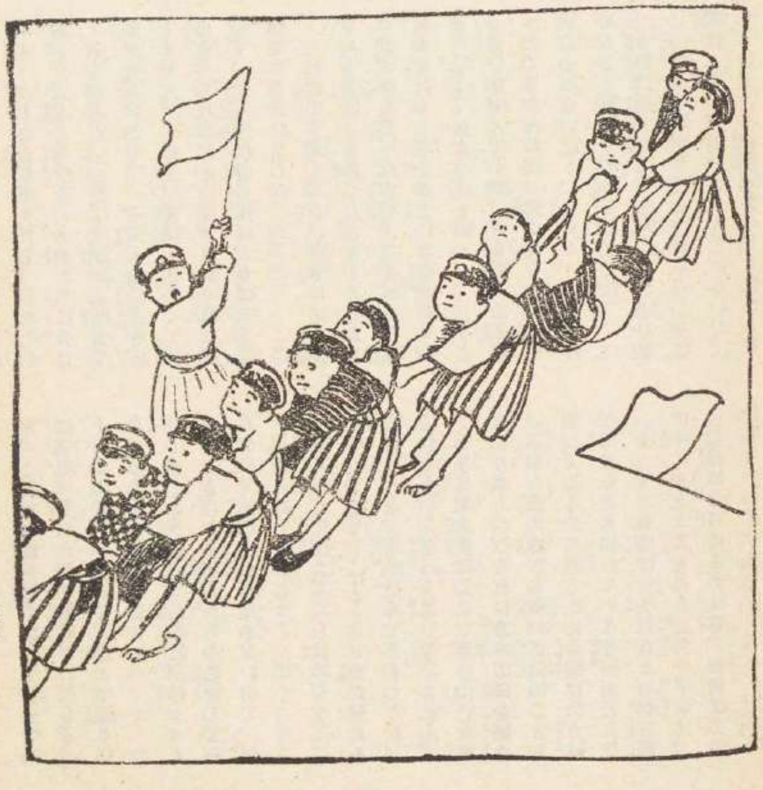
（をはり）

幼年詩

綱引

名古屋呼續尋常高等小學校尋三　佐野ひな子

白も赤も
いつしよに引け
いつまでたつても
勝負がつかない
其のうちに
一人ころんだ



慾ふか大盡

川崎春二

あるところに大そうなお金持がありました。そのお大盡は、はじめのうちはそれ程でもなかつたが、お金が貯つてくるにしたがつて、ます／＼慾が深くなり、土藏が十五もたち、土地や貸家も數へきれないほどになつた時分には、もう人間らしい情も義理もなくなつてしまひました。

下男や下女も大勢使つてゐましたが『もう少しお金が殖えたら、わたしの貯めたお金の半分を、お前たちに分けてやるから。』と言つて、朝から晩まで働かせるばかりで、一文もお給金を渡しません。その上、食物もまづくて澤山食べられないものばかりかくれないので、雇人達は骨と皮ばかりのやうに痩せてしまひました。

それ位ですから、若い時分にはお嫁さんを貰はうと思つたこともありましたが、『嫁を貰へば赤坊が生まれる。赤坊が生れると厄介な上にお金がかゝる。まあ止して置かう。』といつて、たうとう貰ひませんでした。そして『お金さへたくさんあれば、何がなくとも淋しいことはない。』と、毎日々々お金を貯めることばかり考へてゐました。

大勢の雇人達は、主人のなさけのない心がよくわかりましたから『こんな家は、はやく逃げ出さうではないか。』と、ひそ／＼相談し合つても見ましたが『こんなに體が悪くなつてしまつては何處へ行つたつて働けないだらう。』といふので、ともかく、是まで通りにしてゐることにきめました。

しかしお大盡は、近頃は以前よりもずつときびしく雇人たちを監督してゐるのに、前程お金が殖えないので、氣をくさらせてゐました。

『ほんたうに何うしたら前のやうに、いや、もつと／＼はやく、お金が殖えるだらう。』と、考へ込んでゐましたが、これぞといふ考へも思ひ浮びません。

ある日お大盡はふと、思ひついた事がありました。それは方々の國を廻歩いて來る旅の者なら廣い世間のことを知つてゐるから、うまい金儲けの方法が聞けるかも知れないと考へました。

そこでお大盡は、次の日から毎日朝の中に六七十人もゐる下男や下女に、『お前は今日はこの仕事、お前はあの仕事をやれ。』と言ふ風に、一々仕事の分量を嚴重に言渡して置いて、旅人の通る街道へ行きました。そして、並木の松の根に腰をかけて、通る人を眺めてゐました。しかし、三日經つても四日經つても、呼びとめて聞いて見たいやうな人は通りませんでした。

でも、お大盡は辛抱強い人ですから、『えらい旅人は、たくさん通るものではない。まあ、あせらずに待つてゐやう。』と、毎日々々おなじ場所に出て、旅人に目を配つてゐました。

さうしてゐるうちに何時か月日が經つて、お大盡がそこへ來初めてから七十七日目となりました。お大盡は、それほど長い間、空待ちをしたことを思ふと、殘念でたまりませんでした。さすがに氣の強いお大盡も、そろ／＼心細くなつて來ました。

『自分は今まで考へ違ひをしてゐたのだ。人間といふものは見かけによらないものだ。だからたしかに一人位はものしりが通つたに相違ない。全くとんだことをしてしまつた。』

お大盡は、かう考へ付きましたから今度は旅の人をどんな者でも、片つぱしからつかまへて問ひかけて見ようと決心しました。

けれどもやつぱりよく氣をつけて見ると、利口さうな旅人は狡猾さうに見え、正直さうな者は、偉いことを知つてゐさうにも思はれず、また世界の涯まで經めぐつて來たやうな年寄は、怪しい目付をしてゐて不氣味だつたりして、なか／＼思ひ切つて呼止めることが出來ませんでした。今度は／＼と思つてゐる中に、その日もまた太陽は西の方の山へ近づいて行つて、人通りもだん／＼少くなつて來ました。

お大盡はいよ／＼たまらなくなつて、泣きだしたいやうな氣持になりました。そこへ、

『ホーイ／＼、シャン／＼……』と五六頭の小馬を追ひ立てながら、馬商人が通りかゝりました。お大盡は思ひきつて、立ちあがりました。

『もし／＼旅のお方、鳥渡お尋ねしたいことがございます。お手間はとらせません。』と、丁寧に頭をさげました。

『私はこの土地での金持で資本なら幾らでもあるのですが、世間で一番はやくお金を殖やす方法をご存じでしたら、私を助けると思つて敎へて下さい。今日で七十七日もこゝに出てゐました。』

と、お大盡は一生懸命にたのみました。

馬商人は一寸迷惑さうな顔をしましたが、すぐににこ／＼して、

『それはあなた程の資本があれば雜作ありません。まづ國中の小馬といふ小馬を一匹殘らず買ひ集めるのです。さうすれば小馬の値段をあなたの思ふだけ高くすることが出來ます。さうして置いて、一度に賣出せば必と大まうけ

が出來ます。なんなら私があなたのお金まうけのお手傳役になりませう。』

お大盡は、首をひねつてゐましたが

『今こゝで直に決める譯にも參りませんから、五日經つてから私の家へ來て下さい。それまでによく考へて置きます。』と、馬商人と約束して別れました。

すると直あとから、衡と枡をかついだ穀商人が急ぎ足で通りかゝりました。

お大盡はまた、前のやうに問ひかけました。穀商人もはじめは變な顔をしましたが忽ちにこ〳〵して、

『それほど資本があれば容易いことです。まづ國中の穀物を有りつたけ買ひ切つてしまふんです。さうすれば穀物の値段を、あなたの思ふまゝに高くすることが出來ます。そしたら、そつと一度に賣出すのです。穀類を食べない人間はありませんから、二三年もしたら此の國中のお金を皆、あなたの藏に集めてしまふことが出來ます。もしお望みなら、私はこれから、あなたのお金儲けのお手傳ひをいたしませう。』

お大盡はまた、五日經つてから來るやうにと、馬商人とおなじやうな約束をしました。もう日はとつぷりと暮れてしまひました。お大盡は『今日は運のいゝ日だ。二人の中のどちらか正直さうな男に手傳つて貰はう。』とほくほく喜んで歸りかけました。

すると不意に、どかつとお大盡に突きあたつた者がありました。びつくりして見ると、それは乞食より少し氣がきいた位のよほ〳〵の爺さんでした。

お大盡は、惡者でも出たのではないかと、胸がドキンとしましたが、よほよほなお爺さんでしたから、

『おい〳〵、ちつとばかり氣をつけなさい。年寄りのくせに、向ふ見ずに歩かぬがいゝ。』と、急に強くなつて怒鳴りつけました。

『はい〳〵、どうもすみません。何分日が暮れると眼が見えませんので。』

お爺さんは、おとなしくあやまつて行き過ぎました。お爺さんの聲は低いかすれた聲でしたが、お大盡が是までに聞いたことがない程、やさしい、賢こさうな響がこもつてゐました。

お大盡は、自分が今まで待つてゐたのは、こんな年寄の旅人のやうな氣がしました。

『もし〳〵、旅のお年寄』お大盡は言葉の調子をかへて呼止めました。

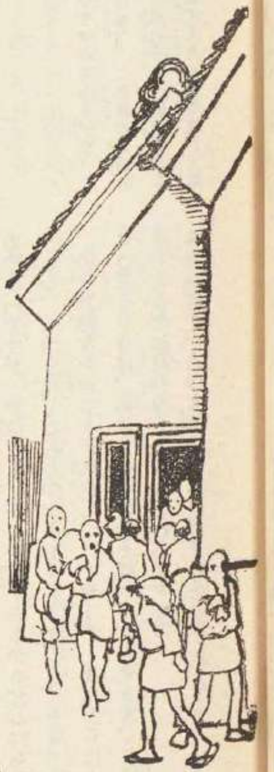
『はい〳〵、この老人に何かご用でございますか。』

『お年寄、寔にすみませんが、ちよつと知慧をお借り申したいんですが。』

お大盡はまた、お金儲けの方法を問く爲に七十七日間もものしりの旅人の通るのを待つてゐたことを話し、馬商人と穀商人との話もつけ加へて打明けました。お爺さんはカラ〳〵と笑つて

『あなたのやうにお金を土藏にしまつてしまふ者が、それ以上お金を貯めたなら、世間にお金がなくなつてしまつて、皆が恨みます。そして、強盗でなくともあなたを殺してしまふかも知れません。あなたなぞは是からは、お金まうけなどはふつゝり思ひ止つて、積んで置いたお金を費ふ方法を考へなさるのが、世のため身のためと言ふものです。呉々もお金まうけだけは思ひきりなさい。』と言つて、後をも見ずに行つてしまひました。

お大盡は『ほんたうに人間といふものは見かけに依らないものだ。この人なら金儲けの方法を知つてゐさうだと思へば、いやはやとんでもない寢言しか知つてゐない。』とぶりぶり腹を立て『でもまあ、いゝわい。あの馬商人と穀商人とのことを、早く家に歸つてゆつくり考へて置かう。』とひとり言をいつたりして、『ヘッヘッ……』と笑ひながら家に歸つて來ました。



すると、大きな屋敷の中がひつそりとして、大勢ゐる筈の下男や下女の姿が一人も見えません。不思議に思つて家の中をよく調べて見ると、

『私どもは永い間あなたに牛や馬のやうに、ひどく追ひつかはれて來ましたが、お給金はまだ一文も受取つてゐません。この先も何時受取れるかわかりませんから、お留守に勝手にいたゞいて參ることにいたしました。もし餘計にいたゞいたとお思召なら、正しく勘定してお返しいたしますから、私どもの行先を一々おまはり下さい。』といふ、書置がありました。

お大盡は本氣にしません。『あいつ等はわしをびつくりさせようつてんだな。いや、わしが惡かつた。あまり働かせてばかり置いて、少しも給金をやつてゐないので、催促半分のいたづらだらう。今日はみんなに、五十錢銀貨を一枚やつて置かう。』と思ひました。

しかし、何時まで過ぎても誰も出て來ません。もしやと思つて土藏の前へ行つて見ると、どの土藏の戸も鍵が破られて開放しになつて、中の金袋は皆な失つてゐました。お大盡はあまりのことに『アーッ』と言つたきり眼を廻はして死んでしまひました。（をはり）

かまど姫

（童話劇）

中島孤島

第三場　王宮の廣間

（王宮の大廣間では、燭火が晝のやうにかゞやいてゐる中で、もう舞踏會が始まつてゐました。今夜の舞踏會は、この國の世繼の王子にいゝお嫁さんを探さうといふ國王の思召から、國中へおふれを出して、美しい娘をもつたものは、誰でもその娘を連れて來て差支ないといふことでしたから、娘自慢のお母さんたちは、めいめいに花のやうに着飾つた娘を連れて、今宵の夜會に集まつて來たのです。今舞踏が一廻りすんで、今踊つた娘たちは眞赤にのぼせた顔をして、あちらこちらを跳ねまはつてゐます。一方の隅で、ふぢとあやめはお母さんの兩側に竝んで、ぼんやり長椅子にかけてゐます。）

あやめ『妙だわねえ、姉さん、誰もあたしたちの方を見ないなんて！

ふぢ『あたしも先刻からさう思つてるの！

あやめ『あたしたちが眼につかない筈はないわ！

ふぢ『それでも誰一人寄つて來ないのは、不思議だわねえ！

母『それは屹度お前たちがあんまり美しいものだから、みなさんが遠慮してゐるんだよ。今にごらん、煩いほど寄つて來るから。

あやめ『ですが、お母さん。さつき王子さまがあたしたちの方を、ぢつと見てゐらしつたんですよ。すると、そら、あの不思議なお姫さまが入來しつたでせう？　それからはもう王子さまは、あのお姫さまのそばへつきッきりで、こつちなんぞは見むきもなさらないんですもの！

ふぢ『だが、あのお姫さまは、どういふ方なんでせう？　さつき馬車から降りて、こつちへいらつしやるところを一寸見たんですが、それは〳〵美しい水晶の上靴をはいてゐらしつてよ！

母『あすこへ御家來の方がいらしつたから、お名前をうかゞつて見よう。（といつて、一人の家來を呼留めました）あなた、一寸（といつて、立停まつた家來の前へ行つて輕くおじぎをして）つかんことを伺ひますが、あの先刻入來しつたお姫さまは、どういふ方なのです？

家來『ご自分では白玉伯爵の令孃だといつてゐらつしやるのですが、いづれどこぞの女王殿下に相違ありません。

母『白玉伯爵の令孃ですか！　へえ！

あやめ『まア！

ふぢ『まア！

母『實は、あなた、あの姫さまが入來つしやるまでは、王子さまはこちらばかり見てゐらしつたのですよ。それが、あなた、あの姫さまが入來しつてからは、もうこちらなんか見向きもなさらないんですもの！

家來『まア、さうでしたか。

ふぢ『あたしたちはまるで除物にされたやうな氣がするわ！

家來『それはお氣の毒でしたね！

母『娘たちは二人ながら誠に舞踏が好きでございましてね。

家來『へえ、それは結構なことで。

母『何ですか私共に分らないのですが、他人さまがよくはめて下さいますんですよ。

家來『へえ、成程。この次には是非一つ拜見さしていたゞきたいものでございますね！

（家來はおせじをいつて、逃げるやうに行つてしまひました。）

ふぢ『まア、何て失禮な人でせう！

あやめ『あたし悔しいわ！　こんなことなら、來ない方がよかつた！

母『あれ、あすこへ王子さまが入來しつたよ。ごらんよ、姫さまと睦まじさうに手をひかれて。

（王子とかまど姫が手を組んで、何か話しながら、廊下から入つて來て、三人のゐる長椅子の前を通りかゝりました。三人はあわてゝ椅子から起つて、恭々しくおじぎをします。）

かまど姫『あれはどこの方？

王子『町の娘でせう！　なにつまらないものです！

かまど姫『それでもお二人ともきれいな方ですわね！

王子『あなたの前へ出たら、孔雀の前の烏ぐらゐなものだ！

かまど姫『まア！

（小聲でこんな話をしながら、王子とかまど姫は通り過ぎて行きました。）

あやめ『母さま、おきゝなすつて？　あんまりぢやありませんか？

ふぢ『あたしたちは恥をかきに來たやうなものだわ！

母『まア默つといでよ。相手が王子さまだからね、何でも我慢するんです。――さア、少しあつちへ行つて、冷たい風にでもあたつて來ませう。

（母親は二人の娘を連れて、ぢきうしろの扉口から、廊下の方へ出て行きました。王子とかまど姫はまた戻つて來て、今まで三人のかけてゐた長椅子へ竝んで腰をかけました。）

王子『あなたの住んでゐらつしやる所のお話を少し聞かせて下さい。白玉城といふ名は、これまでとんと聞いたことがないが、こゝからどつちの方角に當つてゐるのです？　東ですか？　北ですか？　それとも南ですか？

かまど姫『まア東の方でせう。

王子『それではむかしの人が蓬萊の島と呼んだのは、多分その白玉城のことでせう。

かまど姫『（につこりと笑つて）えゝ、全く、蓬萊の島といふ人もありますの！

王子『さうでせう！　あなたのやうな天女のお住ゐになるところですもの。あなたは人間界の方ぢやない！　屹度甘露でも吸つて、香ばしい花の中に遊んでゐらつしやるに違ひない。その美しい衣服も、人間の手で織つたものとは思はれない。どうしても遠い〳〵月の世界かなんぞで、天女たちが大勢よつて、念入にこしらへたものに違ひない。

かまど姫『（笑ひながら）えゝ、全くさうなんです！

王子『あなた！（とかまど姫のそばへすり寄つて、姫の手を執つて）その白玉城へ行く道を敎へて下さい！

かまど姫『（そつと手を引いて）あれ舞踏が始まつたやうでございますわ！

（賑やかな進行曲が始まつて、もう幾組かの若い男女が、手を組んで廣間の眞中へすべり出しました。ふじとあやめも母と一しよに、廊下から入つて來ます。そのうちに廣間の正面にかゝつた大時計が、チンチンチンと十二時を打ちました。それを聞くと同時に、かまど姫は驚いたやうに長椅子から起ち上りました。王子も驚いて、姫の手を執つて引留めようとしました。）

王子『どうしました？

かまど姫『わたくしはもう行かねばなりません！　どうぞ放して下さい？

（かういつて、かまど姫は顏色をかへて、廊下の方へ駈け出しました。扉口を出る拍子に、水晶の沓が片方ぬげたのも知らないくらゐにあわてゝゐました。王子は姫のあとを追つて扉口まで行きましたが、姫の姿はもう見えませんでした。）

王子『あゝ、もう行つちやつた！（といつたが、ふと水晶の沓へ目をつけて）おや、あんまり急いで、沓をおとして行つた。（といひながら、拾ひあげて）あなた！　あなた！（と呼びながら、王子は沓を持つて後を追つて行きました。）

（幕）

第四場　茶の間

（王宮の夜會のあつた次の日です。ふぢとあやめは、がつかりしたやうな風をして茶の間で昨日の話をしてゐます。お母さんも火鉢の前へ眠むたさうに頰杖をついて、娘たちの話を聞いてゐます。すみれはいつものぼろ着物で、臺所口に小さくなつて坐つてゐました。）

ふぢ『（欠伸をして）あゝ、眠い！

あやめ『（笑ひながら）姉さん、いゝ加減になさいよ、もうそれで九度目だわ！

すみれ『さう大勢につきまとはれては、さぞ煩さかつたでせうねえ？

あやめ『もうそれは始から終まで間斷なしなんだもの。しまひには本當に煩さくなつちまつたわ！

ふぢ『あたしはまたのぼせ性だもんだから、顏がかつ〳〵として、頭がいたくなつて來たのよ！

あやめ『それでも王子さまがゐらしつた時には、みんなあとへ退つたわ！

すみれ『（横を向いて一寸笑つて）ぢやア、王子さまとご一しよのところにゐらしつたの？

ふぢ『あゝ、大抵ご一しよだつたの。だけどね、そのうちにどこかの伯爵のお姫さまだといふ方が入來しつたもんだから、後ではその方の方へおいでになつたのよ！

すみれ『伯爵の姫さま！　まア、どんな方でした？
あやめ『どんな方つて、お前、あんな美しい方をあたしは生れてから見たことはないわ！
母『あたしは、あの姫さまが、どこかうちのすみれに似てゐたやうな氣がするんだが、お前たちはさう思はなかつて？
ふぢ『ボ、、、、、さうね？
あやめ『天と地と違ふだけだわ！
ふぢ『衣服だつてきら〳〵するやうな金と銀の衣服を着てゐらしつたわ！
あやめ『それから水晶の上靴をはいてゐらしつたわ！
すみれ『まア！　あたしも一ぺんでいゝから、そんな衣服を着て見たいわ！
母『すみれ、馬鹿なことをおいひでない！　姉さんたちなら似合ふだらうが、お前なんぞが着てどうしよう？
（この時戸外の方から貝の音が聞えて來ました。）
あやめ『何でせう？　母さん！
母『さうね、何だらう？
（三人は窓へ行つて外を眺めます。）
すみれ『（横を向いて）王子さまぢやないかしら？
母『昨夜の御家來だよ！　何かお布令を讀みあげてる。あ、馬へのつてゐらつしやるのは、王子さまだよ。

（すみれも窓のところまで行つて、三人のうしろから伸びあがつて、王子の方をながめます。その時丁度窓の下まで來た王子は、窓の方を見あげた拍子に、すみれと目を見合せて、吃驚したやうな顔色をしました。）
ふぢ『昨夜のお姫さまを尋ねるんですつて！
あやめ『あの方の見つかるまでは、あの水晶の沓を持つて、國中を廻るんですつて！
ふぢ『そしてあの沓にしつくり合ふやうな足のひとがあつたら、誰でも王子さまのお妃になれるのですとさ！
母『お前たちだつてあの沓がはけたら、お妃になれるんですよ！　ね、いゝかえ？
あやめ『おや御家來が門の方へ廻つて來ますよ。姉さん、早く、早く！（といつて元の場所へ戻りながら）こゝに坐つてゐませう！
ふぢ『（あやめと並んで坐りながら）母さん、すみれをあつちへやつて下さい。さア、すみれ、早く臺所へいつといでよ。
母『（火鉢の前へ戻つて）行つといで！　すみれ、お前がゐちやアいけないから！
すみれ『あたしにもその水晶の沓を拜見させて下さい！
母『お前が？　いけない〳〵、お前がゐちやア邪魔になるんだよ。（といつて手よれですみれを臺所へ逐拂ふやうにして）さ、早く、早く！　もう入來つしやるからさ！
（かまど姫は悲しさうな顔をして、臺所の方へ立つて行きました。その後へ昨夜の家來が先へ立つて、王子を案内して庭先へ入つて來ました。その後からは二三人の家來が黒塗の函だの、床几だのを持つてついて來ます。母は二人の娘を連れて、庭へおりて、王子をお迎へしました。）
母『王子さまには、ようこそお入來下さいました。
（家來は母子の前へつか〳〵と進んで、母親に向つて尋ねました。）
家來『この家には、昨夜の夜會の時、上靴を失した方はありませんか。
母『上靴とおつしやいますか？　はい、宅の娘が一人……

否、兩人ともあの上靴を失しましたのでございますよ、はい。
家來『その上靴といふのは、どんな沓ですか？（といひながら、家來は黒塗の函を持つた男の手から水晶の沓を受取つて、母親の前へ出して）これに似てゐますか？
ふぢ『まア、あたしの上靴にそつくりだわ！
家來『ではは いてごらんなさい。
（床几を持つた家來が、それを庭へ据ゑて、ふぢに掛けさせて、水晶の上靴をはかせます。けれども足が大きいので中々うまくはけない。それでも面をしかめながら、やう〳〵のことで無理に足を入れて立上ります。）
ふぢ『まア、あたしに丁度ですわ！　これはあたしの沓よ！
母『誂へてこしらへたやうに、しつくり合つてをります。さア お前歩いてごらんなさい！

（ふぢは跛足を曳きながら、沓を引きずつて庭を歩きます。）
母『まア、王子さま、これはあの娘の沓でございます。
王子『ちと痛さうに見えるな！　もういゝもういゝ。
母『まア、王子さま、お見ちがへになつてはいけません。
王子『もう宜しい！（といつて家來に向つて）早く脱つたがいゝ。
母『（あやめの方を向いて）あやめ、お前も沓を失したとおいひぢやアなかつたか？
あやめ『えゝ、あたし衣服をぬぐ時に、氣がついたのよ！
母『それぢや、お前の沓かも知れない。

（家來がまたあやめを床几へかけさせて、沓をはかせようとするあやめは面をしかめて、痛いのを我慢しながら、無理に足を押込んで、立上ります。）
あやめ『これはあたしのよ！
家來『まだお踵が出てをります。
あやめ『いゝえ、あたしはいつもかういふ沓をはくのよ！
母『輕く跳るやうに歩けるものですからね。（といつて、娘に向ひ）さア、いつものやうに輕く歩いてごらんなさい！
（あやめは沓を引きずりながら、爪立つたやうにして庭をあるきます。）
王子『それではとても踊れさうにない。もう宜しい！
あやめ『（沓をぬぎながら小さな聲で）あたしの沓を返して下さらないなんて、あんまりだわ！
王子『（母親に向つて）この沓をはきさうな娘は、ほかにないのか？
母『はい、この二人がわたくしの娘でございます。
王子『先刻窓の下を通つた時、たしかにもう一人居つたやうに思ふが、あれは誰だ！
母『王子さま、どうも申譯がございません。あれは召使が、そつと、あなた樣のお通りを拜んでをりましたのでございます。
王子『その者をこれへ呼べ！
ふぢ『まあ、王子さまあんなきたないものを！

あやめ『それにもう本當に意地の惡い女ですわ！
王子『（母親に向つて）早く呼べ！　呼ばんか？
母『（王子のむつとした樣子を見て）いゝえ、ご所望なら、呼びますでございます。（といつて臺所口の方へ向つて）すみれやすみれ、王子さまのお召ですよ。
（かまど姬はぼろ衣服のまゝで、きまりわるさうに臺所口の方から出て來て、母親のうしろへうづくまる。王子は思はず身を乘出して、ぢつとその姿をながめるのでした。）
家來『さア、こゝへ來て、この沓をはいてごらんなさい。
（かまど姬はおづ〳〵と床几のところへ進んで、そつと腰をかける。家來が沓をはかせようとすると、王子はつと家來の側へよつて、水晶の沓へ手をかけました。）
王子『いや、それは予が貰はう。（といひながら沓を受取つて、姬の前へ膝を突いて、沓をはかせる）これだ〳〵、この沓をはく者は、この足より外にはない！
（この間母と二人の娘は、いま〳〵しさうに橫を向いてゐたが、この時母親は王子の方へ向きなほつて、吃驚したやうな聲でいひました。）
母『王子さま、お目違ひを遊ばしますな！　昨晩の夜會へまゐりもしないものが、何で上靴を落す筈がありませう。
家來『それでもぴつたりとおみ足にはまりました。一分の隙もありません。
（その時かまど姬はやう〳〵顏をあげて、王子と目を見合せると、につこりと笑つて、右の袂から片方の沓を出しました。）
すみれ『王子さま、片方はこゝにございます。
王子『最早疑ふ所はありません。あなたは今日からわたくしの妻です。
（王子はかまど姬の手を取つて立たせる。それを見た母親は、顏色をかへて、思はず聲をかけました。）
母『まア、一寸、お待ち下さい！　王子さま、それは召使でございますよ！
ふぢ『あの衣服を見て下さい！
あやめ『あの灰だらけな顏を見て下さい！
（この時、臺所口からふいに前の場の老翁が現れます。）
老翁『それは召使でない。伯爵の姬君を見せて進ぜよう。
（かういつて、一同が驚いて振向くのを見て、笑ひながら、かまど姬の方へ寄つて來ました。）
老翁『さア、すみれや、かまど姬や、もう一度、家の中へ入つて、わしがお呪ひをするあひだに、三べん廻つて出ておいで！

（かまど姫が臺所口から家の中へ隱れるのを見送つて、老翁は鳩の杖を立てて、呪文を唱へます。）

鳩、鳩、飛べよ。
西の方へバタ〳〵
東の方へバタ〳〵
彼方で鳴いて、
此方で鳴いて、
上を下へ、
中を外へ、
ぐるりと廻つて、
暗い方を明るく、
襤褸をかへして、
錦の方をだアせ。

（呪文がすむと、かまど姫はもう金銀の衣服を着て、水晶の沓をはいて、本當の姫君のやうな姿になつて、茶の間の方からしづしづと降りて來ます。母と二人の娘は、かまど姫の姿を見ると、その美しさに見惚れて、思はずそこへひれ伏してしまひます。）

老翁『サア、これで誰も召使だといふ者はあるまい。

ふぢ
あやめ『（顔をあげてうつとりと妹の方を見ながら）白玉家のお姫さま！

老翁『さうだ！　お前たちが竈の前へ置去りにして行つたかまど姫は、王宮へ行つた白玉姫だ。

（王子は姫の前へ進んで、跪づいて手を執りながら。）

王子『サア、姫君！

（かまど姫は王子の手を執つて立たせると、そのまゝ王子の前へ跪づいて、王子の顔を見あげました。）

かまど姫『王子さま！　たつた二つ、わたしの願ひを聽いていたゞきたうございます。

王子『（ぢつと姫の目をみつめて）あなたの願ひなら、どんなことでも否とはいひません。何です？　言つて見て下さい！

かまど姫『どうぞ姉さんたちも一しよに連れて行かせて下さい。これがわたくしの一生のお願ひでございます。

王子『よろしい、承知しました。すぐに家來に申つけて、よいやうに計らはせませう。

かまど姫『どうも有がたうございます。

王子『サア、それでいゝ、お立ちなさい！

（王子は姫の手を取つて立たせます。かまど姫はしづかに母と姉の側へ寄つて、膝を突きました。）

かまど姫『サア、お母さんも、姉さんたちも、どうぞお立ちなすつて下さい！　そしてわたくしと一しよに御殿へいらしつて下さい！

（三人はそれを聞くと、一度にアツと泣き聲を立てゝ、三方から姫を拜むのでした。）

母『すみれや、さういはれると、わたしは穴へでも入りたいくらゐです。今までのことはどうぞ宥して下さい！

ふぢ『すみれさん、まことに濟みません。どうぞ勘忍して下さい！

あやめ『すみれさん、本當に惡いことをしました。どうぞ宥して下さい！

かまど姫『どうも有がたうございます。あたしは姉さんたちと一しよにゐられると思ふと、嬉しくつてたまりません。（といつたが、そのまゝ老翁の方を向いて）みんな老翁さんのお蔭です。どうも有がたうございます。（といつて、おじぎをします）

老翁『（にこ〳〵笑ひながら）かまど姫や、誰のお蔭でもない。みんなお前の心掛がいゝからだ。それでは王宮へ行つて、幸福に暮しなさい！

王子『（家來に向つて）では、用意の馬車を！（といひつけて置いて、かまど姫に向ひ）姫君、サアお立ちなさい！

かまど姫『はい！

（かまど姫はしづかに立上つて、王子と顔を見合せて、嬉しさうににつこりと笑ひました。）

（幕）

（をはり）

世界名作童話物語

家なき子(つゞき)

三宅房子

悲しい出來事!

私達小さな役者の一座は、なか〳〵達者にはやりましたが、藝の種類が澤山ないので同じ町に長くゐることは出來ませんでした。私達はユッセルの古い町に着いてから三日目にはもうまた旅に出なければなりませんでした私達は佛蘭西の中央に向つて出立したのです。

お蔭で私は、その間にいろ〳〵のことを覺えました。そればかりか、お爺さんと一しよに廣い青空の下で苦しい旅をしてゐる間に、私の手足は强くなり、肺は大くなり、皮膚は厚くなり、丁度鎧でも着たやうにしつかりして來ました。もう寒さだつて、暑さだつて、樂に凌げる程になりました。

ある晩のこと、私達は河に沿うた野の中の大きな町に着きました。そこには赤煉瓦の家が澤山に立つてゐました。

『これがツールーズといふ町だよ。』とお爺さんが敎へてくれました。私達はこの町でしばらく滯在することになりました。

例によつてその町に着いて先ず第一の仕事は、明日の興行をする都合のいゝ場所を探すことでした。町の中を歩いて見ると、いゝ番處は澤山にありましたが、中でも植物園の近くにいゝ芝生がありました。そこには大きな樹が氣持ちのいゝ日蔭をつくつてゐました第一回の興行はそこで開くことにきめました。

お爺さんが例の通り笛を吹いて行く後から私達が不思議な恰好をして行列をつくつて行くので、そこへ着いた時には見物人は山のやうに集りました。そこで私達は芝居の支度にかゝりました。

と、その時、一人のお巡りさんが傍に立つてゐて、私達のすることを見てゐました。お巡りさんは犬が大嫌ひなのか、それとも私達がそんな處で芝居をするのが氣に入らないのか、ひどくいやな顏をして私達を追拂ひにかかりました。追拂はれた時、素直に止めたらよかつたのでせうが、お爺さんはそれに從はなかつたのです。

お爺さんはたかゞ、犬や猿をつれて田舎を廻つて歩く見世物師の爺さんですが、大變に氣位の高い人でしたから、默つて巡査のいふ通りにならなかつたのです。

お爺さんは帽子をとつて丁寧にお辭儀をしました。

『警察のお力を代表して御座る閣下! 閣下は警察の御命令をもつて、われ〳〵如き哀れな旅藝人が、公園に於て卑しい藝を演じますのを禁止させようとなさるので御座りますか。』

お爺さんは馬鹿ッ丁寧な言葉で述べたてました。これは相手をおちやらかす時にするお爺さんの何時もの癖なのです。

『ぐづ〳〵いふな。たゞ默つて俺の命令に從へばいゝのだ。』と、巡査はどなりました。

『ハイ。成程。しかし、私はたゞあなた樣がいかなる權力によつて、此の御命令をお發しになつたか、それさへ承れば御命令に從ひますで御座います。』

言葉の上では巡査は到底お爺さんの敵ではありません。巡査はたうとう敗北して行つてしまひました。お爺さんは帽子を手に持つて腰をキュッと曲げて、にや〳〵笑ひながら巡査の後姿に向つて敬禮を一つしました。

その日はそれだけで無事に濟みましたが、翌日になると、巡査はまたやつて來ました。そして、いきなり圍の繩をとび越えて、丁度芝居の最中へ飛込んで來たのです。

『この犬どもに口輪をはめないか。』

巡査は荒々しくお爺さんにいひました。

『犬に口輪を嵌ろと仰るのでござりますか。』

『さうだ、それは法律で命じてゐるところだ。貴樣はそれを知つてゐる筈だ。』

この時、私達は丁度、「下剤をかけた病人」といふ芝居をやつてゐた處でした。この町では初めての狂言でしたから、見物人も一生懸命だつたのです。ですから見物人が先ず承知しませんでした。

『おい、お巡りさん。邪魔をするない。芝居をさせろよ。』

見物人はわい〳〵どなり立てました。

お爺さんは騷いでゐる見物人に向つて、『皆さんお靜かに!』といつて先ず靜めました。それから自分のかぶつてゐた毛皮の帽子を脫いで、三度巡査に向つてうや〳〵しくお辭儀をしました。

『法律のお力を代表して御座る閣下は、私の俳優どもに口輪をはめろといふ御命令なので御座りまするか。』

『さうだ。お前の犬に口輪をはめるのだ。それも直ぐにだ。』

『ヘエ、あのカピとゼルビノとドルスに口輪をはめろと仰るので御座りますか。さて〳〵それはまたあいにくなお考へで御座りますな。何故と申しますと、世に名高い大先生のカピ殿が鼻の先きに口輪をかけて居りましてはどうして不幸なジョーリークールさんに吞ませる下剤の調合をいひつけることが出來ませうや。外に物もありませうに口輪とは醫者といふ職業に適はしからぬ道具で御座ります。』

お爺さんは巡査に說明するよりは、むしろ見物人に向つて聞えよがしに言ひました。この「下剤をかけた病人」では白犬のカピが名高いお醫者樣で、お猿のジョーリークールはそのお醫者樣から藥をもらつて、吞む病人になつてゐました。

見物人はお爺さんの演說が終つた時、どつと笑ひました。子供達はきやツ〳〵つて笑ひました。お爺さんは喝采されたのでいよ〳〵いゝ氣持になつて尙しやべり續けました。

『さてまた、あのきれいな〳〵看護婦のドルスにしましても、法律の慘酷な御命令を實行されました時には、どうしてあの巧みな辯舌をもちまして、病人の苦痛を和げる下剤を吞ませることが出來るで御座いませうや。賢明

なる御見物樣方の御判斷を仰ぎ奉ります。』

見物人がまた一齊にどつと笑ひ崩れました。喝采する者もありました。皆なはお爺さんに賛成して巡査を嘲弄したのです。殊にお猿のジョーリークールは蔭の方で妙なしかめつ面をしてはみんなに見せてゐるので、それが可笑いといつて見物人は笑出しました。ジョーリークールは丁度巡査のすぐ背後にゐて、巡査のする通りを身振りで眞似てゐるのです。巡査が腕を組んだり、拳骨を腰にあてたり、頭を後に反せたりすると、ジョーリークールもその通りをやりましたから、見物人は腹をかゝへて笑ひました。

巡査はその時、何をみんなが自分の背後の方を見て笑つてゐるのかと思つて、ひよいと振向きました。すると、猿が妙な身振りをしてゐるものですから、巡査はむつとして睨めつけました。ジョーリークールの方でも、巡査を睨めつけましたので、しばらく双方で睨み合ひが始りました。見物人は面白がつてわい／＼騒ぎました。しかし、睨めつこでは巡査の方が負けでした。

巡査はお爺さんの方へ向つてもう一度怒鳴りました。

『貴樣の犬が明日になつても口輪をはめなかつたら、すぐ貴樣を拘引するからさう思へ。』

『左樣なら！　閣下。御氣嫌よろしう。何れまた明日！』

お爺さんは巡査の後姿に向つて敬禮しました。

その晩、宿屋へ歸つて來ましたが、お爺さんは巡査と喧嘩したことについては一とことも言ひませんでした。しかし、犬の口輪はきつと買ふのだらうと思つてゐたのに少しもそんな樣子がないのです。私は我慢がし切れないで、遠廻しにお爺さんにきゝました。

『明日芝居の最中に、もしか、カピが口輪を切るやうなことがあるといけませんから、今のうちに口輪をはめて練して置いたらどうですか。』

『お前は田舍の子だね。お百姓のやうに、お前も巡査をこはがつてゐるのだね。心配おしでない。私は明日うまい工合にやつて巡査が私をつかまへることの出來ないやうにして見せる。また犬達にも不愉快な思ひはさせないやうにするつもりだ。だから、お前は明日は、猿のジョーリークールをつれていつもの處へ行くのだ。お前は昨日のやうに縄張りをして竪琴を二三度お彈き。すると、見物人が大勢集つて來て、巡査もぢきにやつて來るに違ひない。そこへ私が、犬をつれて出て行つて面白い茶番を一つやつて見せるから。』

お爺さんは何か考へがあるやうにいひました

私は、その翌日一人で行くのは本當にいやでしたが、お爺さんのいふことに從はない譯にも行かないので、出て行きました。

私は樹の下のいつもの場處へ來ると、圍の縄を張つてすぐと竪琴を彈きはじめました。見物はぞろ／＼方々から集つて來て、縄張りの外に立ちました。私はこの頃では唄も上手に歌つたし、竪琴も巧く彈きましたからいつでも見物から喝采されました。しかし、その日の見物人は私の唄や琴をほめるために來たのでないことはよくわかつてゐます。その日の見物人は昨日巡査とお爺さんの喧嘩を見た人達でした。おまけに、友達まで引張つて來てゐました。昨日の爺さんが今日巡査にあつてどんな風にやるか、それを見たくて集つて來てゐるのです。ですから、中には、私とお猿のジョーリークールだけしかゐないのを見て、

『おい、お爺さんは來るんだらうね。』と、心配して聞く者もありました。

ところが、お爺さんの來るよりか先きに巡査が來ました。猿のジョーリークールは眞先きにそれを目つけましたから、早速昨日のやうに腰に拳骨をあてゝ滑稽な威張りくさつた風をして大股に歩き出しました。見物は猿の道化振りを可笑しがつて手を叩きました。巡査はこはい目で私を睨めつけました。

私は心配になつて來ました。お爺さんがゐれば何とか巡査に答へてくれるでせうが、もし今私にこゝを立退けといはれたら何といつていゝかわかりません。

巡査は縄張りの外を行つたり來たりしてゐます。私の側を通る時には睨めつけるやうにして通りますから、私はいよ／＼心配になりました。

私はジョーリークールがあんまりやり過ぎると思ひましたから『これ！　これ！』といつて呼びましたが、少しもいふことをきかないのです。私がつかまへようとすれば、ひよいと駈け出して、素早く身をかはし、相變らずひよつこり／＼歩いてゐます。

巡査はすつかり腹を立てゝ了ひました。私が猿をけしかけてゐるのだと思つたのでせうか、いきなり縄張りの中へ飛込んで來て、ガーンと一つ私をなぐりました。

私が目を開けて起上らうとした時、いつの間に飛出して來たのか、お爺さんがそこに立つてゐました。お爺さんは丁度巡査の腕を抑へたところでした。

『私は、あなたが此子を打つのを止めます。何といふ卑怯な眞似をするのです。』

お爺さんは怒つて叫びました。しばらくの間、巡査とお爺さんは睨み合つて立つてゐました。巡査も紫色になる程に怒つてゐました。

その時のお爺さんの樣子は實に堂々として相手を抑へつけるやうに見えました。しかし、巡査はなか／＼へこみはしません。いきなり兩腕をひろげて、亂暴にもお爺さんの襟首をつかまへて前の方へ押出さうとしました。

お爺さんは、その時、よろよろと倒れかけましたが、すぐに立直つて平手でもつてポンと一つ巡査の腕首を打ちました。お爺さんは岩丈な人ではありましたが、何といつても老人です。若い、しかも、もつと岩丈な身

聲をしてゐる巡査に適ふわけがありません。でもいゝ工合になぐり合ひにはなりませんでした。

『俺と一しよに來い。拘引するから。』

と、巡査が叫びました。

『しかし君は何故あの子を打つたのですか。』

『餘計なことをいふな、默つてついて來い。』

お爺さんはそれには返事をしないで、私の方を振り向きました。

『お前は宿屋に歸つておいで。さうして犬と一しよに待つておいで。後から直きに便りをするから。』

お爺さんはそれ以上私にいつてゐる暇がありませんでした。巡査はお爺さんを引摺つて行つたのです。犬達はお爺さんの後について行かうとしましたが、私が呼んだので戻つて來ました。氣をつけて見ると、犬達はみんな口輪をはめてゐます。けれども、それは金網や金輪でこしらへたものではなくつて、たゞ細い絹糸を二三本身のまはりに結びつけて、額の下に房をたらしてゐるのです。お爺さんがいひぬけをする積りで仕組んだのはこの事だつたのです。

見物人は散り／＼ばら／＼に行つてしまひました。でも、三四人、閑人だけが殘つて何か切りと議論をしてゐます。

『僕はあの爺さんの方が尤もだ、と思ふ。』

『ナニ、あの男が間違つてゐるのだ。』

『それなら、何故巡査は子供を打つたのだ。一とことだつて口をきゝはしなかつたのだ。』

『結局はとんだ災難さ。巡査に反抗したことがわかれば、あの爺さんは監獄行きだ。』

私はみんなが議論しあつてゐる間に犬や猿をつれて淋しく宿屋へ歸つて來ました。私はこの頃ではお爺さんがすつかり好きになつてゐたのです。私達は朝から晩まで一しよに暮して來ました。どうかすると、夜から朝まで一しよに藁の寢床に眠ることもありました。全くどんなお父さんだつて、お爺さんが私にしてくれた程行屆いた注意をしてくれる事は出來ないでせう。長いさまよひの旅の間にお爺さんは私に字を讀むことも、唄をうたふことも敎へてくれましたし、計算をすることも敎へてくれたのです。またひどく寒い日には毛布を半分私に分けてくれたし、暑い日には私の代りに荷物をかついでくれました。それからまた、食事の時でもお爺さんは自分でいい處だけを食べて、私に惡いところをくれたりはしませんでした。私はお爺さんを好いてゐました。お爺さんの方でも私を好いてゐました。ですから、別れたのが何よりもつらいのです。

いつになつたら、私はお爺さんと一處になれるのでせう。お爺さんは何處の牢屋へ入れられたのでせう。その間、私はどうして暮したらいゝでせう。

お爺さんはお金を自分の身につけてゐましたが、引ぱられて行く時には、私に何にも渡す暇がなかつたので、私はお金といつてはポケットに五六錢しか持つてゐませんでした。これだけでは、猿のジョーリークールと、犬と私が、食べるだけのものも買ふことも出來ません。

その後二日の間、私は宿屋に閉ぢこもつて暮してしまひました。猿も犬も私と同じやうにしよぼ／＼してゐました。三日目になつた時、お爺さんからの手紙が屆きました。

『私はこの次の土曜日に裁判を受けることになつてゐる。私は癇癪を起して惡かつた。とんだ災難だが今となつては仕方がない。土曜日にはお前も裁判所へお出で。きつと敎訓になることがあると思ふから。』と、かう手紙に書いてありました。それから、また、自分に代つて犬や猿を可愛がつてくれるやうにとも書いてありました。

ぢきに土曜日の朝となりました。私は朝早く宿屋を出て裁判所へ行きました。そして第一番に傍聽席に入りました。泥棒をして捕つた男が裁判を受けた後で、お爺さんは引出されて來ました。お爺さんは二人の憲兵の間にはさまつて腰掛にかけてゐました。私はお爺さんが何といつて訊かれてゐたか、又夫に對して何と答へたか、私はあんまり昂奮してゐたのでさつぱり分りませんでした。私はたゞお爺さんを見てゐました。お爺さんは白髪頭を後に反せて眞直立つてゐました。

『お前は警官をいくども打つたか。』

と、裁判官が質問をはじめました。

『いゝえ、何度も打ちはしませぬ。たゞ一度私は手を上げました。私がいつもの芝居をする場處へ來ましたところ、警官が私のつれてゐる子供を地面へ打ち倒したのを見たからでございます。』

『だがその子はお前の子ではないのだらう。』

『はい、しかし、私の本當の子供のやうに可愛いがつてなります。それを警官が打ちましたので、私はかつとなつて警官が打たうとする手を押へました。』

『お前は警官を打つたのだらう。』

『警官が私に向つて手を上げましたから、私は最早警官と思ふことが出來ませんから、普通の人としてこれに向ひました。あんまりひどいことをされたので、かつとなつてしまつたのでございます。』

その後で巡査が呼び出されました。巡査は自分の言ひ分を切りと述べたてました。その間にお爺さんは、誰かを探すやうに傍聽席の方を切りに見廻してゐます。お爺さんは私を探してゐるのだと思ひましたから、私は思切つて大勢の中を押し分けて行つて一番前の列の、お爺さんの席のすぐ近くへ駈けて行きました。お爺さんの淋しい顏は私を見ると輝きました。私の目も涙で一ぱいになりました。

間もなく裁判はおしまひになりましたが、お爺さんは二ケ月の懲役にきめられてしまひました。あゝ、お爺さんは二ケ月の懲役です。裁判所の扉は開かれました。そして、お爺さんは引張られて向へ行つてしまひました。あゝ二ケ月のお別れです。その間、私はどうして暮して行けるでせうか。(つゞく)

けらのねぼけ

若山牧水

螻が一疋ひよつこりと
畦の穴から這ひ出して
『今晩は、今晩は』と云ひました
空には霞んだ月ばかり
返事がないのでこそ〳〵と

大きなお尻を振り向けて
いま出た穴へと入りました
おほかた寝呆でござりましよ

幼年詩

若山牧水選

こげつどうのゑんとつ（賞）

千葉縣山武郡東金校尋五　阿部倉ハツ

あさからばんまで
やすみこなしに
ほつほ〳〵と
くろけぶはいて
てんへあがると
あめがふる

評、いかにも娘らしいあなたと靜かな景色とが想像されます。（牧水）

ホシ（賞）

東京モモゾノダイ二小ガク尋一　長尾港太郎

ホシガカタマツテキル
一ツキエタトオモツタラ
マタ一ツデタ
オモシロサ

評、ホシガミナ生キテルヤウデス。（牧水）

ユキノウタ

山口縣柳井小學校尋二　岩崎克已

ユキユキ
フレ
ボクハユキガイチバンスキ
ソレカラアラレモスキ
ソレカラコホリモスキ

評、雪ガイヒマシタ、ワタシハ岩崎君ガ一番スキダト。（牧水）

雪

東京桃園第二小學校尋三　長尾園子

お日様が照つた
雪がきら〳〵
光つてる

評、ほんたうにまぶしいやうです。（牧水）

くし

山梨縣北巨摩郡多麻校尋三　八巻正代

綴方

編輯部選

おそろしかつたこと（賞）

香川縣木田郡水田校尋六　國方ハルエ

雨が降つたあげくの頃でしたから道は大變惡くて、大人でさへ隨分氣をつけないとどろだらけになります。私は妹をつれて急いで歸つてきますと、向ふから馬が一生懸命に走つて來ます。つれはみんなたんぼへ逃げこみましたが、私は小さな妹をつれてゐるので逃げたいが妹がマゴ〳〵として思ふ樣になりません。すると妹の下駄のをがきれましたので妹は泣き出しました。私はどうすればよいかともうあはてゝ妹をひつかゝへてたんぼへ逃げこみました。馬が通り過ぎてから妹をつれださうとしたが、妹は八つにもなるので逃げこむ時は氣がはつてゐたからすぐひつかゝへてつれ込みましたが、中々つれだせません。思案してゐると近所の女の人が來てヤツとつれ出してくれました。

私の母様（賞）

福島縣石城郡平第二校尋二　大谷壽美

私のかあさまは、お年は四十二です。それはよいかあさまです。それでもおしかりになる時には、なか〳〵こはいのです。私がべんきやうをして居てわからない字はよくおしへて下さいます。お使に行く時でもつれてつて下さいます。かあさまが私に「お使に行つていらつしやい。」とおつしやつたとき私が「はい。」といつてお使に行くと大そうよろこんでほめて下さいます。

僕とさびしい夜

東京市神田區表猿樂町二　押田義行

戸ががたんと音をたてたので、僕はびつくりした。つゞいて、がらす戸が、がちや〳〵と音をたてた。僕はどろぼうがはいつて來たんだと思つて、けんこをかためたが、どうしてもこわくて自分でもしらないうちに、とこの中にだんだんともぐりこんだ。こんどはがたんと、けんきうしつの戸を誰かゞ開けた。

僕はます〳〵こはくなつて一生けんめいにとこの中へもぐりこんだ。すると「おくさま」と、よんだのは、家の女中のこゑであつた。僕はきうに安心してとこの中から出ると、くたびれてがつかりしてしまつた。

出來ごと

茨城縣多賀郡秋山校尋五　沼田さつ

ある日のこと、一人のとろひきが馬からおとされて歩けないでゐた。そこへとろがはしつてきて、その人はかはいさうにひかれてしまつた。

とろにのつてゐた人はおどろいて「おほい〳〵」とよばつたら、炭坑の人たちがあつちからもこつちからもたくさんあつまつてきた。そしてすぐたんかうのいしやへかつぎこんだ。その時、ひかれた人はむちゆうになつてばつかとみてゐた。そのあしたであつた。にぐらやさんが私の家へにぐらをこしらへにきた。私ははだつときからをはるま

栗原先生（賞）　千葉縣東金校尋五　片岡美穂

あをいくし
あかいくし
ひとつかふ
いいのをかふ

評、せい〳〵いゝのをごらんなさい。(牧水)

いてた雪

福井縣大飯郡
高濱校高二　坪内千代子

雪のいてた朝に
七八人の友達は
ぐざ〳〵〳〵と
雪の上を歩いてる

カハラヤノウタ

山口縣柳井
小學校尋二　梅田諭喜

カハラヲコシラヘテヰル人ハ
エライコトデハナイカネエ

評、ホントウニサウデスネエ。(牧水)

草燒いた跡

香川縣木田郡
水田校尋六　大熊又平

草燒いた跡は黒いな
墨の色より黒いな
草燒いた跡はさびしいな

しなじん

茨城縣眞壁郡
大寶校尋四　關口松子

しなじんからかさ
うりにきた
しなのことばで
ようくわかんね

雨

香川縣木田郡
水田校尋六　松下シズ子

雨がよこからふつてくる
小さい子供が
よこにかささして
ひよろ〳〵と

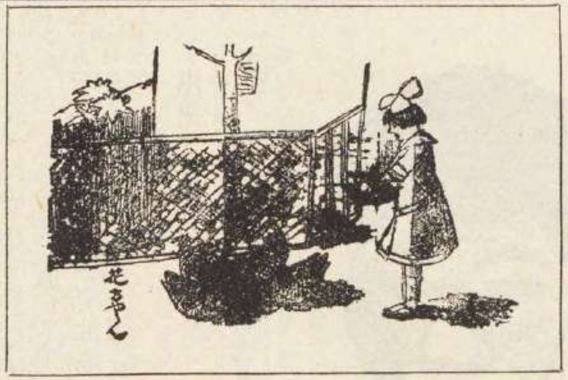
たこ

茨城縣結城郡
五箇校尋五　齋藤勉

たこのすきな太郎さん
まいにち野らであげてゐる
風がよわいけれ
しつほをみぢかく
風がつよいけれ
しつほをながく

花ちゃん(賞)

神戸市探本通
四丁目　高橋久藏



でみてゐたのでかへるとき私にぜにを十錢くれていつた。私はそのぜにで唱歌帳をかつた。

學校へ行く道で

臺灣臺北城東
小學校尋三　武藤珍子

私が學校へ行く途中、臺北中學校の人がお芋をたべながら道を歩いてゐました。そこへおなじなりをした人が、だいぶうしろからその人をよぶと、その人はポケットにお芋をかくして手を口の所へやつて來さうにして居ました。間もなく後からよんだ人が來て「君何かたべてるね。」と言ひますと「あんまり寒いから手を口の所へやつてるんだ。」と言ひましたが、その人がだいじさうにポケットに手をつつこんだので、よんだ人にたうとうお芋を見つけられました。私はその時たちどまつて見て居ましたが、專賣局のふえがピーとなりましたのでかけつて學校へ行きましたから、その後のことはわかりませんでした。

よつぱらひ

東京府下蒲田
小學校尋五　中澤養子

ある夕方の事であつた。お母様は臺所でお夕飯の支度をして居た時、入口があいて兄さんがしらない人と話をして居た。だれかと思つて私がからかみのすきからのぞいて見ると、へんな人が上らうとして居たので兄さんはびつくりして居た。其の人は兄さんの顔を見ておどろいて「あゝこれはちがつたごめんなさい」と言つてよろ〳〵しながらあつちへぶつかりこつちへぶつかりしてやつとこうしを出て門を出ようとしたが、中々出られないでまごまごしながら門の所までいつたが、こんどは敷居が高いので中々出られないでゐた。やつとで表へ出るとつまずいて、ころびさうになつた。そして今度はおとなりへ入つていつたが又こつちへもどつて來て、家のこうしがあけてあるのを見て「あ、すみません」と言つたのでしめてくれるかと思つて見て居たらよろほり〳〵向ふへ行つてしまつた。私はこはいからちゞこまつて居たが行つてしまつたのでこうしをしめに出た。

少女の顔(賞)

千葉縣東金小學校尋五　峯島梅子

お母さん

栃木縣河内郡
吉田西校尋三　宇賀持保雄

私のおかあさんは今うちには居ません。千葉縣の

オツキチヤマ

東京市外東中野一六七五　長尾留二（四歳）

オツキチヤマ
ハンブンダ
ダアレガタベタンダ
オニイチヤン

評、アナタモスコシタベタデセウ。（牧水）

停電

東京市芝區聖坂小學校尋六　山田喜之助

でんきがきえた
らうそくつけた
でんきがついた
らうそくけした
でんきが又きえた
まつくらになつた

ハナ

山口縣柳井小學校尋二　恩田次郎

ハナヤ
ハナヤ
オマヘハ
ハチニ
ミツヲトラレルヨ

評、イ、エ、アレハアゲルヤクソクニナツテキタノデス。（牧水）

風の神

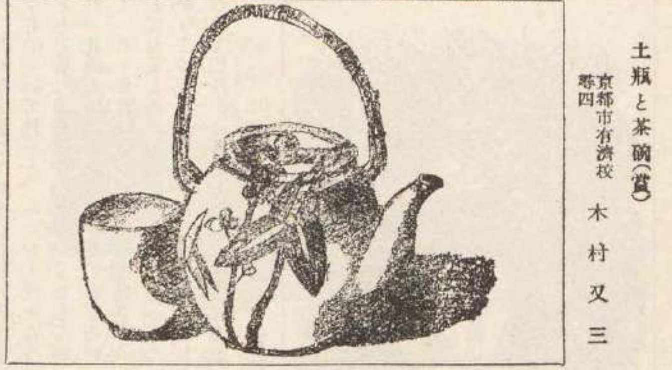
東京市下谷區下根岸町廿六　中山君子（十二歳）

風が吹く
草木はゆれ出す
電線までゆれる
ぼうしは飛んぢまう
目にごみがはいる
砂は波の樣におしよせて來る
風の神樣こわいよ

廣い野道

香川縣木田郡水田校尋六　小比賀テル子

廣い野邊に
おばあさんが
ひよろひよろ子供を
つれて來る
後から大きな
荷車が來る



土瓶と茶碗（賞）

京都市有濟校尋四　木村又三

方へ行つてゐますから家へかへつてもあふことは出來ません。お母さんの家は千葉の木更津の在で、東京わんの近くでございます。皆さんはおかあさんが家にゐるでせうから、早く學校からかへつてあふことが出來ていいでせうが、私はいくらあひたくもあはれないのが一番かなしくなります。

オヂサンノオウチ

東京小石川金富校尋一　小田アキラ

ワタシノオヂサンノオウチハ、アジサイガキレイニサイテキレイデス。アジサイノヨコニウチガアリマス。ソレハオヂイサント、オバアサンノウチデス。オヂイサントオバアサンノウチニハ、ニハトリガタクサンカツテアリマス。マイ日タマゴヲウミマス。ワタシガユクトイツモタマゴノオゴチソウガデマス。ソオシテオウチノマヘニ川ガナガレテキマス。ナツハイツモオヂサンノオウチヘトマリニユキマス。

菓子屋のお婆さん

靜岡縣沼津小學校尋四　青島英夫

僕の家の近所にたつた一軒菓子屋があります。其の菓子屋にお婆さんがあります。歳をとつて居りますが、達者で遊ぶ事がきらひで働く事が大好きで、毎日日當りの好い縁側で眼鏡をかけて針仕事をして居ります。又笑ふ顔でも怒る樣に見えます。あまり皺がよつて居るので爪にまで皺がよつて居るかと思はれます。又僕は時々遊びに行きます。大へん正直でだましたりすることは決してしません。又耳が遠いので話をするには口をそばによせてしまます。それから大へん心がやさしいので僕は菓子屋のお婆さんが大好きです。

壺（賞）

深川區數矢校尋六　稻垣鐵三郎

私はけたです

大阪府茨木小學校尋三梅組　木成富江

私はけたです。もとは大阪のげた屋の棚におかれてゐました。そして私ははな子さんのお母さんにかはれました。はな子さんにはかれましたところが、はな子さんがどろの中をおあるきになつたので、私はどろだらけになりました。はな子さんがお母さんにしかられてゐなさるのを私は、だまつてあしもとできいてゐました。

ユキ

東京市外東中野一六七五　長尾アキコ

ハタケニ
ユキガフツタ
木ノアルトコロダケ
アナガアイテル

評、ヨク寫生ガデキマシタ。（牧水）

つらら

茨城縣多賀郡秋山校尋五　沼田吉人

つららがづらりと
ならんでる
毎日つららの
ぎようれつだ

馬

東京市淺草區三間町二番地　松井純三

豆腐屋の前に
馬が二匹止つてた
何をしているのかと
のぞいて見たら
白いお水をうまそに
飲んでた

腹の立つ事

三重縣桑名第二小學校尋五　不破義幹

「おのれ！」と云つて、僕は道ばたにあつた小石を拾つて逃げて行く三ちやんめがけて投げつけようとすると、後から「こら何をする」と鋭い聲がした。後を見ると、いつの間にか兄さんは振り上げた手をしつかりおさへて石をもぎとつてしまつた。

「こんなに三ちやんが喰ひついた。」と泣聲でもがきながら兄の手をはなそうとしてもなか〳〵はなさない。「喧嘩をする位なら遊ばぬがよい、全體お前が無理を言ふからだ」「いや三ちやんが無理言ふたんだ。」遠くはなれた三ちやんは「やーい、泣蟲やあい〳〵」とかけてつてしまつた。

僕ノクイシンボ

東京麻布區東町小學校尋五　大垣豊

僕ガ勉强ヲシテヰルト弟ガオイシサウナオ菓子ヲ持ツテ來タノデ、クイシンボノ僕ハ「オクレヨ」ト言フトサモオイシサウヱミセビラカシテ「イヤダイ〳〵」ト言フノデアツタ。僕ハタウトウガマンガ出來ナクナツテ「末男モ柾男モイ、コダヨ」ト言フト弟ハ「アゲヤウホラア」「アタイモイイコダロ」トイツテ、ヒザニモタレチ半分クレタ。父頭ヲナデテヤルト「モウ半分アゲヨウ」トクレタ。僕ハオ菓子ヲミンナタベテシマツタ。

僕のくせ

大阪天王寺師範附屬校尋三　武貞茂

僕は何時も算術のしゆくだいが出きなかつたりしたら、すぐえんぴつをかんで折つてしまひます。いままでえんぴつを何本かんで折つたかさつぱりわかりません。僕の使ふえんぴつは、どれでもはがたがついてゐます。えんぴつは僕をにくんでゐるでせう。しまひには僕はえんぴつをつかへなくなるかもしれません。僕は、早くこのくせをなほさうと思ひますがどうしてもなほりません。

時計

東京市本郷誠之小學校尋三　岡崎英一

ウチノゲンカンニカカツテルハシラドケイガ、イツテヰル。「ゴン、チン、チャン、チャンワタシガココデミテヰルト、アサカラバンマデヒトガクル。アレガイチバンオカシイナ。ハイルトスグニコロガツテ、シキヰヘアタマヲウチツケテ、オホキナコブヲコシラヘタ。ワタシガ、ワラツテヤツタラバ、オコツタカホシテイツチヤツタ。ゴン、ゴン、チン、チン、チヤン、チヤン、チヤン。」

屋根の雪

京都府中郡三重校高二　澁谷光明

屋根の雪がずつて來る、
ずるずる〳〵ずつて來る。
ひさしのところまでずつて來て、
落ちよかどうしよと下見てる。

雲

大阪府東成郡中本第一校尋五　赤土齊

てんのくもが
のそりのそりと
あるいてきた
しろくも
あほぞら
くろくも
手をつないだり
手をはなしたり
しろくも
あほぞら
くろくも
てんのくもが
のそりのそりと
あるいてゆく

栗原先生（賞）

千葉縣東金校尋五　岩崎孝

遠藤君

北海道函館千代ケ岱四六高橋方　西塚文雄

遠藤君は落第生である。僕等と一緒になつて勉强して居るけれども、今年もあやふいと先生に言はれて居る。遠藤君はそれでも平氣で怠けて居る。遠藤君のお父樣は車屋で遠藤君は貰ひ子である。お父樣もお母樣も貧棒な中から商業學校にあげて居るけれども、遠藤君はさつぱり孝行はしない相だ。遠藤君が「靴を欲しい。」とお父樣に願つた時、お父樣は自分の靴を買はないで、立派な長靴を買つてくれた相である。遠藤君はそれでも平氣でなまけてゐる。

通信

自由畫選評

山本鼎

△今月は、數も多かつたし、いゝ畫も多かつた。今月のやうに佳い畫が出て來ると、選畫もほんに樂しみです。

△佳作が多かつたので、二た組み選拔した。五月號と六月號にそれがのるわけです。

△人物寫生のデッサンに佳作が多くなつて來たのはうれしい。諸君の眼がだん〳〵たしかになつて來る證據です。

△峰島梅子さんの少女の寫生はしつかりして居る。濫色のきたないちらばりがすつかりとれたやうだ。對象をしつかりと感じ、そしてびく〳〵しずに描いて居るのが何よりだ。

△片岡美穗君の『栗原先生』は愉快な畫だ。耳が片つぽとんでもない處にくツついて居るが全體の印象に力がある。栗原先生の物實な大層强く感じましたれ。かういふ類の先生はきつと繪が好きにちがひない。

△岩崎孝君のもよい。併し君には、この頭デツカチが氣になりませんか、まさかわざとではないでせうれ。

△稻垣鐵三郎君の『壺』おとなしく、よく寫生してあります。

△木村又三君の『茶わんと土びん』も同じやうに佳い。特につるがよく描けて居る。

△『花ちやん』といふ畫も佳い。しつかりと描けて居る。(二月廿五日)

幼年詩選後に

若山牧水

どんなに上手に作つてあつても、作つた人のこゝろもちがその歌に乘つてゐないと、その歌はいゝ歌ではありません。言葉の調子や歌つてある事がらは平凡でも、作者の心持が充分にその歌に通つてをればいゝ歌だと思ひます。

たとへば、今月號で梅田君の『瓦屋の歌』は一寸歌とはいへない位ゐ何でもない事が歌つてあるのですが、「カハラヂコシラヘテキル人ヘ、エライコトデハナイカネエ」といつたゞけのなかに、その瓦をこしらへてゐる人に對する梅田君の感歎の心は充分に表ばれてゐると思ひます。雪を歌つた人が今度はたくさんありましたが、たゞ雪をきれいに見せようとか、雪を寒いものに歌はうとしたのが多くて實際に自分が雪に對しての心持を歌つたのは誠に少うございました。

一つの小學校から纏めて送られたものが隨分ありました。中で今度は山口縣柳井小學校からの分が最も揃つても居り、優れても居りました。そこの學校にはどんなに大勢愛らしいきれいな少年少女諸君が居らるゝ事かと思はずには居られないほど、すべての歌がすなほで自由でそして元氣のいゝものばかりでした。次いで千葉縣茨城縣山梨縣香川縣の學校にいゝのがあつた樣です。

全體に數も多くなり、出來もよくなりました。私は正直のところ、どれとどれを採つてどれとどれを沒書にするか、どれを推薦にしどれを入賞にするかなどといふことですつかり頭を痛くしてしまひました。まだつくんつくんと痛んで居ます。ひどくまづいのはさうでもありませんが、相當によく出來てゐるのを行數の都合で沒書にする時は、まつたく一篇々々を押しいたゞいてから捨てる樣な心持です。

綴方について皆さんへ

選者

今月の綴方は、齊藤先生がお忙がしいために私が代つて拜見することにいたしました。これまで皆さんの綴方を拜見する場合がなかつたので、第一に、私のおどろいたのは、何千枚とある澤山の投稿であります。私はこの澤山の投稿を一枚づつ讀んでゆきましたが、私の平常考へてゐるやうな綴方の少いのにがつかりしました。皆さんは、自分の見たこと、あつたことを、眞直に言はずに、いろ〳〵と餘計なことがらをつけ加へて、いゝ文章を書かうと苦心したあとが、あり〳〵と見えたので私はかなしくなりました。いゝ文章を書かうとすると、言葉を飾りたくなつたり、横道へそれたりして、折角の綴方が死んで了ひます。皆さんが平常お話をする言葉でずん〳〵書いてさへゆけば、ひとりでにいゝ綴方が出來て、ひとりでにほんたうの文章にもなるのです。大人になるほど綴方の下手になるのは、文章を飾つたり、眞直に云つたのではつまらないやうに思つていろ〳〵と餘計なことを書き加へるからであります。(野口)

新しく出た本

◆眞珠島(三木露風先生著)「金の船」に山田耕作氏の作曲をつけて「きり〴〵す」の童謠を發表された三木先生の童謠集です。詩壇に於ける三木先生の名聲はどなたも御存じと思はれますが、童謠界に於ても澤山の憧憬者を持つてをります。只今は北海道のトラピスト修道院で若い修道士を教導しながら靜に詩作をされてをります。童謠研究家は勿論のこと詩作にこゝろざす人にも良い參考になります(山田耕作氏作曲三篇、初山滋氏挿畫十七葉入り、四六版本文二百三十二頁、定價二圓八十錢。東京神田仲猿樂町アルス發行)

◆ポチの學校(野口雨情先生作謠、中山晋平先生作曲)この本は尋常一二年から三四年位までの子供さん達が唱歌の代りに歌ふやうにと兩先生が永い間苦心されて作られた新童謠樂譜の第一編です。たとへば「ポチは幾つになつたでせう、七つで學校へゆくでせうか、いえポチの學校はありません」と云ふやうに、皆なやさしい歌詞にやさしい譜がついてなりますから誰にでも直ぐ歌ふことが出來ます。殊に岡本歸一先生が描かれた赤や青で四庇刷の可愛らしいポチの繪の厚い表紙がついてなります。又どの謠にも一つ〳〵矢部季氏が描かれた親みの多い挿繪がついて居ます。學校でも家庭でも子供さん達は無論のこと父兄方の御參考にもなるよい本です。(菊半截形、一冊三十錢、送料二錢、東京市外下目黑四六八白眉社發行)

▼童話掲載外佳作

△鬪雞の死(永橋卓介)△お爭に脅びえた話(寺島酉男)△人間と犬(佐々木高明)△お良ちやん(若林八重子)△畜鬼婆物語(及川一郎)△茶碗と豚(作間博)△薔薇姫(村田翠子)△楠の話(平松正樹)△不思議な甕(今岡伸)△金木葉の笛(高木一夫)△片耳のないお爺さんの話(松尾利信)△善吉と蛇(堀田双葉子)△議論好きの兄弟(北田初子)△鷹に逃げられた話(眞木信一)△善い木と惡い木(松村淑郎)△小鳥の死(東山新吉)△狐の坊主(森勝男)△月に三圓(西澤武夫)△蟬のお化け(今井正)△盜人(日比定一)△梅とふきのとの願ひ(花世男敢子)△ゐばつた猿公(佐々木友治)△銀の小壺(大島敬司)△黑勇士(梅田三良)△盲人と鯉の目(小野素水)

▼童謠掲載外佳作

△すゞめ(和田ミツ)△峠の灯(市川舒)△雪ふり(安藤和三郎)△チヨコレート(若尾鶴子)△凍えて死んだ(中野三郎)△とび(等々力斐路)△椋の實(栁瓣)△燈船(みづやなぎ)△桃の花(柄澤清)△京人形(石井まやを)△カナリヤ(秋山英)△跛の鵜哥(桑原長五郎)△時計の針(左部睦男)△雪と雀(阿部貞夫)△雨の降る日(内田花堤)△ひよの命(中本正信)△お日樣さよなら(三橋態夫)△母のない子の唄へる(山本あきら)△松の木(鈴木武良)△春雨(上原孝信)△柳のさゝ船(菅沼百合子)△雪解(片田忠雄)△僕が大きくなつたなら(鈴江八十八)△林檎(吉川こういち)△おめん(川崎静方)△夕やけ(小松米子)△お山の小兎(伊藤壽夫)△もやのふかい朝(雲雀の子)△三日月さん(上島時之介)△猿の

童話の選後に

齋藤佐次郎

△今月集つた童話の數は百篇餘で、いゝ作も相當にあつたので、どの作を推薦にするかについてはかなり考へさせられました。しかし以前推薦の候補にあげて置いた白江好郎さんの「てんとう蟲の宴會」が最も優れてゐる事を知つたので、兎に角今月はこの作を擧げました。この作はもつと以前に推薦にすべきものでしたが、季節が適さないためにそのまゝになつてゐたのです。

△外に目立つた作を二三擧げますと、永橋卓介さんの「鸚鵡の死」が先づいゝ作でした。人間生活の一斷面にふれる事が出來て感動を與へます。いゝ材料です。まだ／＼扱ひ方によつては面白く行くとは思ひましたが。

△佐々木高明さんの「人間と犬」には皮肉な觀察がありました。しかし、狙ひ處と表現法が少し童話向きでないやうです。

△童話へ美しい思想を背景として持せる事は非常に結構な事です。しかし、その爲めにお話としての面白味がなくなつて、骨と皮ばかりでかんじんの肉のおいしい處がなくなるやうな傾きがあります。これは童話として考へものです。背景に深い思想がなくとも、何かそこに人の生活にふれる何物かゞあれば、童話としていゝものだといへるでせう。童話にはお話としての面白さを十分に持つてゐる必要があると思ひます。昔から語りつくされてゐる王子や王女の話でも或は狐や狸の話でも差支へありません。扱ひ方と現し方とに工夫があれば新しい童話としての價値が立派にあると思ひます。

△寺島酉男さんの「お亭に脅かされた話」は面白い話ですが、恐怖を抱かせやしないかとおそれます。及川さんの「鬼婆物語」は諸國にある傳說ですが、面白く讀みました。若林八重子さんの「お良ちやん」は大變いゝ作です。やさしい、そして、いゝ處を狙つてゐる優れた作である事を感じました。この外にも澤山いい作がありますが、紙面がありませんから殘念ながら省略いたします。

童謠の選後に

野口雨情

△皆さんは前號(四月號)入選童謠中に「小鳥」といふのが載つてゐたのをお讀みになつたでせう。それが去年の十一月號に出た「親戀し」によく似てゐるから摸倣だらうと云ふ通信が來ました。

△それから、私が「童謠作法問答」中で、摸倣もある程度までは必要だと云つたことについて「親戀し」と「小鳥」位の程度まではいゝだらうかと云ふ通信も來ました。

△かうした通信は、皆匿名でよこしますからどなたゞかお名前はわかりませんが、童謠に熱心なお方に相違ないことゝだけは思はれます。今後ともかやうな疑問の起りました際は、研究にもなりますことゆゑ御遠慮なく通信でおよせを願ひます。

△「親戀し」と「小鳥」とは、實際よく似てをります。片方は蟻で片方は小鳥であるから、蟻と小鳥の遊びだけだと云ふことも出來ます。私も最初から似てゐることはよくわかつてゐましたが、こゝが童謠のむづかしい所で、この場合蟻と小鳥では童謠としてどつちがよいかと云ふ比較考察をせねばなりません。私は蟻よりも小鳥の方が適當でもあり親みも深いのを思つて「親戀し」のあるにもかゝはらず「小鳥」を入選としたのです。

△摸倣も極く初學の方には、お手本を習ふ意味で必要ですが、皆さん方にはその必要はなからうと思はれます。但し、摸倣でも原作以上に優れた作品が出來たならば差し支へない譯ですが、摸倣によつて原作を凌ぐことは容易ではありませんから、なさらないはうが結局皆さんのおとくです。

「金の船」誌友募集

「金の船」の誌友には、いろ／＼な特典が御座います。今や月々非常な勢で增加して居ります。誌友規則書は、編輯所宛にお申込み下さいますればすぐお送りいたします。奮つて御入會下さい

鸚鵡の手帖

△本月の二月から大井、横井兩氏が主任となつて日本大學内に童謠研究會が出來ました。毎月第一日曜の午後から野口先生がゆかれて現代童謠の實作批判や講演があります。

△茨城縣眞壁郡若柳校兒童の童謠集「蝙蝠の唄」が神田錦町一丁目一番地崇本書店から出版されました。岡本先生の蝙蝠の繪の表紙と野口先生の序文もついてゐてほんたうに可愛い本です。

酒(羽鳥精一)△一人ぼつちの梟(花岡正春)△煙管(川口綾水)△走りごく(田村梓)△雪夜のお國(包國浪久三)△星(笹生亭)△足形(臨與みつよ)△海つばめ(長谷川德次)

▼幼年詩掲載外佳作　△雪(名取よしこ)△犬殺し(鳴戸正直)△むかしばなし(野木チエ)△けしごむ(富口はま子)△ゆめ(五味みさを)△姉さん(廣谷珠枝)△苦笑ひ(但田濟二)△からからの道(廣野政次)△ちゝちん(藤森茂)△きんぼ(館太義男)△赤い卵(村鐵芳)△雪(三井みどり)△凍つたお庭(秋山田鶴子)△指きり(三澤正子)△おふろで(佐野ちえ子)△からす(計谷房次郎)△茶ばしら(新津眞佐枝)△あられ(和田元霞)△めんどり(游禮城)△燈明(早野ます)△きくのうた(東敏子)△僕の弟(田中愛三)△あめ(稲田鐵夫)△眠れない夜(溝淵カズエ)△あまだれ(筒井澄子)△うちのばあさん(高桑鐸)△小舟(大塚好之)△家の坊やは面白い(飯島本三郎)△ポプラの木(二瓶正子)△あめや(後藤眞三)△雀の卵(棟方健太郎)△綴方の時間(藤野登久子)△マリ(小笠原律子)△梅がちる(武藤正子)△うぐひす(成瀨三郎)△梅の花(勝井俊三)△金の船(中山初枝)△にはとり(根本義政)△雨の夜(小野美和子)△ばあばの足音(若林博男)△船頭(柳澤秀雄)△お月様のおかほ(山下佳子)△鐵瓶(佐藤三信)△私の母やちん(天野律子)△もみぢ(藤森ゆき子)△おゝきなさい春が來た(小野幸信)△雪だるま(大塚義博)△夜まはり(佐藤欣三)△雀のお宿(齋藤康信)△とこや(今泉東吉)△赤ちやん(小口あい子)△こがら(龍久子)△虹(田所梅市)△ねずみ(坂本利家)△赤とんぼ(大橋美代子)△草ガデタ(井口兼子)

▼綴方掲載外佳作　△僕等(仁木清三郎)△元日の朝(野副靜)△吹雪の夜(中橋リウ子)△僕の樂しみ(菅原一夫)△活動寫眞(加藤清)△小鳌の渡(村山由一)△にじゆう(山田明)△學校の雪(辻林綱一)△霜の朝(澁谷光明)△犬と雪と雨(吉岡敏雄)△狸(堀場政司)△春日和(砂崎君子)△考査(藤原義豪)△本をかりる手紙(高橋久藏)△十日戎(エム・エフ・ラビツト)△お母さんの病氣(本木カナエ)△初春(高田美代子)△私ののぞみ(山本たみ)△時計(坂本誠四郎)△梅(不破義幹)△私の家の別莊(梅田龍子)△さびしい夜(加藤フサエ)△私は水でございます(丸山鶴子)△豆まき(河村榮一)△北の友だちへ(岡田みつ)△あかいひがさ(田中元)△まひ犬(田代榮)△鯛燒(猪堀忠正)△妹(小柳弘道)△もち燒き(岡見謹一郎)△ジョフル元帥に(谷利子)△光る日(吉川緑)△こたつにあたつて(伊藤定一)△僕のカバン(永山正昭)△僕の小さい時(松木堅吉)△若葉の頃(林善郎)△あはれな乞食(吉田ナスエ)△算術のしけん(村木恒夫)△風(中澤義子)△遊び時間(太田龍太郎)△釜(板倉とみ)△夜の勉强(森澤稲子)△△休み中の出來ごと(野木チエ)

▼自由畫掲載外佳作　△飯塚さん(大多和壽一)△インキ(高木直幹)△僕の凧(中島雅男)△栗原先生(△小川恒次)△學校の門(武貞茂)△家の臺所(澤利雄)△南天(香取俊一)△古い土藏(渡邊恒彥)△蜻蛉(野村緑)△宇チ歌ヘテ居ル所(高尾綾子)△ひばち(鈴本仙

編輯室より

△皆さん！ 御機嫌よろしふ。いよ〳〵氣持ちの春が來てほんたうに嬉しい氣が致します。春が來るとゐれむりが出ると申しますが、私共は毎日編輯に追はれてをりますので、どうして〳〵ゐれむり處ではありません。あんまり目を大きく開き過ぎてシンケイスヰジヤクといふ有難い病氣になりました。どの先生もどの先生も頭が痛い、頭が痛いといつてをられます。魔法のお婆アさん！ どうか眠り藥を先生達にあげて下さい。

△近頃「金の船」をまれた妙な雑誌が出來ましたよ「金の船」の評判があんまりいゝのでわざとまぎれやすい名の雑誌を出してウマク賣らうなんて考へてゐるのでせうが本當に淺慮ですよ。カラスがいくらウのまねをしたつて駄目です。堂々といかめしい「金の船」はまれた雑誌が出ることによつてます〳〵立派なものになつて行きます。「金の船」はいつも、いつもザンセンと頭角をあらはして進んで行くであります。

△「金の船」は今狂いよ〳〵大活動をいたします。講演部は日本全國は云ふ迄もなく、遠く朝鮮滿洲青島まで出征いたします。また紙面の上でも、挿畫、口繪、表紙は日本一のお伽畫家の稱ある岡本先生がいよ〳〵馬力をかけて活動なされます。讀物も、日本は勿論のこと東律西律の傑作ばかりを集めて「金の船」さへ讀めば他の雑誌を買ふ必要のない程に必すなることを皆さんの前に誓ひます。

△講演會を開くやうになつてから隨分面白いゴシツプがあります。沖野先生は地方へ講演にお出かけになる度に、いつも澤山のお土産話を持つて歸つてお出でになります。この間茨城縣の久慈町へお出かけになつた時なども主催者の五來さんが沖野先生にしたお話に、『先生！ 私の家の子供には山六爺さんがすつかりしみこんでしまひまして、いまではお湯へ入る時にでも私が「バヾ……」といはなければ着物をぬぎません。それから「ビビ……」といふとお湯へつかります。「ブブ……」といふとお湯から出て洗ひにかゝります。「ベベ……」といふとお湯から上ります。そして、「ボボ……」といふと着物を着るのです。先生！「五音の笛」の有難味を私はつく〴〵感じました。私の家では萬事が山六さんの「五音の笛」で指揮をやつてをります』と。山六爺さんの勢力も實に偉大ではありませんか。

△これは、矢張り沖野先生が此の間甲州の北巨摩郡の増穗村小學校へ行かれた時のお話ですが、全校の生徒を集めてお話の最中、丁度お話が一番の面白い處へ行つて火事がはじまる處まで來たのです。ところが丁度、「ヂヤンヂヤン」と半鐘を打ち出したので『そら火事だ』といよ〳〵大騷ぎになりました。すぐ學校の向から火事がはじまつたのです。お話へ本物の半鐘が入つたのでいよ〳〵面白く行つたに違ひありません。これは神野先生が後からのお笑ひ話。（一記者）

三）直）△枯木（牧野忠之）△豚を唱つてゐる子（堀井祥子）△バケツ（海老澤秀夫）△僕のお父さん（石原俊水）△月夜（黒岩健而）△隣りの藏（稲野七郎）△兵士（平田一幸）△家（金子信造）△ツクバ山（大山忠雄）△火けし壺（花田彌一郎）△お母さん（丸田吉人）△おとうと（中西重作）△景色（岡村不二男）△りんご二つ（井上）△雪の家（島田紅果）△私の叔母さん（彥坂庸子）△南瓜（佐藤勝雄）△オノ上（佐村博）△ノアチヤン（岡村捐夫）△汽車（山中定次郎）△お座敷の机（伊藤登良男）△カリウド（土橋小春）△まさちやん（市東千代子）

◆「金の船」誌友

○福井 川榮正君○青森 西谷眞一君○北海道 佐藤忠藏君○京都 黑岩靜代君○東京 井上正一君○鹿兒島 久保一馬君○東京 松村淑郎君○東京 石井玉太郎君○富山 大場友次君○兵庫 花岡正春君○廣島 實光寺明石燊寮○東京 淵上壬二君○秋田 高橋彦治君○東京 作間博君○東京 上村賢三君○東京 上島時之助君○東京 大倉伊三郎君○新潟 大久保貞君○茨城 大串章君○石川 三森定男君○長野 近藤政展君○大分 楓風小學文庫○高知 高橋三千隆君○宮城 狩野傳君○長野 中村庫之助君○福岡 川野實君○高知 大脇磐君○廣島 山崎幸一君○臺灣 篠崎富貴子君○東京 福島菁子君○愛知 篠田敏君○東京 井村恭也君○長野 上島仲鄕君○東京 隅部壽子君○東京 蜂々力愛路君○東京 大内靜子君○東京 松下萬千代君○岡山 山田君代君○山形 小野瀨のい君○東京 木谷末次郎君（以下次號）

◆「金の船」講演部報告

——童話、童謠の講演十二個所——

「金の船」に講演部の設けられてから、未日は淺いのですが、東京を始め各地方から引き續き澤山のお申込みがあつて、お申込み順に出張してをりますが、それでも一々お招きに應じ切れないのを遺憾に存じます。先づ沖野先生がその後なさいました童話講演の箇所は、

△山梨縣鰍澤小學校（二月廿二日）△横濱文化教會（三月十一日）△大阪市大寶小學校（同月十三日午前午後二回）△京都市平安教會（同月十四日）△大阪府生野村弘濟會（同月十五日）△大阪市市民館（同月十六日）△東京府落合小學校（三月廿一日）

尙、神戸、名古屋は日數のなかつたために改めて出張する筈になつてをります。又、その後、野口先生が童謠について講演をされた箇所は、

△東京府落合小學校（三月二十一日）△女子音樂學校（同月二十六日）△茨城縣水海道校（同月三十日）△同縣下妻校（四月二日）△同縣若柳校（同月三日）

又、近日中に、仙臺市及び神戸關西學院へも出張の筈になつてをります。

以上のほか、お申込み順による出張のお約束が澤山ありますが次號の誌上に御報告をいたします。

「金の船」講演部規定

▽「金の船」は、新時代の童話と童謠を普及するために、講演部を設けてあります。

▽小學校の童話、童謠の會や、子供さん達のあつまりの會へは、お招ぎに應じて出張いたします。

▽講師は、童話は沖野岩三郎先生。童謠は野口雨情先生が擔任されます。童話なり童謠なり、御希望に應じて出張されます但し他に講師のあるときはお斷りいたします。

▽講演は、先生方のお仕事の都合上、月の十五日から二十五日までの間に制限いたします。（尤も、仕事の都合によつては制限外にも出張いたします。）

▽講師に對しては、東京市内なれば車代、地方なれば往復旅費、宿泊を要する場合は宿泊料を依頼者より御支辨を願ひます

▽講演お望みのせつは、東京市外田端三五一「金の船」編輯所宛に御照會下さい。

讀者だより

▽まだ見も知らぬ先生方にだしぬけに手紙を差上げて申譯ない氣がいたしますが、私は小供の世界にひたつてをりますと、丁度あの春の柔らかな光の中にひたつてをるやうな氣がして何ともいへない嬉しさを感じるので御座います。私どもは永くこの子供の世界の中に生存いたし度う御座います。（東京　江口生）

▽四月號の畫についていろ〳〵感じたことが御座いますから申上げます。第一に表紙と口繪が大變によいと思ひました。ぜひ毎月かういふ感じで行つていたゞきたいと思ひます。それから若山先生の「操」の挿畫がいゝものでした。子供はあれを大變に喜びました。またかまど姬の影繪が實によく行つてゐました。影繪は「金の船」獨特ですから毎月かゝさないで下さい。殊に舞臺面があつて結構でした「家なき子」の挿畫も面白い。（京都　一諷導）

▽チリン〳〵、もし〳〵。僕は大正十年一月からの愛讀者です。十二册來るとお母さんが「十二册來たらお止めなさい。」と云ひましたが、よく〳〵お願ひして、又續けて愛讀する事が出來ましたので、大喜びでお知らせ致します。（飯田　山田明）

▽表紙のいゝこと、內容の立派なこと、號を重ねますごとに、より美事になりますのが此上もなく嬉しく存ぜられます。このたびは私の拙ない作みおのせ下さいまして本當に何んとお禮申上げてよいやら分りません。嬉しくて〳〵こんな嬉しい事は御座いません。正子の病氣も大分よくなりまして、この頃はベッドの上でいろんな事をしやべつて居ります。そして「金の船、金の船」つて喜こんで居ります。まだ寒い風が吹きますから、皆樣お身體をお大切に遊しませ。（神戸　二瓶けい子）

▽岡本先生。三月號の「おゝきなさい春が來た」は、ほんたうにかはゆく、ゆめのくにに行つてゐるやうです。又野口先生と本居先生の謠と作曲はほんたうにりつぱです　節を兄さんに敎はつて口ずさんでなります　私は「金の船」の出來た月から愛讀して居ります。これから勉强して投書もいたしますから、よろしく、どうぞお願ひいたします（東京　山下佳子）

童話「雀語」挿繪者

千葉新一郎

▽四月號の童話では齋藤佐次郎先生の「梅若丸物語」その次ぎは植松壽樹先生の「佛樣と泥棒」また童話では佐々木高明君の「雀のおしやべり」が面白かつた。「梅若丸物語」はなんといふ哀れな話だらう。私は讀んで行く內にとうとう泣いてしまつた。先生今後もあんなお話を出して下さい。「佛樣と泥棒」は普嘶のやうな感じがして面白かつた。雀のおしやべり」は私を心から笑せた。あんな童話が僕は大好だ。沖野先生の「父戀し」は讀んで行く毎に面白くなつて行く。おしまひにはどうなるのだらう。岡本先生の表紙は三月號のよりずつと見てゐて氣持ちがよかつた。（山口　田中良夫）

▽岡本先生。久振りに先生の畫はなしが出て僕はをどり上つて眞先きに讀みました。先生毎月面白いものを書いて下さい。（四國　8生）

▽私は古くからの本誌の愛讀者です。私等の地方では「十五夜お月」と「豐作唄」を歌はぬものはありません。野口先生もつと〳〵深山謠を作つて下さい。（茨城　下館藤葉）

▽昨夜棧橋の上で綺麗なお船を見懸けました「父戀し」の牛若丸のお船かと思つてよく見ましたら、それはある南京さんのお船でした。牛若丸のお船はいま何處に綺麗な影をうつしてゐるのでせう。（橫濱　篠田西中）

▽「父戀し」はいよ〳〵面白くなつて參りました。伊吹子のお父さんは何處へ行つたのでせう。私は心配です。沖野先生、早く何處にゐるのか知らせて下さい　（大阪　草野靜子）

▽野口先生！四月號の「二つの小鳥」は實に面白いと思ひました「何原さ吳服屋出すだとさ」の句小供達は喜んでなります。岡本先生の畫も面白く拜見しました。（茨城　愛讀者の諷導）

▽私は十數人の友達と創作童謠童話などの原稿を綴り「輝」といふ同覽雜誌を作つて樂しく暮してなります。その同人はみな私のなつかしい「金の船」の古い愛讀者です。私は今まで一度も投書したことはありませんが、これから張つて投書致します。（東京　菅岡敏雄）

▽私の拙い幼年詩が「金の船」に載つたので、大喜びです。あの作は私の處女作です。今後一生懸命に投書する考へで御座います。それから自由畫に投書した「神秘の扉」のやうな作品はいけないでせうか、おたづね致します。最後に皆樣お手紙下さい。（京都　野口茂雄）

▼自由畫は口繪の樣なのではいけません。「金の船」に出るやうなのがいゝのです。（記者）

▽私は毎月「金の船」を友達にして愉快に學んでゐますが、先月より投　致しました。今後は毎月うるさい程投書致しますからよろしくお願ひ致します。（千葉　羽鳥精一）

△私は第二卷一號から「金の船」の愛讀者ですが、四月號の世界名作童話「家なき子」を讀んで、全く感心致しました。（土佐　吉川章）

▽四月號の中で面白かつたお話をあげて見ますと、「父戀し」や「惡い易者」や「梅若丸物語」や「かまど姬」や「餅の取りあひ」や「佛樣と泥棒」や「鞍馬寺の牛若」等でした。（北海道　伊東三吉）

▽記者先生、弟や妹の綴方や自由畫の住所氏名を僕が書いてやつて投書してもよいでせうか、誌上でお知らせ下さい（紀伊　中本正信）

▼よろしう御座います。（記者）

▽年改まると共に誌齡重なり、貴社益〻御隆盛の段奉大賀候。故國の樣目下嚴寒の頃と存じ候處、記者樣御一同には如何御消光遊ばされ候や御伺ひ申上候。陳者不肖昨年商館の都合上當瓜哇に勤務致し居る者に有之其の後多忙の爲め御無音のまゝ打過ぎ居り候處今回より改め當地より投書お赦し願ひ度くと存じ候間、御指導給はり度く御願ひ申上候。（瓜哇　三上善之助）

▽岡本先生。私は先生の繪が大好きです。眼のくり〳〵した顏の丸い可愛いゝ子供が大好きです。今度の表紙は春の朝に寢る子供たちですね。（東京　立石百合子）

▽私は左へ轉居致しました。『旭川區七條通十四丁目左二號七條館』です。（合田重吉）

▽僕はこの間初めて「金の船」を讀みました。內容の充實と有益なるに感心しました。倘他雜誌に比して穢きものが少く、讀み切りものが多いのを大變感じよく思ひました。倘一層の發展を祈ると共に、これから後は妹にも續けて買ふ樣すゝめました。（トキガミネセイ）

▽樂しい春のシーズンが訪れて參りました。美しい鶯の音と共に、私はいよ〳〵文藝に努力いたして居ります。（愛知　石原俊水）

童謠「[illegible]」挿繪者

二瓶けい子

▽家の梅はもう咲き出しました學校で童謠にもこの梅と云ふ題で綴つたら甲を貰ひました。今度はこれを寫生しようと思つてゐます。そして山本先生に見て戴かうと思つてゐます。（宮城　荒川陽一）

▽先生こんどから探偵小說のやうなものを出して下さい。（ピー生）

▽大變暖かになりました。冬が過ぎて、信州にも春が訪れました。雪の消えた處には、青い若い芽が見えます。「金の船」三月號を見まして、「おてんとさんの唄」が歌ひたくなりました。「おてんとさん社」は仙臺のどこにありますか、お知らせ下さい。（長野　高橋芳三郎）

▼「おてんとさん」社は、仙臺市八幡町廿九番地　天江登美草氏方です。（記者）

▽今日は朝から氣持が惡くて怒つて居ましたが、そこへ美しい表紙の「金の船」三月號が屆きましたので、すつかり晴れ〴〵しました。それから今度はすつかり詩的になつたのですれ。私は何時迄も〳〵見飽きませんでした。「お起きなさい春が來た」なんといふ詩的な優しい樂しい美しい言葉でせう。今後あんな表紙ばかりにして下さい。（廣島　山崎金鈴）

▽私は童謠と幼年詩が大好きです。「金の船」が來ると一番先きにそれを讀みます。投書したい〳〵と思ひますが、童謠と幼年詩の區別が判らないので困つて居ります。先生どうぞその區別をお敎へ下さい。（北海道　佐藤三信）

▼童謠も幼年詩も同じものです。大人の作と子供さん達の作とを區別する爲めに、幼年詩としただけです。（記者）

▽ピカ〳〵光る「金の船」。私は誌友になる迄どんなに憧れてゐた事でせう。しかし遂に皆樣のお仲間に入れて戴く事になりました。是れから大に投書もしませう。（福岡　川野實）

▽童謠、圖畫等をお送りする時は、開封でよいのですか。（廣島　梅の花）▼それでよいのです。（記者）

▽丁度「金の船」を讀みはじめて一年になりますが、どうしても止められません。それは記者樣のお骨折の爲でせう。私は毎月綴方と幼年詩と圖畫を投書してゐますが、賞になつたことは一ぺんもありません。きつと努力がたらないのでせう。（神戸　高橋久藏）

懸賞創作募集

◈少年少女の創作◈

自由畫……山本鼎先生選
幼年詩……若山牧水先生選
綴方……編輯部選

〔注　意〕

課題は何でもかまひません。諸君の日々見たり、感じたりすることから、諸君のすきなものを諸君のすきなふうに畫なり、詩なり、文なりにしてかいてください。一人で何題出してもかまひませんが、姓名は學校や學年(または住所と年齡)とともにおとさないやうにしてください。用紙は自由畫はなるたけ畫用紙に、幼年詩や綴方はなるたけ原稿用紙(または半紙)にかいてください。よく出來た方には『金の船』特製の賞品を差上げます。次號締切は四月廿八日(その以後は次號へ廻る)發表は五月號、宛名は東京市外田端三百五十一番地「金の船」編輯所。

◈一般讀者の創作◈

童話……齋藤佐次郎先生選
童謠……野口雨情先生選

〔注意〕

童話は二十字詰二百行以內、童謠は二十行以內、優秀な作品は「推薦」または「特選」として發表いたします。推薦の場合は童話には五圓、童謠には二圓づつ、特選の場合は童話には拾圓、童謠には五圓づつ賞金として呈します。但し少年少女の創作童話にして「入選」の場合は「金の船」賞を呈します。締切發表宛名は少年少女の創作と同じです。原稿には必ず住所姓名を記して下さい。原稿はお返しいたしません。

定價壹冊參拾錢 送料壹錢
三ケ月分三冊(送料共)九拾錢
半年分六冊(送料共)壹圓八拾錢
壹ケ年分十二冊(送料共)參圓六拾錢
但し新年號四月號九月號は特別號で卌五錢ですから、御註文の節はこの號だけ必ず一冊五錢づつ加へてお拂込み下さい。
振替口座東京參〇五七貳番

(送金の注意)
▽御註文は必ず前金で御拂込み下さい
▽送金は振替が一番便利で御座います
▽切手代用は(壹錢切手)一割增しです
▽第何卷第何號よりと書いてください
▽住所姓名ははつきり書いてください

廣告料は御照會次第お答へ致します

大正十一年四月六日印刷納本(每月一回
大正十一年五月一日發　行(一日發行)

東京市外田端三百五十一番地
編輯兼發行人　齋藤佐次郎

東京市小石川區久堅町百八番地
印刷人　大橋光吉

東京市小石川久堅町百八番地
印刷所　株式會社博文館印刷所

東京市外田端三百五十一番地
發行所　『金の船』社
電話小石川五三八七番

ほるぷ出版複刻版'83

將にシーズン來る

□好評嘖々たる

マンドリン

定價表
A號　九圓五十錢
B號　十二圓八十錢
C號　二十一圓三十錢
その他五十圓まで

□賞讃の的となれる

ヴァイオリン

定價表
壹號　九圓五十錢
貳號　十二圓八十錢
參號　二十一圓三十錢
その他七十五圓まで

諸君の爲代理部の開設

一　値段其他の御希望を明細記入の上御注文になれば責任を以て必ず諸君の滿足の出來る品を撰擇します

□素人向きのカメラ□

定價表
十二圓
十八圓
廿二圓
廿六圓
三十二圓
五十三圓
七十五圓

御問合せは必ず往復葉書か返信料添の事。
御注文は住所を分りよくくわしく書く事。
代金は總て前金の事、剩餘の節は返金す。
拂込みは成るべく振替口座に拂込むこと。

キンノツノ社代理部
電話九段貳千七百五十貳番
振替口座東京參〇五七貳番

型錄入用の方は貳錢切手二枚要す

大懸賞募集

日本少年團

▽面白くて有益なこと日本一、日本に於ける最初の少年團雜誌。
▽安くてよく賣れること日本一、世界に唯一無比の少年團雜誌。
▽創刊五月號は四月十五日頃發行賣切れぬ内早く申込まれよ。

定價一冊十二錢
送料五厘

三ヶ月分送料共三十五錢
六ヶ月分送料共七十錢
一ヶ年分送料共一圓三十錢

發行所
東京市下谷區南大門町十六
日本少年團本部

橋爪靜波先生著　四六版クロース上製

（新刊）

寫眞術の話

定價一册　壹圓二十錢
送料書留十六錢

寫眞をやつて見ようと思ふ人は、先づ此の橋爪靜波先生の寫眞術の話を一讀する必要がある。誰にでも分るやうに全部振假名付きで其上寫眞版入で說明してあるから此上ない良書である。

代金引替にて送る

東京市麹町區飯田町六
キンノツノ社代理部
振替東京三〇五七二番

ナカヨシ

◀お孃ちやんのお友達▶

定價一冊廿五錢
送料五厘

五月號

六冊半ヶ年分
送料共壹圓五十錢

奇麗な奇麗な手工附錄

上中流の家庭で何故我社發行の「ナカヨシ」がもてはやされるかと云ふ事を調査して見ました。其結果は繪が上品で美しくて、書いてある事が一字一句の末に到る迄兒童の敎育上周到な注意を拂つてあるからだと云ふ事でした。

美しい繪とお伽話で一杯の幼女繪雜誌

それから女の子が一度「ナカヨシ」を見ると、他の雜誌では承知しない譯は、繪とおはなしとが純な子供の心持にしつくりあつてゐるからだと或學校の先生が申されましたが、確かにこの點は我社の誇りとする處で御座います。

家庭に無くてならぬ繪雜誌

東京麹町飯田町六丁目二十五番地
▶キンノツノ社◀
電話九段二七五二　振替東京三〇五七二
發行

無人島

翌る日の正午過ぎに、田邊の榎木廻漕店から式江宛に手紙が來ました。讀んでみますと商造は田邊の町で、お米や、乾魚、味噌醤油のやうなものを、澤山買ひ込んで、船に積んだまゝ、何所とも知れず港を出てしまつたといふ事が書いてあるだけでした。

『そんな物を船に積込んで、どうする積りだらう？』と、式江は涙ぐみながら手紙を繰返し繰返し讀んでゐる所へ、作爺さんと熊田先生とが尋ねて來ました。

『田邊から、何とか音信がありましたかい？』

作爺さんは肩にかけてゐた、豆絞りの手拭で、口

少女界

愛する妹の讀物　可愛き我娘の爲の少女界

少女ローマンス　カンバスの前に立ちて……美智子
少女小説　チューリップ……黑田まゆみ
少女童話　小王女物語……小野美智子
詩ものがたり　愛の胸人……泉貞子
少女小説　廢校のあと……夕月
繪畫ローマンス　あこがれの都へ……横山ひさあつ
少女童話　不思議なお禮……廣田花崖
傳說物語　かぐや姬……原義孝
少女の印象……小松多美
少女詩　葩のなげき……横山美智子
少女童話　谷の魔物……長尾豐
少女詩　眞紅の文字……若月きく江
あべこべだつたら……紺三郎
少女小說　生あるものゝ尊さ……横山美智子
少女冒險小說　S公爵夫人の首飾……長瀨秀麿

のあたりを拭きながら訊きました。

『はい、こんな手紙が……』と言つて、式江は手紙を熊田先生の前に差出すと熊田先生はそれを披いて、小聲で讀みました。作爺さんは耳を傾けて聞いてゐましたが、

『そいつは、金毘羅詣りぢやアない。』と不意に大きな聲で言つたので、式江も熊田先生も吃驚しました。

『では、何所へ行つたのでせう？』と式江は周章てゝ訊きました。熊田先生も眼を睜つて、作爺さんの顏を見ました。

『俺ア商造さんから、こんな話を聞いた事がある。商造さんが濠洲通ひの船に乘つてゐた頃、何でも日本と支那との間に、大きな島を見付けたといふ事ぢやこりやア、屹度其の島へ行つたのに違ひない。』

作爺さんは、さう言つて、ぢつと考へ込んでゐました。

『日本と支那との間？　それは全體、何といふ島です？』

熊田先生は信じられないやうな顏付で尋ねました。

『明坊が、やつとヨチ〳〵歩き初めた頃ぢやつた。俺は商造さんと二人で、御手洗の濱へ、暴風で毀れた船を見に行つた事がある。其時商造さんは、其の島の事を俺に詳しく話した。だが、俺は最う殆ど忘れてしまうた。何でも濠洲通ひの船が、支那から日本へ歸つて來る途中で、大きな島を見付けたのぢやさうな。それで、其の島へ船を着けてみようとしたが、暗礁があつて、近寄れないから、船長は水夫に言ひつけて、ボートに乘つて、島を檢べて來いと言つたのぢやさうな。其時ボートへ乘つて其の島を詳しく見て來たのが商造さんぢや。周圍が十里もあらうと思はれる大きな島で、其中に大きな湖水があつて、土地

もよく肥えてゐたさうな。商造さんは、どうも其の島の事は、今に忘れられないと見える。何とかして新しい船を一艘造つて、三月分の食物を積込んで其所へ行つてみたいと、其時しみ〴〵と言うてゐた。そりやア屹度、其所へ行つたに相違ない。』

作爺さんは、さう言つて、頻りに獨りで、合點々々をしてゐました。

『奥様に、そのお話は致しませんでしたか。』と熊田先生は尋ねました。

『若い時、濠洲のシドニイへ行つたといふお話は度々聞きましたが、その島のお話は、一度も伺ひませんでした。』

式江も、作爺さんの話を信じられないやうに、疑の眼で赭黒く日やけのした作爺さんの顔を眺めました。けれども作爺さんは、益〻自信のあるやうな聲で、

『それは奥様に相談したなら、屹度そんな遠い所へ行くのは止したが善いと言

ふに決つてるから、默つて居たんぢや。屹度さうぢや。何でもあれから商造さんは、二三千圓の纒つたお金が欲しい〳〵と言つて居られた。それは屹度、そのお金を資本に、その無人島を拓きに行きたいといふ願ひであつたに違ひない。あの異人船の引揚げを請負うたのも、つまり其の島を拓きに行く資本を欲しかつたのでせう。』と言ひました。

熊田先生は、作爺さんの話を聞いてゐるうちに、どうも商造が其の島へ渡つて行つたらしく思はれてなりませんでした。

『まさか、そんな事はありますまい？』とは言つたが、式江の心にも思ひ當る事がありました。

商造は幼少の頃から、山よりも海が好きでした。だから十六の時、家を出て

和船の水夫になつて、九州通ひの船に乗り込みましたが、十九の年には、陽明丸といふ大きな汽船に乗つてオーストラリヤの方へ通ふやうになつたのでした

まだ子供上りの、若い少年ではあつたが、艪を推させても、楫を握らせても、人並優れた腕をもつてゐるので、船長は非常に商造を可愛がつてくれました。で、商造はボーイになつたり、火夫になつたり、炊事係りになつたりして、八年間陽明丸に乗つてゐましたが、商造が最後の航海の時に、面白い出來事があつたのでした。

時は秋の中頃で、乗組みの人達が、甲板に出て、涼しい風を懐に迎へながら、

『もう何時間で、琉球が見えるだらう？』

『さア、五時間も經てば見えるでせう？』

『では、最うとつぷりと日が暮れてゐるネ、其頃は。』

『さうですネ、十時過ぎでせう。琉球沖を通るのは。』

などと話し合つてゐる時、どうしたものか沖の眞中に船は靜に止つてしまひました。

『どうしたのでせう？。』

『機關に故障でも起つたのでせうか。』などと乗客が言ひ合つてゐますと、船長室から厳めしい洋服姿を現はした板垣船長は、大きな聲で、

『春日、春日！』と呼びました。その時貨物係をしてゐた商造は、珍らしくも船長が自分の苗字を呼ぶので、何事か知ら？　と思つて階段をデッキの方へ駈け上つてみますと、船長は右手の方を指ざしながら、

『あすこに見えるあの黒點は、確かに島だと思ふ。あアいふ所に島があるとは今まで知らなかつた。これから船をあの島の傍まで近づけるから、春日！　お

前はボートを卸して、島の様子を見て來てくれないか。』と申しました。

乘客の多勢は、デッキの上から、

『島ではなからう？』

『巖だらう。』

『いや、あれは雲だらう？』などと言つて、沖の方を見詰めてゐましたが、船が進むに從つて、段々と黒點は大きく見えて來ました。

『島だ〳〵！　矢張り島だ！』と望遠鏡を手にしてゐた一人は叫びました。

汽船は島から一海里程此方へ停りました。それは島の附近に暗礁があつてはいけないと思つたからでありました。

『春日！　ボートを卸せ！』

船長の命令で、商造は早速ボートを卸しました。

『餘り長く手間取つてはいけないが、四十分間の停船中に、あの島の様子を見て來ておくれ！』

船長は賴むやうに優しく言ひました。

『は、畏りました。』

と言ひながら商造は長い細繩を提げて、ボートに乘込みました。

十五六の年から鍛へ上げた腕に、素晴しい力を籠めて、水を彈いて行くボートは、段々小くなつて、オールの尖がキラ〳〵と光つたと思ふと、ボートは島を東の方に廻りました。十分廿分と、時の經つのを待つ間に、乘客は口々に、

『何といふ島だらう？』

『人が住んでゐるだらうか。』

『蝮蛇が居るかも知れない？』などと言つてゐました。

　もう時計は四十分を過ぎました。けれどもボートの影が見えないので、船長初め少しく心配し初めました。で、時間の充ちた事を知らせるために、汽笛をブー、ブーと鳴らしますと、島の西の岩蔭で、チラ〱と白いハンカチーフのやうなものを高く振りました。と、同時にボートは波に揉まれながら、勇ましい姿を現はしました。

　乗客一同は、商造が、どんな報告をするだらう？　と、非常な興味をもつて、ボートの歸りを待つてゐました。

　ボートが本船から二十間ばかり離れた時、商造は群集を見上げながら、

『無人島です。中央に大きな湖水があつて、その周圍には葦のやうな草が一面に生えてゐます！』と叫びました。

　乗客は口々に、いろんな質問の矢を放ちました。けれども船長は、

『ボートを揚げてから、其後で緩くりお尋ね下さい。』と靜に申しました。

　商造は梯子を傳つてデッキに登つて來ました。ボートは水夫の手で引揚げられました。間もなく汽船は本土の方へ進行を始めました。

　商造は船長と乗客の前で簡單に、

『島の周圍は七八里でせう。中央に直徑十五六町程の大きな湖水があります。けれども四方の巖壁が、悉く絶壁になつてゐますから、小舟一艘も繫ぐ所がありません。私は此の繩を利用して、やつとの事で、岩角の所へ攀ぢ上りました。しかし、此邊の島には、有名なハヴ《毒蛇》が居ますから、用心して深くは入りませんでした。』と申しました。

『あア、さうか。有難う、では矢張り無人島だナ。』と言つて船長は自分の室へ入つて行きました。

それから間もなく商造は、陽明丸の乘組員を止して、遙々沖繩縣まで出かけて行つて、其の島の事をいろ〳〵と調べてみましたが、琉球の人達は、其島を開墾しようとも、其所へ樹を植ゑつけて見ようとも考へてゐませんでした。

商造は唯一人、自分の心の中で、明けくれ其の無人島の事を考へてゐましたが、たうとう思ひ切つて、其の開墾屆を政府へ差出しました。

間もなく縣廳から開墾の許可書を得ましたが、偖、いよ〳〵開墾に取かゝるとすれば、少くとも一萬二萬のお金を持つて來なければならないので、どうして其の金を手に入れようかと、いろ〳〵と思案に暮れてゐます所へ、紀州の方から電報が屆いて、お父樣の三六が大病だと知らせて來ましたので、已むを得ず、周章てゝ故鄕へ歸つてみますと、もう七十近い老人の三六は、病の床に就

いて三ケ月以上になつてゐました。

三六の勸めで、其年の夏の初めに、式江と結婚しましたが、結婚後間もなく三六の病は俄かに重くなつて、商造 式江とに、後々の事を吳れ〴〵と言ひ置いて、二度と歸らぬ死の門出をいたしました。

さういふワケで、商造はたうとう故鄕に居て、田畑を耕したり、時々は海へ漁に出たりして、いつしか五年七年と、其のまゝに過してしまひました。

けれども商造の心から、唯の一時間も、無人島の事を忘れた事はありませんでした。しかし、そんな冒險な事を言ひ出した所で、誰も贊成する人はありませんので、默つて自分一人の胸に疊み込んでゐたのです。

明次が產れて間もなく、商造の財產は悉皆明次に登記して讓りました。十六の年から二十七の秋まで、船に乘込んで、打たれたり蹴られたりしながら、辛

い苦しい十ヶ年間に、貯めた三千圓の金を、式江と伊吹子とに、半分づつ分けてやりました。

　それは、自分が機を見て、琉球の無人島へ出かけて行つても、後で家内中が差當り困らない用心の爲にさうしたのです。

　或日の事でした。商造は作爺さんと二人で、御手洗の濱へ散歩に行きました。其所は、昔神武天皇が御東征の時手をお洗ひなすつたといふ傳説のある所です。

　麗かな空には一點の雲もありませんでした。鉋で削つたやうな絶壁の上には青い松が頑丈な腕を伸してゐました。沖の方から靜かに紆つて來る浪が、巖に當つて碎けると同時に、無數の鷗が、ぱつと飛び立つ樣は、本當に何とも言ひやうのない美しさでした。

『佳い風景ですネ。』商造は感心したやうに言ひました。

『こんな景色を、江戸や京の人達に見せてあげたいのう。』

作爺さんは、岩に腰をかけて、腰の煙草入を外して、煙管を取出しました。

其時商造は、濱から一町ばかり離れた所に、眞黑いものが、ちらりと浪の間から現はれたのを見ました。

『あ、あれは何でせう？』

商造は驚いたやうに言ひました。作爺さんは、煙管の煙草に火をつけながら

『あれは異人船の艫ですよ。』と平氣で言ひました。

「え！　異人船の艫？』商造は海の方を熱心に眺めながら起上りました。

『さうですよ。私が四十三の年でした。イギリスの大きな軍艦が、此所で暗礁へ乘り上げて沈んだのです。全體が鋼で出來とるちう話ぢやが、其頃の人間は

初夏のお用意は今……

品が良く、買ひ心地よく、その上價が安い、此の三拍子揃ふて居るのが三越であります、初夏のお用意を遊ばされねばなりません、お用意は此の便利な三越に限ります。

◆五月の三越へ

◆格安見切反物賣出し（七日まで）
◆五月人形陳列（四日まで）
◆夏丸帶陳列（一日より）
◆金鈴社繪畫展覧會（三日より）
◆銘仙陳列（六日より）
◆中形浴衣地陳列（十一日より）
◆子供洋服陳列（十一日より）
◆お召さ小紋陳列（十三日より）
◆夏衣裳陳列（廿一日より）
◆定休日◆十日◆二十五日

東京 三越呉服店

鐵の船を引揚げるなんて、そんな事は夢にも知らないもんぢやから、沈み放題に沈ませたんぢや。私も其時、人夫に傭はれて働きに行つたが、えらい事でしたよ。其の騷ぎつたら……』

『さう〳〵、其の話は度々亡くなつた父から聞かされました。あの英國軍艦は此所で沈んだのですか。』

『えヽ、此所ですよ。此の向うの樫野ケ崎でもトルコの軍艦が沈沒した。オスマン・パシヤといふのは、軍艦の名だつたか、艦長の名だつたか、私は忘れてしまひました。』

作爺さんが、さう云つた時、海の中では又た、船の艫のやうなものが見えました。しかも、それは夕日に照されて、キラ〳〵と光つて見えました。

商造は稻妻のやうに、心の中で、或一つの計畫を企てました。

大正八年十月十六日（第三種郵便物認可）
大正十一年四月六日印刷納本
大正十一年五月一日發行（每月一回一日發行）
東京　キンノツノ社　發行